
～ポケモンストーリー～

影虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ポケモンストーリー」

【Nコード】

N0672T

【作者名】

影虎

【あらすじ】

10年前、このポケモンしか住まない世界で主人公、ルカリオは両親を『神の支配者』

と言う組織に殺される…。

ルカリオは両親の敵打ちの為に冒険する…。

全ては神の支配者のリーダー、アルセウスを倒す為に！！

悪夢（前書き）

初☆投稿です○（▽、）○

未熟者ですが、頑張ります！

悪夢

「母さん！ 父さん！ 返事をしてよ！」

周りには焼け焦げた、家や人の異臭や煙が立ち込めており、生存者がいるのかさえ分からない状況であった。

「ルカリオ！」

煙の中で、人を呼ぶ青年のような声が聞こえた

「ここはもう駄目だ 早く逃げるぞ！ 早く！」

「でも… でも！」

「早くしないとあいつらが来るぞ！ 母さん達の思いを無駄にする
気か！」

「……うう」

うなされながらベッドから起きた青年 ——ルカリオだ

「またあの日の夢か… くそっ！」

少しイラつきながらベッドから降りると、低めの声が下の階から聞

こえてくる

「ルカリオ！いつまで寝とるんだ！今日はバシャーモと稽古じゃろ！」

少しダルそうにしながらルカリオは

「分かったよ！すぐ行く！」

部屋の隅にある剣を取り、部屋の扉を空けて螺旋状の階段を急いでかけおりと広場に全身赤い体毛の人がいたルカリオの親友のバシャーモだ。

「つたくいつまで寝てんだよ！…またあの夢でも見たのか？」
バシャーモが問い詰めると、ルカリオは

「…ああまあな」少し疲れた顔で答えた

「そうか…」バシャーモも気まずい気持ちで答えた

「話は稽古が終わってからな。双方準備は？」

そう言っバシャーモの近くにいた白いヒゲを生やした老人のダーテングが言った。それに対しルカリオ達は

「いいぜ」「オッケーだ！」

「では、初め！」

勢いよくルカリオは手に持った剣を地面に叩きつけ、それをバシャーモに向かって切り上げるようにして衝撃波を飛ばした

「風牙あ！」 音をたてながらバシャーモへ向かっていく

「いきなり風牙か！ よっと」 タイミングを見計らってジャンプして避ける

上に飛んだと同時に、勢いよくルカリオに急降下する

「くらいなっ！ 岩砕脚！」

ルカリオは焦りもせず、勢いよく剣でバシャーモの足を弾き飛ばす

「おわっ！？」 体制を崩したバシャーモを追撃するように剣を振り上げ

「今だ！ 風牙！」

ガッツという音とともに思いきりバシャーモの腹にヒットする

「ぐっ！」 無防備だった腹にヒットしたため、そこそこのダメージは受けたが、素早く体制を立て直し、バックステップする。

「へっ やっぱバシャーモはタフだな！」

ルカリオは少し呆れ気味に言う

「次は俺の番だ！」 と言うとバシャーモは、体内に宿る炎を手に宿し、ルカリオに向かって炎を放つ

「くらいな！ フレアバーン！」

凄いスピードでルカリオに火の玉が接近していく

「こんなものっ！」　そう言うところカリオは手に青白い火を宿し、フレアバーンに向かって放つ

「波動弾！」　勢いよくぶつかると、両方の炎が消し飛んだ

「やりやがったなあ！なら…」　次の攻撃を仕掛けようとする

「はいそこまでだ！」

と言ってダーテングが止めに入った

「ちえっ　いいところなのによ」　バシヤーモが残念そうに喋る

「ふいーやっとな終わったか…」　朝の嫌な夢もあったせい、一段と疲れたルカリオはそう言う

「あっちにあるベンチで休んでるわ」　と言うと　右の方に歩いて行った。

続く

悪夢（後書き）

疲れた…

こんだけしか書いてないのに… オリジナルの技を基本的に使います。それをちよくちよくあとがきに書いていきます！

風牙 衝撃波を飛ばす技

岩砕脚 岩をも破壊する強力な蹴り

フレアバーン 火の玉を発射する技

アルセウスの支配（前書き）

第二話です。○（△、▽、）○

改行とかのタイミングが掴めず、読みにくいかもしれませんが、多
めに見てやって下さい？

ルカリオ「なんか今回プロローグみたいだな」

さーせん f ^ | ^ ;

アルセウスの支配

ルカリオ達が住んでいる村は、カルダという親を無くした人^{ポケモン}を世話をしている施設である。

ルカリオやバシャーモもその親の無くした子供であった。――アルセウスの攻撃で

「くそっ　いつになったらアルセウスの奴を倒せるんだ？　まだまだ力不足か…」

今から10年前　アルセウスは数々の町や村を力で支配していた。当然反対する人も数多くいた。

ルカリオの家族が住んでいたラントという村に　アルセウス率いる「神の支配者」と呼ばれる者達がきた。それが悪夢の始まりだった。

「これより私達、『神の支配者』がラントを支配する。　反対するものには裁きを下す　潔く降伏しろ」冷たい言葉でアルセウスが村に話す。

「ふざけるなー！」

「そんな命令だれが聞くかよ！」　と村の人達が叫ぶ中、ルカリオの家族は、「この村は恐らくアルセウス達に支配される。奴隷になるくらいなら私達も抵抗するまで！」父と母はそう話すと、ルカリオとその兄、ガイラルに逃げるように指示する。

ルカリオは「そんなの嫌だ！ 二人とも殺されちゃうよ！」 そう
言って逃げようとする。

ガイラルは「さすがに俺も反対だ。殺されに行くのを黙って見られるか！」 ガイラルも戦いに行こうとすると、呟くように冷たい声
でアルセウスがこう言った

「裁きの磔」

アルセウスの周りがあるプレートを上に取り上げ、 上空から白い
光がラントに降り注ぐ —————

あたりは全て焼け焦げ、生き残ったのはガイラルとルカリオだけで
あった。

その後、ガイラルはカルダにルカリオを置いて、ガイラルは何処
かに行ってしまった。

ルカリオが使っている剣は、父の愛用していたオーラブレードを
ガイラルがカルダに置いていったもので、ルカリオの家族に代々使
われていた名剣である。

「ここにも強い奴はバシャーモくらいだし、このままだとい
えアルセウスに支配される…」

そういう気持ちだが、ルカリオを焦らせていた。

「いっそこの村から出ていって旅に出るか…？ いや、でも俺だけの
力じゃアルセウスは倒せない。」

くそっ！情けないな…」

ルカリオは嘆いていた。

そこへバシャーモが歩いて来た。体の疲れより精神的に疲れていたルカリオを見て、こう言った

「お前、旅に出たいんだろ？ アルセウスを倒す、いや 殺すために」

「っ！」

バシャーモの勘は凄まじく当たる。ルカリオは驚きを隠せなかった。

「…ああ そうだよ」 嘘はつけないと確信したので、諦め気味にルカリオは言った

「ダーテングに話すのか？」とルカリオは言った

バシャーモは

「実は…俺もだ」

ルカリオは絶対にダーテングに報告すると思っていたので、驚きの返答に焦った。

「お前も焦ってんのか？」

「ああ、まあな。」

ルカリオとバシャーモはある考えを思いついた。『誰にも気づかれないように村から出る』という考えであった。丁度今は朝、起きているのはダーテングくらいだ。

「…行くか？」とバシャーモはルカリオに聞く
ルカリオは

「行こう、強くなるために！」

こうしてルカリオ達は村を気づかれないように出て、草原にたどり着いた。

ルカリオ達の冒険の始まりだった

アルセウスの支配（後書き）

バシャーモと旅に出ます！

バシャーモ「やっぱりプロリーグみたいだな」

ルカリオ「だよな。」

だからすいませんってば（泣）

次は新しい町に行く予定です。応援よろしくお願いします！

新しい町 デイメイロ（前書き）

少し文字が多くなりました…

それではどうぞ！

新しい町 デイメイロ

バシャーモ「ずっとカルダにいたせいか、外がとても広く感じるぜ」

ルカリオ「んっ？ あそこに町みたいなのあるよな？」

北の方角をみると、確かに町らしきものがうつすら見える。

バシャーモ「確かに… おっ 看板みつけ！」前方に看板があったので、読んでみると

バシャーモ「なになに、この先に見える町デイメ：イロによるこそ…か」

ルカリオ「デイメイロか」どんな町だろうか。とりあえず町に着いたら、アルセウスに関する情報収集と、強い奴探そうぜ」

バシャーモ「何で？情報収集は分かるけどわざわざ強い奴さがさなくとも」と言うところルカリオは呆れた顔で

ルカリオ「強くなるための旅だろ？　ならその町で強い奴を見つけ
たら戦うんだよ。　もし俺らが負けるくらい強いなら、鍛えて貰う
事もできるし、意気投合したなら仲間になってくれるかもしれない。
だからさ」

バシャーモは納得したようにうなずいた。

その町に向かって歩いて行くと、一人の女性がいた。　長いスカ
ートを履いているような見た目で、赤い目をしていた。

？「うーん…ディメイロってどこだろう…」

バシャーモは不思議そうな顔で

バシャーモ「あの人なんですすぐそこにあるディメイロの行き方がわ
からないんだろう…」

その人は歩いていたルカリオ達を見つけて、尋ねるように聞いてき
た

？「あのう、ディメイロってどこかわかります？　急いでるのに見つ
からなくて…」　　というルカリオは

ルカリオ「えっ？ここから見えてる、あの町ですよ？」

と、不思議そうに答えた。

？「ありがとうございます。デイメイロに帰ろうとしたのに、場所を度忘れしちゃって。助かりました！それでは！」

と言に残して、タッタッタとデイメイロに向かい、走っていった。

バシャーモ「自分がいた場所の行き方が分からないって…方向音痴？」

ルカリオ「そんなレベルじゃないな…」と言うと、デイメイロに向かって歩いていった

デイメイロにつくと、そこはとても活気溢れている町で、住人たちは楽しそうに話していたりしていた。

ルカリオ「賑やかな町だね　かなり広いし、カルダとは大違いだな！」と嬉しそうに言った。

バシャーモ「あ、あそこにいるの　さっきの女の人だね？」　と言って、その女性を指差した。

？「すみませんっ！遅くなりました…」とその女性は、病院らしき場所に入っていた。

ルカリオ「看護師かなんかだったのかな？ あっ、そうだ情報収集しようぜ」

バシャーモ「そうだな」

町にある広場にいた人に話しかけると、

ルカリオ「この町はアルセウスに襲われてないんですか？」と聞くと、男性は

男「いや、もうこの町はとっくに襲われたさ。 つつてももう三十年前くらいの事だけだね。 ここまで復旧したのは皆のおかげさ」と言った。

バシャーモ「なあルカリオ 何でこの町は襲撃されたのに こんなに平和なんだ？ 普通みんな奴隷扱いされたりするんじゃない？」
と言ったら、後ろからおばさんの声が聞こえた

おばさん「この町は、何か奴隷にする価値さえないらしいよ。 何考えてんだか。 まあおかげでこうして楽しく暮らしているけどね。」
ルカリオとバシャーモは疑問に思った。

バシャーモ「奴隷にする価値がない？ ということだろ。」と不思議そうに答えた。

ルカリオ「アルセウスに関してはこれくらいか。じゃ次は強い奴探しだ！」

と言って、張り切って今度は港の方に走っていった。

港につくと、血気盛んな男達がいた。

ルカリオ「こいつらなら、強い奴しってそうだな。なあ！そのアンタ！」

男「俺か？ 何のようだ。」

ルカリオ「この町で誰が一番強いんだ？ 知ってたら教えてくれ。」

男「なんだそんな事か…アイツが来るまでは俺が一番だったんだけどなく サーナイトっていう女だ 情けない話だけどな」
バシャーモ「お、女？ アンタ女に勝負挑んだのか？」

男「挑んだっていうか、夜に歩いてたら 挑まれたな」

ルカリオ「何て女だ…こんなムキムキのおっさんに挑むなんて そいつがどこにいるかわかるか？」

男「病院にいると思うよ 見た目は普通の女性だから まあ頑張っ
て探しな」

病院がある場所についた。

ルカリオ「とりあえず 中に入るか。」

中に入ると、中は普通の病院という感じで、人は少なく あまり使われてないような椅子が数台並んでいた。

ルカリオ「あつ さっきの女の人だ。 聞いてみるか」

女性の肩を叩くと、こっちを振り向き、思い出したような顔をした？「あつ！さっき道を教えてくれた人達！ どうしたんです？」

バシャーモ「サーナイトって人探してるんだけど…知ってる？」

サーナイト「私ですけど？ ま、まさか戦いの申し込みですか？」
と何故か嫌そうな顔をして答えた。

ルカリオ「ア、アンタ！？ もっとゴツい人を想像していたから驚いたよ… さすがに君と戦う訳にはなあ」

サーナイト「いいえ、戦いますよ… ただ、あまり期待しないでくださいね…」

そういうと外にサーナイトとルカリオ達が出ていき、誰もいなくなった夜の広場についた。

サーナイト「さてと… 武器はありでいいですか？ もしいいなら私の使う武器はナイフか銃（殺傷能力が少なめの練習用の物）どちらがいいですか？」

ルカリオ「？　じゃあナイフで　ちなみに俺が相手でもいいかな？　あんまり戦いたくないが…」

サーナイト「ナイフですか…　ならルカリオ…さんでしたっけ？　気をつけて下さい　私、強いですから」　あきらかにサーナイトの雰囲気が変わったのを感じた

サーナイト「では、行きますよ！」

新しい町 デイメイロ（後書き）

さあ新キャラです〇（△、）〇

サーナイト「よろしくです！」

次回をお楽しみ下さい（^O^）

紅き日（前書き）

サーナイトとの戦いが始まりました！

それではどうぞ！

紅き目

戦闘が始まると、サーナイトは手に持った大量のナイフを、上空に放り投げた。

ルカリオ「こんなもん、剣で弾いてやる！」と言い、上空に浮いているナイフに集中した

サーナイト「甘いっ！サイコレーザー！」と叫ぶと、手に白い光が宿り、目にも見えぬ速さでレーザーがルカリオに発射された

ルカリオ「なっ！くそっ！」上に集中していたので、サーナイトのサイコレーザーに感づくのが僅かに遅れ、腕にレーザーがかすった。

ルカリオ「ぐあっ!？」

痛みが腕に走り、痛みのせいで僅かにスキが出来たのを、サーナイトは見逃さなかった。

サーナイト「落ちてきて！ナイフレイン！」そう言うと、念力で空中に浮かせていたナイフの念力を解いた。

すると同時に、ルカリオめがけて落ちてきた。

ルカリオ「二重攻撃かっ！なら、こっちも攻めるまで！」と叫ぶと、ルカリオはサーナイトに向かって走り、剣を下に叩きつけ

一気に振り上げた

ルカリオ「風牙！」

近い距離のため、衝撃波がサーナイトに直撃した。

サーナイト「うっ！」

腹に衝撃波が当たった。

よるめきながら、立ち上がると、サーナイトの目がうつすらと光っていた

サーナイト「私を怒らせましたね… 覚悟して下さい」サーナイトの紅い目が、光っているのを見て、ルカリオ達は驚いた

バシャーモ「おい…なんだあの目の光は！？」と驚きながら喋った。

ルカリオ「俺が知るかよ！ だけど一つだけ分かる… あいつはヤバイ かなりな」ルカリオは嫌な空気を感じていた。

サーナイトはナイフを、真上にまた投げ、今度はルカリオに向かって走ってきた。

サーナイト「我に力を！ サウザンナイフ！」と言うと、サーナイトの後ろに光輝くナイフが大量に現れた。

サーナイト「いけっ！サウザンナイフ！」と叫ぶと、ルカリオめがけて飛んできた。

ルカリオ「何だか知らねーが、ナイフはナイフだ！　おりゃ！」剣を横に振ると、風圧で円形の衝撃波ができ、ナイフに向かって飛ぶ。

ルカリオ「空波斬！」

円形の衝撃波を受け、ナイフは全て地面に落ちた。

サーナイト「くっ！　なら…　ナイフレイン！」今度は上空のナイフがルカリオめがけ、落ちてきた。

ルカリオ「その手はもうひかからねえ！　くらええ！　波動弾！」

波動弾がナイフではなく、サーナイトにめがけて発射された。

サーナイト「なっ！？　避けれな——」

近くにいたサーナイトに、波動弾が直撃した。　どうやら、勝負は決したようだった。

ルカリオ「危なかった…　サーナイト！　大丈夫か！？」

躊躇無く、波動弾を撃ったため、サーナイトを心配するルカリオ。

サーナイト「う、うう…　…あれ？　私は何を？」

サーナイトの傷は浅く、大丈夫そうだった。

ルカリオ「良かった…　てか　戦ってた事覚えてないのか！？」とサーナイトに質問すると、サーナイトは

サーナイト「戦ってたのは覚えているんですけど… ルカリオさんの攻撃が当たった時くらいに記憶がなくて…」と自分でも不思議そうに話した。

バシャーモ「ルカリオの攻撃が当たった時っていうと… ちょうどサーナイトの目が紅く光った時だな。あれは何なんだ？」

サーナイトに再び質問をした。

サーナイト「それは… 紅い目を持ったポケモンのみに出る、謎の能力 だと聞きました。まさか自分もその能力が出たのかな…」と不安そうに話した。

ルカリオ「紅い目の者のみに出る、謎の能力か… 俺も目は紅いけど…俺もでるのかな」ルカリオは、不思議そうに話した。

サーナイト「古い本に書いてありました。

『紅い目をしている者は、強い力が手にはいる代償に、大きな不幸が訪れる』と書いてありました」

ルカリオ「大きな不幸…まさか、俺の村が減ぼされたのは！」気付いたように話した。

サーナイト「何があったかは知りませんが
もしかしたらあなたにも紅き目の力が目覚めつつあるのかもしれない」

ルカリオ「新しい力か… その力でアルセウスに対抗できるのか…」

ルカリオは、僅かな希望を抱いた。　その時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴ

という爆発音とともに、黒い煙が町の入り口に立ち込めていた。

バシャーモ「な、何だってんだ!？」

サーナイト「入り口の方角からです!　行きましょう!」

急いでルカリオ達が入り口に向かうと、そこは真っ赤に燃えた家があり、まるでルカリオの家族が殺されたあの悲劇と同じような状況だった。

煙の中から、竜のような見た目の人がこちらに歩いて来た――

? 「アルセウス様の命により、この町を支配します。　紅い目を持つものを集めて下さい。　それ以外は　始末します。」

兵「了解しました!

オノノクス様!」

ルカリオ「アルセウスの部下だと!？」驚いた表情を見せると、オノノクスはこちらを見て、確信したような顔をした。
オノノクス「おや?　もう紅い目を持つ者がいるじゃないですか。降参しにきたのですか?」と言った。

ルカリオ「ふざけんな！誰が降参したと言った！
うおおおお！」
許さねえ：

そう叫ぶと、オノノクスめがけてはしっていった。

オノノクス「なら、力づくでも連れて行きます。」
余裕の表情をみせた。

オノノクス「すべてはアルセウス様のために！」

紅き目（後書き）

技を出しすぎたので書きますね（汗）

サイコレーザー

エネルギーをサイコキネシスで操り、強力な光線を放つ技

ナイフレイン

ナイフを上投げて、念力で浮かす。

タイミングを見て念力を止め、ナイフを相手に落とす技

サウザンナイフ

紅き目の力を使い、ナイフの威力を倍にして無数のナイフを発射する技。
紅き目が発動している時だけ使える

空波斬

剣をふって起こった風を衝撃波にして放つ技

次回をお楽しみ下さい（＾Ｏ＾）

オノノクスとの戦闘（前書き）

オノノクスとの戦闘が始まりました！

どうぞ！

オノノクスとの戦闘

全力でオノノクスに向かって走っていったルカリオを見て

バシャーモ「あのバカ…！ 俺らも追うぞ！」

サーナイト「はいっ！」

オノノクスに近づくとルカリオは剣を振り上げ、一気に降り降ろした

ルカリオ「風牙あああ！」

オノノクス「やれやれ…ふっ！」

オノノクスは、全く焦らず、手に持った大剣で、衝撃波を真っ二つにした。

ルカリオ「なっ！？
くそっ！」

風牙をアツサリ防がれたのを見て、一步後ろに下がる。

そこにバシャーモとサーナイトがたどり着いた。

サーナイト「援護します！ サイコレーザー！」

白く輝く光を、手からオノノクスに向けて発射した。

オノノクス「竜の舞い」

ルカリオ達の目の前から消えて、サーナイトの真後ろに現れた

サーナイト「えっ…？」

オノノクス「紅き目を持つ人は殺さないのご安心を。」

と言うと、サーナイトの首元を手刀で叩いた。

サーナイト「っ…！？」

サーナイトは気を失って、その場で倒れた。

バシャーモ「強い…！　こんな奴に勝てるのか…？」

その頃、カルダにルカリオの兄　ガイラルが来ていた。

ガイラル「ダーテングさん。　ルカリオいる？」

とダーテングに聞くと、

ダーテング「あいつら…どこかに逃げたんだ！」

と怒り気味に話す。

ガイラル「ははっ！やっぱりな。どこにいるかは代々把握してっから大丈夫。それじゃ行ってくるわ」

ガイラルはデイメイロに向かって走っていった。

ガイラル「デイメイロが騒がしいな… 神の支配者か…？」 少し心配しながら走っていった。

一方、ルカリオ達は

大ピンチになっていた

バシャーモ「強い…！ まるで桁違いだ！」

と息を切らしながら言った。

ルカリオ「はあ…！はあ…！ まだだ！」

そう言うのと、剣を握りオノノクスに向かって斬りかかった。

オノノクス「いい加減諦めなさい。 ふっ！」

大剣を軽々と降り、ルカリオごと吹き飛ばした。

ルカリオ「ぐあっ！」

ルカリオは 近くにあった家の壁に激突した。

ルカリオ「また…俺は守れないのか…？　また、誰かを殺されるのか？

嫌だ…！」

とささやくように叫ぶと、ルカリオの目が紅く光出した。

オノノクス「紅き目が発動しましたか…」

オノノクスは、僅かに焦りを見せた。

ルカリオ「…これが紅き目の力…？　何でもいい！！　俺に力を貸してくれ！」

そう叫ぶと、ルカリオのオーラブレードが青く輝き出した。

オノノクス「…！　なんだあの剣は…？　あんなもの　聞いてないぞ！」

オノノクスはかなり焦っていた。

ルカリオ「これなら…！　いける！」

そう言うと、体制を戻し、オノノクスに向かって剣を大きく振り上げて走った。

ルカリオ「くらえっ！　波動斬！」

オノノクスに上げた剣を一気に叩き降ろした。

オノノクス「があっ!？」

オノノクスに初めて攻撃が当たった。オノノクスは体に大きな斬った後がつき、血がながれているが倒れなかった。

バシャーモ「こいつ 不死身か!？」

バシャーモは驚きを隠せなかった。

オノノクス「ぐう…! だが、私を倒すのは無理のようで。アナタに力も残ってないはず。この勝負 貰いました。」

ルカリオ「はあ…! はあ…! くそっ! ここまでか…!」

諦めかけた瞬間、ルカリオは聞いた事のある声を聞いた。

ガイラル「無茶すんな! 後は任せとけ! ルカリオ!」

ガイラルが外から走ってきた。見た目はルカリオと似ていて、同じく紅い目をしている。

オノノクス「貴様は! アルセウス様が最も危険人物として注意していた 剣士 ガイラル!」

オノノクスはかなりの焦りを見せた。

ガイラル「さーて 俺の弟を傷付けた罪は…重いぜ? ふっ!」

ガイラルは瞬時に目の前から消えて、オノノクスを後ろに立った。

オノノクス「速い！」

ガイラル「剛炎斬！」

ガイラルの持っている剣が力強い紫色に光り、連続でオノノクスに斬りつけた

オノノクス「がはあ！！！」

オノノクスはそのまま地面に倒れた。

バシャーモ「つ、強い…！ あんたがルカリオの兄貴なのか？」

バシャーモは驚きながら質問した。

ガイラル「まあな。 間に合って良かったぜ」

ルカリオ「今までどこ行ってたんだよ！？」

少しムカつきながら聞いた。

ガイラル「わりいわりい。 『神の支配者』 について情報を調べてた。

あとルカリオの剣についてもな。」

と答えた。

ガイラル「…ちっ まだ生きてやがるか… 不死身と言われるだけ

ある」

と言うと、オノノクスは全身に血がついているのに、立ち上がった。

オノノクス「ガイラル！ 貴様を倒さねば… アルセウス様に顔を
会わせられん！」

と叫ぶと、近くにいた兵が オノノクスに話しかけた。

兵「オノノクス様！ アルセウス様が至急戻ってこいとのこと命令で
す！」

オノノクス「そうか… ガイラル 覚えておけ 次は貴様を殺す！」
と言い残すと、オノノクスは兵と共に消えた。

ルカリオ「良かった…」

ルカリオは安心した表情を見せた。

サーナイト「…うう」

サーナイトは目を覚ましたようだ。

バシャーモ「サーナイトも大丈夫そうだし、取りあえずガイラルの
話も聞きてえし、宿に行くか！」

と言って、ルカリオ達は宿に歩いて言った。

オノノクスとの戦闘（後書き）

ガイラル登場です！

まずは新技紹介です。

波動斬

紅き目が発動している時に、オーラブレードに波動の力が宿って相手を斬りつける技

剛炎斬

ガイラル専用技で、波動の力がとてつもなく宿り、連続で斬りつける技。

ガイラルの強さ以上だったかな？

ルカリオ「まあ俺の兄貴だし！」

そうすか（汗）

ガイラル「次回をお楽しみにな！」

あっ セリフ… それでは！

隠れた力（前書き）

オノノクスと同じ神の支配者のメンバーが何人か出てきます

それではどうぞ！

隠れた力

「神の支配者本部」

オノノクス「只今：戻りました。」

兵に応急処置をしてもらったが、まだおぼつかない足取りでアルセウスの前に何とか歩いてきた。

？「アハハ！どうしたのその怪我ー？」

と全身緑色をした蛇のような姿の人がオノノクスに問う。

オノノクス「うるさいぞジャローダ：ガイラルにやられたんだ：」

と少し悔しそうに答える。

ジャローダ「ガイラルねえ：確かに紅い目の人だけど そんなに苦戦するー？ 『不死身のオノノクス』ともあろうお方が」

と言葉を返すと近くにいた肘に刀のような物を両腕につけた人形の人が歩いてきた。

？「いえ、ガイラルはかなりの実力。 ジャローダでも勝てないかも知れませんか？」

ジャローダ「アハハ！ あり得ないよエルレイド！ オノノクス

は油断しただけさ。 でしょ？」

とオノノクスに話した。

オノノクス「フン。 当たり前だ 次は確実に殺る。 必ずな」

と答えた。

エルレイド「さて、アルセウス様 話とは？」

とアルセウスに聞いた。

アルセウス「うむ…」

オノノクスの報告どおりであればそのルカリオの武器は非常に危険だ… 恐らくガイラルよりもな」

エルレイド「危険分子は潰す…と？」

アルセウス「いや…例え危険分子でも紅い目の持ち主だ。 しばらく泳がすか…？」

ジャローダ「私が見てきましようか？ アルセウス様にとって危険か必要か見定めてきます。」

アルセウス「そうか…頼んだぞ」

ガイラル「オーラブレードは、自分の決意や覚悟をエネルギーに変える変異武器だ。多分ルカリオの決意に反応したから青く光ったんだろうな。」

と宿でガイラルが話すとルカリオは

ルカリオ「決意や覚悟に反応する武器？ そんなの使いこなすとか出来るのか？」

と質問すると、古い本を読んでいたサーナイトが

サーナイト「紅き目の力も同じような条件で発動するようですよ。紅き目の力は感情の高ぶりなどで発動するようですよ。」

と答えた。

バシャーモ「まるでオーラブレードは紅き目の持ち主の人のために作られたみたいだな。」

と不思議そうに話した。

ガイラル「いいところをつくなバシャーモ！ 多分そのとおりだと俺は思ってる。だが残念ながら俺もオーラブレードの使いこなす方法が分からない。悪いが自分で見つけてくれ。俺も何か分かったら連絡すつから！ じゃあ俺はアルセウス達に追われてる身だから それじゃな！」

と言って宿から出ようとする、何かを思い出したようにガイラルがこちらを向いて

ガイラル「あ、そうそう！ 神の支配者はルカリオと同じ紅き目の

持ち主を狙っているらしい。気を付けな！」

と言が残して宿から出ていった。

ルカリオ「さて：サーナイト！ 俺達と一緒に旅してくれないか？
あんたの力を貸してほしいんだ！ 頼む。」

とサーナイトに頼む。

サーナイト「いいですよ！ あなた達といると楽しそうですし！」

と元気よく答えた。

バシャーモ「決まりだな。 次の目的地は？」

サーナイト「ここから近い町だと、奥の砂漠を抜けたドラゴスという町がありますね。」

ルカリオ「じゃあそこに行くのにまず砂漠を越えないとな。 行きますか！」

そう喋ると、町を出て砂漠に向かって走っていった。

隠れた力（後書き）

文字が少なくなりました。

バシャーモの出番が少ないのは仕様です。

バシャーモ「どんな仕様だよ！」

そ　それでは次回をお楽しみに！

テス砂漠（前書き）

新キャラ二名出ます！

今回は少し短くなりました…

それではどうぞ！

テス砂漠

ルカリオ「あ、暑い… オアシスはどこだ…」

テス砂漠を歩いているルカリオが疲れながら言った。

サーナイト「まだもう少し先にありますよ… ドラゴス。 バシャーモさんは平気なんですか？」

バシャーモ「ああ。 てか暑かったのか？」

と不思議そうに話した。

バシャーモは炎タイプなので、暑さには強い。 自分の体温のが気温より高いからだ。

ルカリオ「取りあえず、 ひたすらオアシスを探すしかないか…」

しばらく歩いていくと、 ルカリオ達の前方に水が沸き出す泉があった。

サーナイト「あ！ オアシスですよ！」

と喜びながらルカリオ達はオアシスに駆け寄る。
と同時に砂の中から何かが飛び出してきた。

ニューラ「久々の獲物だ！ 金目の物を全て取るぞ！ 皆やっちゃまえ！」

バシャーモ「何だこいつらは!? 盗賊か?」

ルカリオ「何だか知らねえが、ぶっ飛ばす!」

と叫ぶと、風牙をうつ体制に入る。

ルカリオ「風牙!」

相手のニューラに衝撃波が音をたてながら放たれる

ニューラ「痛っ!?!」

と言ったあと、地面に倒れる。

数多くはいるが、戦闘能力は低いようで、ルカリオ達の敵ではないようだ。

バシャーモ「数は多いが、こいつら弱いぜ!」

と余裕でニューラ達を蹴り飛ばしていく。

ニューラ「こ、こいつら強い! 誰か! マニューラさんと呼ばべ!」

と焦りながらニューラが叫ぶ。

すると黒い風のように、何者かが現れた

マニューラ「その必要は無いよ、ここにいるから。」

と瞬時にルカリオ達の前にマニューラが現れた。

サーナイト「盗賊の親玉みたいですね！　くらえっ！サイコレーザー！」

とサイコレーザーを手からマニニューラに発射した。

マニニューラ「私が盗賊？違う違う！ただの雇われた戦い好きのポケモンさ。ふっ！」

と余裕の笑みを浮かべて、軽くレーザーをひよいと避ける

ルカリオ「アイツ…あの距離でサイコレーザーを避けやがった！？」

と驚いた顔で言った。

マニニューラ「さあて…雇われた身なんですね。悪いけど、寝てて貰うよ！」

と喋ると、一瞬でバシャーモとサーナイトとルカリオを気絶させた。

サーナイト「っ！？」

バシャーモ「ぐあっ！？」

ルカリオ「うっ！？」

三人とも気絶し、地面に倒れた。

マニニューラ「後は荷物を回収するだけ――」

と言おうとすると、一体の謎のポケモンがマニニューラ達の眼前に現れた。

？「そこまでだマニニューラ。君も俺と戦いたくはないだろう？」

とその謎のポケモンは言った。オノノクスのように竜のような見た目をしている。

マニニューラ「っ！ ……仕方ないね… アンタと戦ったら勝てるかも分からないのにさ。じゃあさっさとずらかるよ。」

と言い残して、マニニューラは一瞬で風のように消えた。

残ったニューラ達は、そのポケモンを見て逃げ出していった。

？「さて…こいつらをドラゴスに運ばないとな… ガイラルの頼みは断れないからな」

と言うと、ルカリオ達を担いで、ドラゴスがある方面にとてつもないスピードで走っていった。

マニニューラ「盗賊にこき使われるのも飽きたねえ… しっかりさあそこガブリアスに出くわすとは…ついてないねえ。」

と走っていったマニユーラが一言喋った。

マニユーラ「しかしルカリオとサーナイトって奴……紅き目の持ち主だね。私と同じ、嫌な運命せよってるね……」

と何処か寂しそうに話していた。

テス砂漠（後書き）

終わりました…

ガブリアスとマニユーラが登場ですO(ゝ▽ゝ)O

キャラ選抜は作者の趣味です…

もしアドバイスがございましたら、感想覧に書いていただけたら嬉しいです！

次回をお待ち下さい！（bへー。）

竜の里 ドラゴス（前書き）

若干長くなったかな？

それではどうぞ！

竜の里 ドラゴス

「ん……ここは？」

ルカリオが目覚めると、その右隣にバシャーモがベッドで寝ていて、左隣にはサーナイトが眠っていた。

「俺は何でベッドで寝てんだ……？　ここは一体どこなんだ？」

と不思議そうに話すと、ルカリオからみて左側の端にあるドアから竜のような人^{ポケモン}が入ってきた。

「っ！　敵か！」

と言ってベッドに置いてある『オーラブレード』を手を取った。

「安心しろ。俺は『神の支配者』じゃない。」

と話した。

「じゃあアンタは誰なんだ！　答えろ！」

と言ってベッドから起き上がって、戦闘体制に入った。

「俺はガブリアス。アンタ達の監視をしていた。ガイラルからの頼みでな。少なくとも敵ではない。」

とガブリアスは答えた。

「監視……だと？　しかも兄さんからの頼みで？」

とルカリオは少し混乱しながら言った。 状況を全く把握出来ていないからだ。

「解らない事ばかりなのは分かる。だから今から説明するから、二人を起こしてくれ。」

と答えた。それに応じたルカリオは二人を揺すって起こした。

二人共起きたが、今いる場所、何故寝ていたのか、ガブリアスという謎の人、そして監視されていたという真実で頭が一杯だった。

「さあ二人は起こしたぞ。まずここがどこかと、何故寝ていたのかを説明してくれないか。」

とルカリオがガブリアスに質問した。

「お前達が寝ていた理由は、マニユーラに気絶させられたんだ。そしてここは『ドラゴス』の宿だ。俺が連れてきた。」

と答えた。

「マニユーラ：そうだ！俺達オアシスの近くでニューラ達に襲われて…」

とルカリオは言って、少し疑問が解けた。

「ドラゴスまで俺達は連れてこられたのか…」

とバシャーモが不思議そうに話した。

次にサーナイトが残りの疑問の事を話した。

「じゃあ次は、アナタは一体何なんですか？ 後、ガイラルさんに頼まれて監視してたってどういう事です？」

「俺はガイラルの友人だ。『反・神の支配者』というチームと一緒に戦った仲だ。監視していた理由はお前達の旅立ちが早すぎたからだ。」

と答えた。

「『反・神の支配者』？ そんなのがあったのか。旅立ちが早すぎたってどういう事だ？」

とルカリオはまた質問した。

「実は、お前達はいつかカルダから旅立つ予定があったんだ。十分戦えるようになるまでな。だがお前達は勝手にカルダから抜け出した。それでガイラルがお前達が死なないように見張ってくれと頼まれたんだ。」

と答えた。

「旅立つ予定って：最初からそう決まっていたのか！？」

と驚きながらルカリオは話した。

「もう疑問は消えたか？ では俺の話をさせてもらおうぞ。 単刀直入に言う。お前達でアルセウスを倒せ。と言うより お前達にしか倒せない。恐らくな」

と話した。

「え？ それってどういう意味だ？」

とルカリオは話した。

「お前の紅い目の力と、『オーラブレード』の力を合わせないと、アルセウスは殺せない。いくら普通の剣で斬っても傷しかつかないからな。だから倒せるのはお前しかないんだ。」

と答えた。

「と言うより お前達にしか倒せない。恐らくな」

と話した。

「そう…なのか？ 俺にしか倒せない…？」

と戸惑いながらルカリオは話した。

「ガブリアスさんは、何故そんな事知っているのですか？ まるで自分が『神の支配者』にいるような口振りじゃありませんか？」

とサーナイトが質問した。

「それは————」

とガブリアスが何か話そうとした時、ガブリアスは何かを感じ取った。

「すまない。話は後にさせてもらおうぞ。外に恐らく『神の支配者』

の手下が来ている。」

と言うと、ドアを開けてすぐの階段を使って下まではしっていった。

「何！？俺達も行くぞ！」

とルカリオは言う、ルカリオ達はガブリアスと同じく下に階段を使って走っていった。

ガブリアスは宿の一階に既にいなく、外に行くためのドアが開いていたので、そこから走って出ていったようだ。

ルカリオ達も続いて走っていくと、外は太陽が輝いており、宿とは桁違いの暑さだった。辺りを見回すと、ガブリアスと『神の支配者』の幹部の一人、ジャローダがいた。

「貴様はジャローダか？何をしにきた。」

とガブリアスがジャローダに問うと、

「何しに來ただって？　アハハ！　決まってるだろー？　ルカリオを見定めに來たのさ！　ガブリアスせんぱーい！　イヤ、元『神の支配者』幹部　『音速のガブリアス』！」

と答えた。

それを聞いていたルカリオは

「元…幹部だと！？」

と困惑しながらガブリアスに聞いた。

するとガブリアスはこう答えた。

「ああそうさ。俺は元幹部、ガブリアスだ。今は違うけどな」と話した。

「そしてこいつはジャローダ。通称『非道のジャローダ』殺人を楽しむ快樂殺人者だ」

と話した。

「アハハ！酷いなー先輩！人を殺すことの喜びを何で分からないのー？ルカリオの村みたいに大量殺害するのが一番楽しいじゃないかよー？」

と楽しそうに話した。

「俺の村みたいにな…だと！？許さねえ…俺はお前を許さねえ！！！」

とジャローダに叫ぶと、とてつもない怒りと憎しみの感情で紅い目が発動していた。

「私を怒らせましたね…アナタみたいな人は許しません！」

とサーナイトも怒りで紅い目が発動していた。

「おい二人とも落ちつけ！ 相手の力量も解らないのに、むやみに突っ込むなよ！」

とバシヤーモがジャローダに向かおうとするルカリオとサーナイトを止めた。

「うるせえ！ アイツだけは…アイツだけは許さねえ！」

とルカリオは叫んだ。

するとガブリアスは

「ジャローダは強い。俺が手伝わないと勝てない。だからあまり無茶はするなよ。」

とルカリオに言った。

「うわー！ ガブリアス先輩とも戦うのかー。こりゃキツイねー
ならルカリオ達はいつと戦ってもらうかな。おいで！ 我が部下、
アーボック！」

と言うと、ジャローダの後ろからうつすらと影が見えた。

「はっ！ ジャローダ様！」

と言うと、アーボックがジャローダの右隣に現れた。

ルカリオは

「絶対にあの野郎を倒すぞ！行くぞ！」

と叫んで、アーボックに向かって行った。

竜の里 ドラゴス（後書き）

ジャローダのキャラ崩壊しすぎだよな…

実際のポケモンはこんな性格じゃないのでご安心を！

バシャーモ「また出番少なかったよな。俺。」

気のせいです。た、多分

次回をお待ち下さい！（bへー。）

非道のジャローダ（前書き）

ジャローダとの戦闘です！

技を考えるのに苦労しました…

一個普通のポケモンの技がありますが、それは後書きで解説はしませんので！

それではどうぞ！

非道のジャローダ

「どけ！俺が用があるのはそのジャローダだ！」

と立ち塞がるアーボックに向かってルカリオが叫ぶ。

「どいてほしいなら…俺を倒してみな！アイアンテール！」

と返すと、アーボックの尾にあたる部分を鉄に変形させ、おもむろにルカリオめがけて振り回してきた。

「なら…力ずくでもどかさぜ！ 火炎拳！」

ルカリオの後ろから走ってきたバシャーモが、身体中の炎を走りながら右手に集めて、ルカリオに目掛けて飛んでくる鉄の尾目掛けて振りかぶって殴った。

「なっ!？」

鈍い音とともに、アーボックに火炎拳が尾にヒットした。

アーボックは鉄に変形させた尾ごと、宙に浮いた。

「次続きます！ サウザンナイフ！」

とルカリオの十メートルほど後ろにいたサーナイトが、光輝く無数のナイフをサーナイトの後ろに出現させ、アーボック目掛けて発射した。

ルカリオに打ってきたサウザンナイフとは桁違いの速さでナイフはアーボックを切り裂いた。

「ぐあー!!」

二人の攻撃がヒットしたため、かなりの隙が出来た状態で、しかも宙にまだ浮いている。

ルカリオの絶好の攻撃チャンスであった。

「俺はジャローダを倒す! 邪魔はさせねえ!」

ジャローダを倒すという覚悟が、『オーラブレード』の力を発揮させ、剣は青白く光輝いた。

ルカリオは大きくジャンプし、アーボックに向かって剣を振り上げた。

「くっえ! 波動斬!!」

振り上げた剣を、アーボックに向かって一気に叩きつけた。

「ぐああああ!!」

斬りつけた衝撃で、アーボックは地面に叩きつけられた。

「終わったか…?」

と土埃で全く見えないルカリオ達の方を見て、少し安心しながらガ

ブリアスが話した。

「どこ見てんのー？ アンタの相手は僕だよ！ ローズウィップ！」

ルカリオの方を見ていたガブリアスに向かって、ジャローダは背中から出てきた六本の鋭いトゲが生えているムチで、ガブリアス目掛けて叩きつけてきた。

「分かっている。ふん！」

別々の方向から来るムチを、一本一本全て鋭く尖った爪で弾き飛ばした。

「アハハ！やるねー じゃあ次は…バレットシード！」

弾き飛ばされたムチの先端が二つに割れ、中から種が現れ、ガブリアスに放たれた。

その数、約六十発。

「竜牙昇！」

と言うと、ガブリアスは思いきり拳を振り上げ、その凄まじい風圧で飛んできた種を全て弾き飛ばした。

「さっすがー！ でも遊びは終わりだよー 実は最初からガブリアス先輩は終わってたんだー」

と顔色一つ変えずにガブリアスに話してきた。

「…何？」

とガブリアスが警戒しながら言葉を返すと、ジャローダは笑いながら

「アハハハハ！　じゃあサヨナラ！　ヘルプラント！！」

と高笑いしながら、ガブリアスにバレないように地面に張り巡らされたムチが一気に地面中の養分を吸って、巨大化したムチが地面から突き出てきた。

「何だと！？　くっ…」

突き出てきたムチが地面を裂いて出てきて、足場が全て不安定になり、右や左から襲いかかるムチを避ける事に精一杯であった。

「今だね！　いけっ！」

とジャローダが叫ぶと、ガブリアスの真下から巨大なムチが突き出てきた。

「くそっ！　牙突！」

真下から来るムチを、拳を振り上げ、一気に肘で叩きつけた。

だが全くダメージを受けてなく、ガブリアスは腕事身体が宙に浮いた。

「ぐっ！！」

宙に浮いたガブリアスを追撃するように、巨大化したムチの先端が

割れ、巨大な種が現れた。

「これで終わり！バレットシード！」

と言うと、宙に浮いたガブリアスに目掛けて大量の巨大な種が発射された。数も大きさも二倍だった。

「くそっ！避けられないか！」

避けれないとふんで、両腕でガードしようとすると、何かが種に目掛けて飛んできた。

ルカリオの波動弾だ。

その波動弾は、紅き目が発動しているため威力が桁違いで、一つの種に当たると、大爆発を起こして全ての種を吹き飛ばした。

「大丈夫か！？ガブリアス！」

無事アーボックを倒したルカリオ達が駆けつけてきた。

波動弾の爆風でガブリアスは少しダメージを受けたが、無事地面に着地した。

「ちっ！思い通りにならないのはつまらないね！」

と悔しそうにジャローダが言った。

「俺はお前を倒すぜ！覚悟しな！」

とジャローダにルカリオが叫んだ。

非道のジャローダ（後書き）

いかがですか？　まずは技紹介です。

火炎拳　拳に炎を纏わせ、相手を殴りつける技。

ローズウィップ　トゲの生えたムチで、相手を叩きつける技。

バレットシード　トゲの先端から種を大量発射する技。

ヘルプラント　ムチを地面に張り巡らせ、養分を吸いきり、渴いた地面から巨大化したムチが襲いかかる技。

竜牙昇　拳を振り上げ、風圧で自分の回りの物や人を弾き飛ばす技。

牙突　拳を上突き上げ、一気に降り下ろすエルボー。

こんな所ですかね。

見てくださっている方、次回をお楽しみ下さい！（bへー。）

決着（前書き）

ジャローダ戦、終了です！

バシャーモの出番が『完璧』に無かったです。

「バシャーモ（ゝ・ω・）…」

それではどうぞ！

決着

「アーボックやられちゃったのか… 使えない奴だね」

と倒れて気を失っているアーボックを見て呆れたようにジャローダは話した。

「人を物みたいに使う… 変わってないな。ジャローダ。」

とジャローダにガブリアスが語りかける。

「アンタもだよガブリアス先輩。相手が誰だろうと絶対に挫けない冷静さが。ムカつくほど変わってないさ！」

と怒りながらガブリアスに言葉を返した。

「そうかもな…。そろそろ、引いてもらうぞジャローダ！」

とジャローダに退却するよう話した。

「まだだね。ルカリオ達が必要か見定めるからね。」

と言いつつルカリオ達の方を向いた。

それを見たルカリオが

「上等だ！ 行くぞ！」

と言ってジャローダに向かっていった。

「風牙！」

走りながら風牙を打つ体制に入り、ジャローダに打ち込んだ。そして放たれた衝撃波は、いつもとは桁違いの大きさで、速さも二倍だった。

「…へえ。速いね。　だけど威力は不十分だ！　アイアンウィップ！」

と速さには驚いた様子だが、背中から出てきたムチを、鉄に変形させ、衝撃波を叩きつけて相殺した。

「ならこれはどうだ！波動斬！！」

とジャローダのすぐ側まで接近したルカリオが、波動斬をジャローダに放った。

「ガードリーフ！」

放ったと同時に今度は背中から大きな葉っぱを出して、波動斬を防いだ。

「っ！！！」

防いだとはいえ、体に痛みが響き、少し痛そうな声を出した。

「波動斬まで聞かないのかっ！　くそっ！どうすればいい！？」

渾身の波動斬が防がれ、思わずルカリオは驚いた。

「さあて、そろそろ帰りますかね。　アルセウス様にはこう伝え

るよ。『ルカリオは使えない』とね！　アハハハハ！！」

と高笑いしながら、アーボックと共に瞬時に消えた。　どうやら部下のテレポートで帰還したようだ。

「くそっ！　まだまだ力不足だ…」

と悔しそうにルカリオが話した。

それを見ていたガブリアスがこう答えた。

「俺についてこい。強くなりたいなら、絶好の場所がある。　ずいぶん遠くにあるが…一緒に来るか？」

と話した。　返事は決まっていた。

「ああ！　俺は強くないといけないんだ…　あいつらを倒すために！」

と答えた。

それを見ていたサーナイトは、こう思った。

「強くなるのは賛成だけど…　本当にこの人を信用していいのでしょうか…」

と考えていた。

く神の支配者本部く

「今戻ったよ。」

とジャローダがエルレイドに言った。

「おや。遅かったですね。 どうでした？ ルカリオは。」

とジャローダに尋ねた。

「てんで駄目だね。 戦い方も慣れてないし、 剣も使いこなしてない。 ただ——」

と何かを話そうとした。

「ただ、何ですか？」

と質問した。

「ただ、僕の技、ガードリーフでも完璧に防げなかったんだ。 今まで全ての攻撃を完璧にガード出来たのに： 気に入らないね。」

と答えた。

「ふむ： まだ何とも言えませんね： しかもルカリオを倒すとなるとガブリアスやガイラルも関わってくる。 しばらく様子見ですね。」

と話した。 近くに歩いてきたオノノクスが、ガブリアスという言葉に反応した。

「ガブリアス…？ あのガブリアスがルカリオ達に味方してるのか！？ 裏切り者め…！」

と激昂した。

「オノノクス…。やはりまだ許せないのですか？ アナタの最高のパートナーでしたのに。」

とエルレイドが話した。

「…今と昔は違うんだ。 アイツは変わったのさ。 冷静さ以外はな。」

と話した。 どこか寂しそうだった。

決着（後書き）

とりあえず技紹介です。

アイアンウィップ ムチを鉄に変形させ、叩きつける技。

ガードリーフ あらゆる攻撃を完璧にガードする技。

では、次回をお楽しみに！！

番外編！キャラ紹介など。

すいませんね〜（汗）

何となく小説だけじゃキャラが良く分からないかもしれないと思い、書かせて頂きます。

これを見て、興味を示してもらったら嬉しいです。

最初は主人公です。

ルカリオ（17才♂）

武器 剣

十年前に親をアルセウスによって亡くし、敵を討つために旅に出た。紅き目の力とオーラブレードという剣を使い、戦う。性格は勇敢で、頭に血が登ると暴走することがある。ストーリーでは使っていないが、体術も得意。

一人称 俺

バシャーモ（19才♂）

武器 素手

カルダで働くルカリオの兄貴分。親はアルセウスの事を調べていたが、アルセウスの部下によって殺害された。バシャーモにとってアルセウスを倒す理由は敵討ちではなく、アルセウスの今までの行動が気に入らないからである。性格は勇敢で、主に打撃中心だが、遠距離技もある。

一人称 俺

サーナイト（18才♀）

武器 ナイフと銃

デイメイロでルカリオ達と出会った紅い目のサーナイト。デイメイロで看護師をやっている。（今は休業中）冷静な性格だが、極度の方向音痴。

ナイフと念力のコンビネーション技が得意。家族関係は今は謎です。

一人称 私

ガブリアス（30才♂）

武器 自分の爪や拳

元神の支配者幹部の通称『音速のガブリアス』と神の支配者から呼ばれていた。今は神の支配者から抜け出して、ガイラルと共に行動していた。ガイラルに頼まれた事は断れないらしい。性格は静かで、

冷静。常人には目で捕らえられないスピードで爪で攻撃する。

一人称 俺

ガイラル（26才♂）

武器 剣

ルカリオの兄貴。 神の支配者と互角の實力を持ち、かなりの實力者。 アルセウスを倒すため、各地にまわり神の支配者の情報を集めている。 明るい性格だが、どこかに冷静さを持つ。 戦い方はバランスがとれており、スキが少ない。

一人称 俺

神の支配者のメンバー

アルセウス （?才?）

武器 ?

年、性別、武器、目的など全く不明。 冷徹な性格。

一人称 私

オノノクス（30才♂）

武器 大剣

神の支配者のメンバー、通称『不死身のオノノクス』。かつてガブリアスのパートナーであり、とても仲が良かった。だがガブリアスが神の支配者から抜けた事により、感情が高ぶると押さえられなくなり、荒々しく変貌する。ガブリアスを恨んでいる。戦い方は豪快に大剣を振り回し、相手を吹き飛ばす。大剣は愛剣のドレッドノートという剣を使っている。一人称 私、俺

ジャローダ（26才♀）

武器 尻尾やムチ

神の支配者のメンバー。通称『非道のジャローダ』。オノノクス達の後に神の支配者に入った。なのでガブリアスを先輩と呼んでいる。性格がとても悪く、仲間を物呼ばわりしたり、残酷な性格をしている。戦い方は独特で、確実に勝てるように何重もの罠をはる。ヘルプラントがそれを示している。

一人称 僕

エルレイド（29才♂）

武器 ？

オノノクスやジャローダのリーダー分で、強さは未知数である。他の二人に比べるとともで真面目な性格でアルセウスに従えてる理由は謎である。武器も戦い方も謎である。

一人称 私

その他

マニニューラ（21才♀）

武器 爪

盗賊に雇われて盗賊達のボスとして働いていた。盗賊には勿体無いほどの実力で、今のルカリオ達では相手にならなかった。ガブリアスの事を何故か知っていた。

一人称 アタシ

アーボック（?才♂）

武器 尻尾

ジャローダの部下。部下の中では強い方だが、ルカリオ達にあっさり負けた。今は神の支配者本部で特訓中。

一人称 俺

こんなところですね。次は二十話すぎくらいに番外編を書くつもりです。

ありがとうございました！

一時の休息（前書き）

少し長文です。それではどうぞ！

一時の休息

「さて、今から出発と行きたいが、準備が必要だ。今日はドラゴスで色々な店でも見ていてくれ。戦闘に使える物があるからな。明日は宿に集合な。」

とガブリアスは言い残して、どこかに歩いていった。

「戦闘に使える物ってなんだ？」

とルカリオがサーナイトに聞く。

「私に聞かれても…武器とかですかね？」

とサーナイトも知らないようだった。

「んーまあ見に行った方が早いんじゃないかね？丁度奥に何か店みたいなあるし。」

とバシャーモが歩き出した。

バシャーモの言った通り、前にはずらっと色んな店が並んでいた。いくつかの店はジャローダのヘルプラントのせいで一旦店じまいをしていた。実質残っている店は数台しかなかった。

しばらく歩いて行くと、バシャーモが店の前で止まった。

「バシャーモ、どうしたんだ？」

とルカリオが聞いた。

「いや、この古びた本が二冊あるんだけどさ、なんだろうなと思っ
てさ。」

とバシャーモは答えた。

「確かに古い本が二冊あるな。ばあちゃん、これ何？」

とルカリオが不思議そうに見たあと、店のお婆さんに尋ねた。

「その本は普通の人には読めなくてね…良かったら、もらってくれ
よ。」

と、強引にルカリオに渡された。

「ええ！？…まあいいけど…。」

と渋々ルカリオはその本二冊を受け取った。

それを見ていたサーナイトがそれを見て、

「…この本、古文で書かれていますね。どうりで読めない訳だ。こ
れ、私にくれませんか？」

とルカリオに本をくれる用に頼んだ。

「いいけど…お前読めるのか？」

とサーナイトに質問した。

「まあ、多少…。宿に戻りましょう。この本、多分戦闘に使える本ですし。」

とサーナイトが返した。そして宿に向けて歩き出した。

「お、おう。」

と少し強引なサーナイトに驚きながらルカリオは一緒に歩き出した。続いてバシャーモも歩き出した。

宿にルカリオ達がついた。ガブリアスが部屋を手配していたらしく、宿屋のおばさんに部屋を案内された。

部屋にルカリオ達は入ると、さっそくサーナイトは本を一冊読み出した。

「題名…『魔術』ですか…。」

とサーナイトが喋った。どうやら題名を読んだようだ。

「なあ：サーナイトって看護師だよな：？」

と小さい声でバシャーモがルカリオに聞いた。

「だと思う…。続き、読めるか？」

とサーナイトに話した。

「はい！ 『魔術の使い方。魔術とは、人に宿るエネルギーを燃料とし、数々の技を繰り出す力である。試しに、腕にエネルギーを溜めて腕を降ってみるといい。』ですって。試してみます。」

と本の通りに、サイコレーザーを打つ容量で腕にエネルギーを溜めて、腕を降ってみた。

すると、腕を降った先に、小さい穴が出来た。

「うわっ！ すごい！」

とルカリオが驚いた。

「これが魔術の最弱ですか。もしかして、サイコレーザーや波動弾とかも魔術の一部何でしょうか。」

とサーナイトが冷静に話した。

「続きを読むですね。『体から直接放つ魔術は、通常魔術といい、

これは練習すれば誰にでも出来る。しかし、次にやる治癒魔法は、一筋縄ではいかない。まず薬草を用意し、手を薬草に置く。』と書いてあります。」

とサーナイトが話した。書いてあるとおりに薬草の上に手を置いた。

「えっと、『手を置いたら、手から薬草をストローで吸うようなイメージでエネルギーをすいとる。成功したら、治癒魔法！』と叫んでさっきの容量で放つ。』やってみます。ふっ！」

と本に書かれている通りに、薬草からエネルギーを吸おうとした。すると、みるみる薬草が枯れ、緑色の光がサーナイトに溜まっていた。

「成功ですね。じゃあ治癒魔法をこの穴が開いた部分に使ってみます。治癒魔法！」

さっきの魔法で穴が開いた部分に治癒魔法を放った。すると、みるみる緑色の光が穴にサーナイトから放たれ、どんどん穴が塞がっていった。

「す、凄い！そんなことまで出来るのか…。」

とバシャーモは驚いた。

「次に行きます。『薬草から取ったエネルギーは、治癒エネルギーといい、傷を治すエネルギーです。それは血液と同じように栄養から作られます。一度取ったエネルギーは永遠と作られ続けます。次の魔法は、一番難しい最大魔法を使います。これは威力が強いのので、練習するのであれば、外でやるほうがいいです。』とのことなので、

皆さん、外行きましょう！」

とサーナイトがルカリオ達に話した。

「分かった。外に広場があったな。」

と二人とも了解し、宿屋から出てすぐの広場についた。

「続きは…『どんな魔術にするかをイメージし、それに必要なエネルギーを取る。水の魔術なら水から、火の魔術なら火からといったぐあいにエネルギーを取る。そしてエネルギーを接種したら後はイメージ通りにエネルギーを放つだけ。』と書いてあります。どんな魔術にしようかな…。」

と話した。

「石からエネルギー取って、大きな石を落とすイメージとかどうだ？ていうか俺らも試そうぜ。」

とバシャーモが言った。

「なら俺は鉄とかからエネルギー取ってくる。バシャーモは最初から火のエネルギーがあるからなあ。」

と言ってルカリオは近くに鉄を探しに行った。

「じゃあ石を見つけたから…ふっ！」

サーナイトは、近くにあった石からエネルギーを吸いとった。

「やった！あとは大きい石を落とすイメージ：名前はグレイブロックでいいかな。魔術！グレイブロック！」

とサーナイトが叫ぶと、空中に大きな石が出現し、何もない広場に落ちた。

「ええっ！？こんな簡単にこんな魔術出来んのか！！」

鉄の物を持ってきたルカリオが、落ちた石を見て驚きながら言った。

「はぁ…でも凄く疲れますね…。」

グレイブロックを打ったサーナイトも驚いていた。

「これは…確かに戦闘に生かせそうだ！」

とルカリオは喜びながら言った。

一時の休息（後書き）

技説明です！

グレイブロック

石または岩のエネルギーを用いて使う中級魔術。巨大な岩を落とす。

長くて疲れた…。

次回をお楽しみに！

進歩（前書き）

魔術の追加が多すぎた…。

少し短いですが、どうぞ！

進歩

サーナイトが放ったグレイブロックは、サーナイトがエネルギーを吸いとると、グレイブロックはエネルギーを周辺に放出し、消えた。

「エネルギーの塊だった…という事ですかね？」

とサーナイトがグレイブロックの正体を話した。

「十中八九そうだろうな。」

とルカリオがサーナイトに答えた。するとルカリオは今いる広場から少し歩いた先の住宅街から拾ってきた針金等の鉄クズに手を翳した。ルカリオも魔術を使うためにエネルギーを吸い取るようだ。

「上手く出来るかな…ふっ！」

すると手を翳した鉄クズから黒色の火の玉のようなエネルギーの塊がルカリオの体に入っていた。どうやら成功のようだ。

「よしっ！成功だ！後はイメージだけだ…けど、どうしようかな。」

と成功に喜ぶと同時に、どんなイメージにするか考え始めた。

すると生まれつき火のエネルギーのあるバシャーモは、どんなイメージにするか考えていた。

「フレアバーンはただ火のエネルギーを放つだけだったから…あれは俺の知らない間に通常魔術を放ってたんだ。どういふのにしようかな…。」

基本、人^{ポケモン}には生まれつきのなんらかのエネルギーを持っており、そのエネルギーの数は17種類確認されている。

サーナイトなら『超』エネルギーがあり、バシャーモなら『火』といった具合だ。しかしルカリオは生まれつきのエネルギーが”無い”というより、知らないのだ。

実際ルカリオは波動弾というエネルギーを消費する技はあるが、それは火のエネルギーなのか超のエネルギーなのか、カルダの人達は誰も分からなかった。

するとサーナイトが何かの疑問を抱いたのか、突然ルカリオに質問した。

「ルカリオさんの胸とかにあるトゲ…それって鉄ですか？」

とサーナイトがルカリオに質問した。

「えっ？ そうだと思っけどー」

とサーナイトに言葉を返すと、思いついたような顔をした。

「もしこのトゲを自分の槍に変形するイメージをしたら…どうなるかな？」

と今度はルカリオがサーナイトに質問した。

「なるほど…確かに出来ますね。」

「やってみるか…名前は、メタルスピアでいいか…。」

そして右腕のトゲを槍に変形させるイメージをして、エネルギーをした。

「いけるか…？魔術！メタルスピア！」

とルカリオは叫んだ。

すると右腕に黒い光が宿り、腕のトゲが溶けだし、腕にまわりつくように溶けたトゲがくつついた。

そして右腕が鉄で覆われ、手の甲の上から前に突き出た槍が出来た。

「こんな事も出来るのか！　すげえ…けど重いなこれ。」
と喜んだが、腕にかかる槍の重みで気分が萎えたようだ。

「へえ…俺も何か考えよっと。」

とルカリオの様子を見てから、バシャーモも考え始めた。

「鎧にするとか、どうですか？」

と迷っていたバシャーモにサーナイトがアドバイスをした。

「まるでほとんどサーナイトだよりだな…でも案は頂くぜ！」

とサーナイトに案を頂いてばかりなので少し申し訳ない気持ちになったが、他に案も無かったので、案を渋々頂いた。

「名前はフレイムアーマーで決まり！ 魔術！フレイムアーマー！」

と叫び、エネルギーを全体に張り巡らせた。すると、赤い火のエネルギーがバシャーモの全身を覆い、一気に火を体に纏った。

「おお！ すごい！ この状態ならただの蹴りとかも強いんじゃない？」

とバシャーモは喜んだ。

全員が魔術を使い終わった頃には、あたりはすっかり夜になっていた。

「じゃあこの槍、元に戻すか…。」

とルカリオが散々槍を振ったりしていたので、疲れながら右腕に左手で触れて、槍は元のトゲの位置に戻った。

続いてバシャーモも体に手を当て、火の鎧を元に戻した。

すると、帰ろうとしたルカリオ達の所に、ガブリアスが歩いてきた。

「お前ら、魔術を使ってたな？どっかでいい魔術の本でも買ってきたのか。」

とルカリオ達に話した。

「知ってたなら教えろよ！ガブリアス。」

とルカリオが言葉を返した。

「魔術を知っているという事は、アナタも使えるのですか？」

とガブリアスにサーナイトが質問した。

「まあな。確認するか？」

とガブリアスが話した。とても自信ありげな表情だった。

するとガブリアスは広場の真ん中まで歩き、右腕にエネルギーを溜めて右腕を上げた。

「魔術！ドラゴンブレード！」

と叫ぶと、上げた右腕の手の平に剣が現れた。

「これは竜のエネルギーを使うから、普通の人には出来ないけどな。」

とガブリアスは言うと、剣を消した。

「明日に備えて早く寝ろよ。厳しい道になる。魔術はどこでも使えるだから、とっさに魔術を放てるように実戦で慣れな。」

とガブリアスがルカリオ達に言い残して、宿に歩いて行った。

「この魔術は奥が深いな…。」

とルカリオは感じた。

進歩（後書き）

技紹介です。

メタルスピア

腕に鉄の槍を出現させる中級魔術。

フレイムアーマー

体に火の鎧を纏う中級魔術。

ドラゴンブレード

とてつもない切れ味の剣を作り出す上級魔術。

次回をお楽しみに！

出発（前書き）

相変わらず文字が少ないです…。

それではどうぞ…。

出発

宿の窓から明るい日射しが来る。

どうやら朝になったようだ。

「ん…。」

と眠そうな声を出しながら、ルカリオがベッドから起き上がった。

回りを見渡すと、部屋のドア近くでイスに座りながらガブリアスが本を読んでいた。

「起きたか。まだ時間は早いから急がなくていいぞ。」

とガブリアスが小声でルカリオに話した。

「ああ、分かった。」

とまだ意識がはっきりしていないが、小声で返事をした。

隣のベッドにはサーナイトが寝ていたはずだが、今は誰もいなかった。その隣のバシャーモはまだ寝ていた。

「…サーナイトは？」

とルカリオがガブリアスに質問した。

「ああ、下で本を読んでいた。多分昨日の魔術に関する本でも読んでいるんじゃないのか？」

と答えた。

「そういや、本は二冊あるんだったか… サーナイトを見に行ってくる。」

とガブリアスに言い残して、ドアから部屋を出た。

部屋から外へ出ると、すぐ左の下に降りる階段があった。階段から下に降りると、サーナイトがイスに座り、本を熟読していた。

ルカリオが来た事すら気付いていない。

「『使い方を考えないと、体が持たない。だから自分に合う魔術を見つけるまで魔術の微調整が必要である』…つまり、イメージを派手にしたりすると魔術は撃てても体が持たなくなる…だから一番難しいという事ですか…。」

とサーナイトが独り言を言っていた。

「朝から熱心だな、サーナイト。」

とサーナイトに話しかけてみた。

「あっ！ルカリオさん。おはようございます。」

と声の方向にサーナイトが向き、やっとルカリオに気付いたようだ。

すると階段からガブリアスが降りてきた。

「そろそろ行くぞ。バシャーモはそのうち降りてくるから、準備し
ていてくれ。」

とガブリアスがルカリオ達に言った。

「俺は出来てる。サーナイトは？」

とサーナイトに聞いた。

「この本をバッグに詰めてきます。まだ読みたいので…。」

と言って、上に階段で上がっていった。

「ガブリアス、兄は今どこにいるか知らないのか？」

とガブリアスにルカリオが聞いた。

「今から行く場所にいるはずだ。…生きていれぼな。」

と少し不安そうな顔で答えた。

「なら大丈夫さ。兄は神の支配者に負けない。オノノクスにも勝つ
たし。」

とルカリオがガブリアスに言った。

「オノノクスやジャローダ相手ならまだいい…だがエルレイドは…いや、何でもない。」

とルカリオにガブリアスが答えた。さっきより顔が深刻になった。

「エルレイド？誰だそれ。」

とまた質問をした。

「通常、『剣神 エルレイド』俺が『神の支配者』にいた頃の先輩にあたる人物だ。ほとんどのアルセウスからの命令はあいつが指揮している。そして、恐ろしく強い。俺達じゃあまだ勝てない。絶対にな。」

と答えた。

「そんな奴とも、いつかは戦う日が来るのか…。」

とルカリオが言った。エルレイドが強い事は、ガブリアスの表情が物語っていた。

「お待たせしました！準備完了です。」

とサーナイトとバシャーモが降りてきた。二人とも準備が出来たようだ。

「よし。出発だな。目的地は、雪の町『アイス』だ。そして途中にある山、『シーフマウンテン』には、盗賊が出るらしい。多分前に襲われた盗賊 と同じだろうがな。」

とルカリオ達に言った。

「とりあえず、外に行こうぜ！」

とルカリオが言った。

外に出ると、とても眩しい光に体がおおわれた。

「ドラゴスから出て、北へ真っ直ぐだ。そこにシーフマウンテンがある。そこを越えたら、一気に寒くなるから気を付けろよ。」

とガブリアスが言った。

「寒いのは苦手だ…。」

とバシャーモが小声で言った。暑さに強い分、寒さには弱いようだ。

「さあ、出発だ！」

とルカリオが元気良く叫んだ。

ガイラルは、ガブリアスと落ち合う場所をアイスに決めていた。そこには魔術師——つまり魔術の使い手がいるという情報があったからだ。ガイラルはルカリオ達の心強い味方が必要だと考えていたからである。

「シーフマウンテンはもうすぐ越えるな……。！盗賊か！」

とシーフマウンテンを下っていたガイラルの元に、ルカリオ達を襲ったマニニューラが来た。

「さあ、荷物を置いてって貰おうか——ってガイラルじゃないか！」

とガイラルにマニニューラが言った。

「マニニューラか！反神の支配者以来だな。何してんだ？」

とガイラルは言った。

ガイラルとガブリアスとマニニューラは、神の支配者のチームのリーダー的存在だった。昔は色々な町が襲われるのを防いだりしていた。ラントが襲われるまでは。

ガイラルは自分の村を守れなかった責任で、自ら反神の支配者を抜けた。残ったガブリアスとマニニューラは、自然と反神の支配者を止め、反神の支配者は無くなった。

「だけど、今は傭兵の身なんでね！容赦しないよ！」

とマニユーラは鋭い爪を出しながら、ガイラルに斬りかかった。

「俺は急いでるんでね。すまんけど、通して貰うよ。」

と言って、マニユーラを剣で弾き飛ばした。

「おっと…。もういないか。相変わらず強いね。」

マニユーラは着地すると、既にガイラルはいなかった。

出発（後書き）

エルレイドの話を出しましたが、一応いつエルレイドが出てくるのはまだ未定です。

しかしまあ登場人物は自分の考えた性格にしましたが、ファンに失礼にならないか心配です。

次回をお楽しみに！

シーフマウンテン(前書き)

今回は終わり方が微妙かもしれません。

それではどうぞ！

シーフマウンテン

「ん…なんか涼しくなってきたな。 さっきまで砂漠だったのに。」

と歩いていたルカリオが言った。

「ここら辺の大陸、『アイドラス』は気温の変化が激しいんだ。カルダやディメイロは、『カルディオ』大陸といって、気温の変化はさほどない。 だけどドラゴスからアイスにかけての温度は全く異なる。 不思議だけだな。」

とガブリアスは答えた。

今ルカリオ達は、魔術師のいる町、アイスに向かって歩いていた。

「そういえば、サーナイト夜中に魔術の練習してたよな？」

とバシャーモがサーナイトに言った。

「ええまあ…。本を読んでたらやりたくなって…。 魔術師って、一体どんな人だろう…。 魔術を教わりたいな。」

とサーナイトは目を輝かせながら言った。

「魔術は便利だが、使いすぎに気を付けろよ。 体力を持ってかれるからな。」

とガブリアスが言った。

ルカリオ達は雑談をしながら、シーフマウンテンを目指していた。

シーフマウンテンの名前の由来は、名前どおりの盗賊の山だ。通る人を襲い、そして奪った宝石をアイスの町で売って稼いでいる。

しかし盗賊は数が多いだけで、一体一体がとても弱い。だから傭兵――マニョーラを雇っている。

「見えてきたぞ。あれがシーフマウンテンだ。」

とガブリアスが指差した所に、大きな雪山がそびえ立っていた。

「あれを越えると、アイスに着く。だが、恐らくマニョーラがいるだろうな…。」

とガブリアスが言った。

「マニョーラか…。今度こそ勝ってやる！」

とルカリオが前回の戦いで負けたので、リベンジするつもりのようにだ。

しばらく歩くと、雪で真っ白な山の入口まで着いた。近くに看板で『盗賊注意!』と書いてあった。

「行くぞ。アイスまで後少した。」

とガブリアスが言い、

「分かった！」

「はい！」

「オッケー！」

と三人が答えた。

ルカリオ達が山を登って行くが、雪のせいで体力を消耗してきた。

「足が重いな…。」

とガブリアスが少し苦しそうに言った。

「こんなに体力を取られるのか…。まだ半分も登ってないだろう？」

とルカリオも苦しそうに言った。

しばらく登って行くと、急だった坂が少し緩やかな坂になった。

すると、ガブリアスが立ち止まった。

「マニニューラか？隠れても無駄だ。」

と言うと、雪の積もった雑木林からマニニューラが現れた。

「ご名答。また会ったね。さあ、荷物を置いてつてくれるかな？」

とマニニューラがガブリアスに言った。

「断る。というか何で盗賊なんかやっている？」

とガブリアスがマニニューラに質問した。

「暇だからね。反神の支配者を止めてから、暇なのさ。話は終わ
り。行くよっ！」

と言うと、一瞬でガブリアスの前に走ってきた。

「やあ！」

と鋭い爪で、ガブリアスに斬りかかった。

「牙突！」

とガブリアスは、マニニューラの爪をエルボーで叩きつけた。

「うえっ!？」

爪が地面に叩きつけられたため、マニニューラはバランスを崩し、こ
けそうになった。

「続く! 風牙！」

とルカリオが、マニニューラ目掛けて風牙を放った。

「うっ! 痛てて…。」

とマニニューラに風牙は当たったが、さほど効いてないようだ。

「効いてない!?!」

とルカリオが効いてない事に驚いた。

「これで決める! 飛竜拳!」

とガブリアスは右手を上には挙げ、左手を下に下げた。そしてマニユーラの頭を両手で挟むように叩きつけた。

「つつつつつ!!」

と声にならない声をあげ、気絶し倒れた。

「すげえ…。」

とルカリオが歓声をあげた。

「さあ、先を急ぐぞ。」

とガブリアスが歩き出した。それに続けてルカリオ達は歩き出した。

「ガブリアスも兄も強いから、自信無くすな…。」

とルカリオが少し落ち込んでいた。

「しいて言えば、場数が違うからな。そう落ち込むな。」

とルカリオをガブリアスが励ました。

「しかし風牙を受けて平気って、どんな鍛え方してんだ?」

と疑問に思ったバシャーモが言った。

「あれも魔術を応用したやつだ。まあマニユーラも場数を踏んでるし、メンタル面でも強いからな。」

「魔術は何でも出来そうだな。」

とバシャーモが納得したように頷いた。

「前々から思ってたんですけど、マニユーラさんとは知り合いなんですか？」

とサーナイトが質問した。

「ああ。反神の支配者のメンバーだ。全五人いたんだけどな。俺とガイラルとマニユーラと今どこにいるか分からない二人だ。少し手荒い真似しちまったが、まああれぐらい大丈夫だと思うがな。」
と微笑を浮かべながら、言った。

「ちょっと思ってたけどさ、反神の支配者で一番強い人って誰？」

とまたまたバシャーモが質問した。

「ガイラルだな。何度か手合わせしたが、勝てた試しがない。マニユーラは四番目くらいに強いな。俺は三番くらいだろう。」

と言った。

「さあ雑談は終わりだ。もうすぐ頂上だから、着いたらそのまま前に降るぞ。」

話が終わりそうにないので、ガブリアスが雑談を止めた。

シーフマウンテン（後書き）

技説明です。

飛竜拳 両手で挟み込むように叩きつける技。頭と顎を叩くので、
気絶させやすい。

だけでした。

バシャーモ 「しかし作者のネーミング…。なあ？」

ルカリオ 「ノーコメントで。」

サーナイト 「私もノーコメントで。」

……。次回をお楽しみに！

雪の町『アイス』(前書き)

今回は特別短いです。

それではどうぞ！

雪の町『アイス』

「もうすぐだ…、少し寒いかな。」

と吹雪が吹き荒れる中、ガブリアスが励ましの言葉をかけた。

「す、少し寒いなんてもんじゃねえぞ…。」

と震えながらルカリオが言った。

「ルカリオさんや私はまだいい方ですよ…。バシャーモさん、さつきから一言も喋らないですし…。」

とサーナイトが指差した先には、真っ青な顔をしたバシャーモがゆっくりと歩いていた。今にも倒れそうだった。

「ガブリアスは平気なのか？」

とルカリオがバシャーモをちらりと見て、苦い表情を浮かべてガブリアスに質問した。

「本来俺のような竜型のポケモンは、寒いのは苦手だ。 だけどいつの間にか慣れてしまったよ。 厳しい冒険をしているうちにな。」

と言葉を返した。

しばらく山を下って行くと、先ほどまで吹き荒れていた吹雪が止み、視界が良くなった。

「吹雪が止んだか。もうすぐだ！」

とガブリアスが後ろに向き、ルカリオ達に言った。

「や、やつとか…。もう死ぬかと思った…。」

とバシャーモが千鳥足で歩きながら言った。

「肩貸すぜ。」

とこけそうにしているバシャーモを手助けした。

「…いいですね。こんなに仲いいんですね。少し羨ましい…。」

とボソツとサーナイトが言った。

「ん？何か言ったか？」

と少し聞こえていたルカリオが言った。

「いえ？何も。」

と知らないふりをして答えた。

またしばらく歩くと、雪が積もって歩きにくかった道が歩き易くなった。

「見えた。あれが雪の町『アイス』だ。」

ルカリオ達が前を見ると、前に雪が降り積もった白銀の町があった。まさに雪の町と呼ぶに相応しい光景だった。

「……………！」

とガブリアスを除くルカリオ達は、言葉を失った。

「この町に兄は来てるのか？」

とアイスを見てぼーっとしていたルカリオが、ガイラルの事を思い出して、すぐさまガブリアスに聞いた。

「ああ。アイツは多分無事だしな。」

「そうか。取りあえず、バシャーモを休ませてくれねえか？ 寒い所だと極端に元気無くすからさ。」

とルカリオが言った。

「宿か。なら先に探しといてくれ。俺はガイラルを探す。」

と言って歩いていった。

「まずは宿探しだな。」

とルカリオは回りを見渡した。

一面白く輝いており、民家や店なども雪で真っ白であった。

「まるで分かりませんね。区別が付きません…。」

とサーナイトも困った声を出した。

「誰かに聞くか…。なあ、アンタ。」

と丁度目の前を通った黒い毛並をしていて、頭の後ろから腰にかけて赤い毛の生えた人に道を訪ねた。

「ん？何？」

と少し驚きながら答えた。

声からして、女性のようなだ。

「宿ってどこ分かる？」

と聞いた。

「ああ。宿ならあの赤っぽいドアの家だよ。」

と指を指した先に宿があった。

「ありがとう！助かったよ。」

「別にいいよ。じゃね！」

と軽く小走りで女性は走っていった。

「今日は来客が多いね。楽しくなりそうだ。」

と言いながら走っていった。

雪の町『アイス』（後書き）

また短くなってしまいましたね。

しかし実際は暑いのに雪の町に着いちゃいましたけど、季節外れで
すかね？

次回をお楽しみに！

赤髪の魔術師（前書き）

新キャラ登場です！

ルカリオ「まあ代々予想出来ると思うけど。」

う、うるさいな〜。

それではどうぞ！

赤髪の魔術師

ルカリオ達はアイスの町の宿に入り、一段落着いた頃だった。

「ふう……。寒かった……。」

とルカリオは宿の部屋の中に入り、ベッドに座り込んだ。

「バシャーモさんは大丈夫ですか？」

とさっきまで青い顔をしていたバシャーモにサーナイトが訪ねた。

「まあまだまし……。でも暫く寝……。る……。」

と言って、死んだようにベッドで眠りだした。

「ガブリアスの所に行こうぜ。バシャーモは寝させてさ。」

「そうですね。まず外に行きましようか！」

外に出たルカリオは、再び外の光景に驚いた。

「しかし一面銀世界だよなー。しかもシーフマウンテンに比べる
と温かいし。」

「そうですね。これだけ雪が積もっているのに、何故でしょう？」

「この町の雪は特殊なんだ。『ホットスノー』と言って通常の雪より遥かに温かい雪なんだ。まあ結局謎だけだな。」

とルカリオ達の近くに歩いてきたガイラルが言った。

「兄さん！無事だったんだ！」

「当たり前だ！俺が死ぬかよ！」

と笑顔で答えた。

「ん？バシャーモはいないのか？」

「バシャーモさんは、宿で眠ってますよ。あまりの寒さですから疲れたでしょう。」

とサーナイトが言った。

「そうか…。ならお前達だけでも着いてきてくれ。ある場所に来てほしいんだ。」

と手招きしながらガブリアスと共に歩いていった。

すかさずルカリオ達も後に続いた。

歩いても周りは真っ白で、まるで進んだ心地がなかった。普通の人には迷うような道をガイラル達は普通に進んでいた。

暫くすると、他の民家に比べて一際大きな家が姿を現した。そして何故か、その家だけ雪が積もってなかった。

「この豪邸は一体？」

「この豪邸は、凄腕の魔術師が住んでいる。魔術は知ってるな？」

「ああ。サーナイトに教えて貰った。」

「そっか。その魔術を使いこなせる人材だし、必ず仲間になるかは分からないけど、仲間になれば心強い仲間になる。まあ相手は十中八九婆さんかもだけど…。」

「…まあ年は気にしないよ。…多少なら。」

と少し嫌な気持ちでルカリオが言った。

「さて仲間になってくれるかの手紙は送ったが、返事は来てない…。取り敢えずノックしてみるか。」

とガイラルは家のドアまで歩いていこうとすると、

「んっ？何かここに壁がある…。見えない壁…魔術の結界か？」

とガイラルが何もない所にぶつかった。

「あ、そうそう。ルカリオ達には教えて無かったが、結界や強力な魔術のほとんどが詠唱型魔術という。まあ後々教えてやる。」

とガブリアスが思い出したような口振りで言った。

「さてどうしようかな。無理矢理破るのも何かあれだけど、この際しようがないか。波動弾！」

とガイラルが全力の波動弾を結界に打ち込んだ。

しかし、結界は破れなかった。

「さすがは魔術師だ！結界のレベルが違うな。」

と全力の波動弾が効かなかったので啞然としていた。

とそこにルカリオより少し年が上の女性が歩いてきた。

朝にルカリオ達が宿の場所を聞いた人だった。

「無理だよ。その結界はほぼ無敵だからね。」

と少し呆れ顔でガイラルに言った。

「…？ 誰だアンタ。」

とガイラルが少し警戒した目付きで話す。

「私はゾロアーク。結界を作った本人よ。そう警戒しなくていいよ。」
と少し笑いながら言った。

「結界の作成者…？てことはまさか！」

「そうだよ。私が魔術師。『赤髪の魔術師』さ！」

とゾロアークは言った。

「あなたが…凄腕の魔術師なんですか？」

とサーナイトが目を輝かせて言った。

「そう言ってるじゃない。ガイラルってのは警戒心丸出しの君？」

「失礼したな。俺がガイラルだ！こっちはガブリアス。んでその二人はルカリオとサーナイトだ。（婆さんじゃなくて良かった…。）」

「ふーん。仲間になってほしいんだよね？」

「ああ。ルカリオ達のな。」

「そっか。ならちょっと実力を試させてくれる？ルカリオ君達の実力…いえ、どこまで強くなれるかをみたいからね。」

とゾロアークがルカリオ達に言った。

「分かった！全力で行きます！」

とルカリオも気合いをこめて言った。

「では『赤髪の魔術師』ゾロアーク、参ります！」

赤髪の魔術師（後書き）

どうでしたか？ 一応技？ 紹介です。

結界 剣だろうと銃だろうとパンチだろうと魔術だろうとほとんど防げる結界を張る上級魔術。

次回をお楽しみに！

ゾロアークとの戦い（前書き）

ゾロアークとの戦闘です！

今回は書いてて楽しかったです。

それではどうぞ！

ゾロアークとの戦い

「別に私は君を怪我させたいわけじゃないから、これを使う。魔術！バトルフィールド！」

とゾロアークが声を上げると、一瞬まばゆい光が周りに走り、ルカリオとゾロアークの頭上に『HP5』という文字が表れた。

「何だこれ？」

とルカリオがゾロアークに質問した。

「私の魔術、『バトルフィールド』は私が解除するか私が気絶したりするまで解除出来ない魔術。それでね、私や君の頭上にあるHPは生命力を数値化した数値なの。そしてどちらかが敵に瀕死並のダメージを与えたら0になる。それで勝負ありだよ。まあ怪我や痛みは無いから安心して戦えるでしょ？」

と微笑を浮かべながら説明した。

「じゃあそろそろやろうよ。」

とゾロアークの目付きが鋭くなった。

「分かったぜ！」

とルカリオも身構えた。

そうするとゾロアークが右手を上になげ、

「邪悪な剣よ！力を貸せ！『ダークブレイド』！！」

と叫ぶと、黒い炎のようなものがゾロアークの腕にまわりつき、黒く輝いているレイピアが手のひらに表れた。そしてそのレイピアをゾロアークが握った。

「なっ、何だあの剣は！？」

とルカリオが驚いた隙にゾロアークが、

「隙ありすぎ！えい！」

とゾロアークがレイピアを横に振ると、黒い衝撃波がルカリオ目掛けて飛んできた。

「えっ？ぐあっ！！」

と凄いスピードで飛んでくる衝撃波に避けられず、腹に直撃した。

その一部始終を見ていたガイラルが、

「あれも詠唱型魔術か！しかも最高レベルに近い魔術だ…。すごいな。」

とガイラルでさえも啞然としていた。

バシャーモがある事に気付いた。

「！　：おいおい！ルカリオのHPが：。」

という言葉に、ガイラル達は立ち上がったルカリオの頭上を見て驚いた。

「HP：3！？　いまの一撃二回程で瀕死になるようなダメージじゃねえか！」

とガイラルが驚きの声を上げた。

「ルカリオさん：。勝てるんでしょうか？」

とサーナイトが心配そうにガブリアスに聞いた。

「：ルカリオの勝率は絶望的だと思う：。」

「ホントに痛みも傷もねえ：。だがHPが2も減っちゃった：。こっちも魔術だ！魔術！メタルスピア！」

と左腕にまわりつくように手の甲から真っ直ぐに尖った鉄の槍を作り出した。練習の時とは違い、ルカリオ本人が動きやすい重さに設定済みだった。

「行くぜ！」

と言ってゾロアークの前まで走ってきた。

「速いね！やあ！」

とルカリオにレイピアで斬りかかった。

「ふっ！」

とルカリオは左腕のメタルスパアでレイピアをガードし、右手の剣でゾロアークの腹を斬った。

「へえ！メタルスパアをガードに使ったか。」

とゾロアークがよろついた。

「まださ！メタルスパア！」

と左腕のメタルスパアで肩を突き刺した。

「…！なかなかいい攻撃だね。」

とゾロアークがバックステップをして体制を立て直した。

だがルカリオはゾロアークのHPを見て驚いた。

「二発攻撃を当てて、HP4だと！？少し外したか？」

とルカリオが疑問に思った。するとゾロアークが、

「ずれたんじゃない。ずらしたのよ。」

と自信満々にゾロアークが言った。

「あの一瞬で…！ 強い！」

とルカリオは武者震いをした。

「次は私だよ。次はこの武器だ！ 荒れ狂う火の竜よ！ 銃となり力を貸せ！ 『ドラゴンスレイヤー』！」

とダークブレイドを消し、今度は炎を纏ったハンドガンを両手に出現させた。

「君素質あるよ！ ただ、相手が悪かったけどね。『オーバーロード』」

とゾロアークが叫ぶと、ハンドガンの銃口に炎が集まり、激しい爆発音と共にルカリオに巨大な隕石のような銃弾二発が放たれた。

「くっ！ 片方だけでも防いでやる！ うおおお！！ 波動斬！」

と決意で発動したオーラブレードで片方の剣を弾き飛ばした。だが、もう片方はルカリオに直撃し、爆発した。

「剣でオーバードを弾き飛ばした!? くっ! 魔術! 魔法壁!」

と弾き飛ばされた大きな火の玉を、青い魔法壁で防いだが、僅かにダメージを受けた。

「…! 私に合計3ダメージ与えるとわね…。」

とゾロアークの頭上のHPは、2を示していた。

そしてルカリオは0。勝負ありだった。

「強いな…。まるで敵わねえや。」

とバトルフィールドが解けて、座っていたルカリオが言った。

「お疲れ。君、久々に楽しかったよ!」

とゾロアークが歩いてきて、そっとルカリオに手を差し伸べた。

「ありがとう。俺も楽しかった!」

とゾロアークの手を握り、立ち上がった。

ゾロアークとの戦い（後書き）

技紹介です

バトルフィールド

主に練習に持ってこいの効果の魔術。因みに初級魔術なので簡単に出来る。

ダークブレイド

悪魔の剣を呼び出す最高レベルの詠唱型魔術。剣を振るだけで衝撃波が起こる。しかし長時間使うと術者の体が持たない。

ドラゴンスレイヤー

火の竜の力を纏った銃を出現させる最高レベルの詠唱型魔術。銃弾が速く大きく強い。ちなみに2丁拳銃がセット。

オーバーロード

ドラゴンスレイヤーから放たれる果てしない威力の銃弾。ルカリオはバトルフィールドの中だから大丈夫だったが、実際受けたら粉々になってもおかしくない威力。

魔法壁

かなりの硬度がある壁を出す上級魔術。ミサイルくらいならびくともしない。

てな所です。

次回をお楽しみに！

修行（前書き）

ある所で修行をします。

ルカリオ「やっと俺ら強くなれそうだな！」

そうですね。

バシャーモ「おいおい。やけにノリが軽いな。」

いやー、ガイラルとかガブリアスとかゾロアークを強くしすぎかな
って思って…。

ガイラル「別にいんじゃないね？」

そうかねー（汗）

それではどうぞ！

修行

「ゾロアークさん。仲間になってくれますか？」

とルカリオとゾロアークの戦いが終わった後に、サーナイトがゾロアークに話しかけた。

「そうだねえ……。アルセウス倒すのは賛成だね。だが、まずガイラルの話を聞いてあげな。」

とゾロアークがガイラルを指差した。

「ルカリオ、バシャーモ、サーナイトにはある場所で修行をしてもらう。」

とガイラルが三人に言った。

「バシャーモ！？ いつの間に……。」

といつの間にか隣にいたバシャーモにルカリオが驚いた。

「お前が戦つてるときにはいたけど？ あんだけ眩しい光をみたら起きるわ！」

と軽く怒りながら言った。

「じゃあある場所に移動するぞ。」

とガイラルが歩き出した先に、全員着いていった。
住宅街から少し離れ、しばらく歩くと、巨大な洞窟が現れた。

「何だこの洞窟？」

とルカリオが洞窟の入口を見て言った。

「ここは様々なエネルギーが溜まっている不思議な洞窟だな。名を『力の洞窟』という。この奥で修行をしてもらう。」

とガイラルが言った。

「なんでこの洞窟なんだ？」

とバシャーモが言うと、

「さっきも言ったとおり、この洞窟はエネルギーに溢れている。だからこの洞窟の中で魔術を使うといつも以上の威力が出る。だからさ。」

「魔術が強化されるのですか……。それで肝心な修行内容は何ですか？」

とサーナイトが言い、

「中で説明するよ。まあ生半可な修行じゃないから安心しな。」

と意味ありげな笑いを浮かべてガイラルが言った。

またガイラルが洞窟の中に入っていく、それに全員ついていった。

洞窟の中は、様々な色をした鉱石があり、全て様々なエネルギーを秘めた特殊な鉱石ばかりだった。

そして狭かった道を抜けると、大きな広場が現れた。

「ここが修行場所だ。じゃあ修行内容を説明するぞ。」

「ルカリオ、バシャーモ、サーナイトには俺かガブリアスかゾロアークと戦ってもらおう。バトルフィールド込みでな。」

「って私も戦うのかい？ 人使い荒いね。まあ面白そうだけど。」

とゾロアークは言った。

「戦うって…。俺達まだ魔術も使いこなせてないのに。それに単純な力の差が…。」

とルカリオが困った表情を浮かべると、

「だからだよ。この修行で魔術を使いこなせるように頑張れや。対戦相手はくそうだな。」

「ルカリオ、お前は俺とだ！ バシャーモはガブリアス。サーナイトはゾロアークとだな。異論はないか？」

とガイラルが対戦相手を即決めた。

「俺が兄さんと戦うのは初めてだ…。」

「手加減はあるか？」

「いない！手加減ありじゃ修行にならないだろう？」

とルカリオは言った。

「上等！じゃあ俺とルカリオが始めに戦うぜ。」

とガイラルがゾロアークの方を向いた。

「バトルフィールド使えて顔だね。使ってやるよ！バトルフィールド！」

まばゆい光とともに、ルカリオとガイラルの頭上に『HP5』が表示された。

「私はゾロアークさんですか…。よろしく願います！」

とサーナイトがお辞儀をしながら言った。

「はいよ。手加減はしないからね？」

「俺はガブリアスとか…。面白そうだ！」

とバシャーモは目を輝かせて言った。

「俺が相手だからな。全力で来い。」

「さあルカリオ！始めるぜ！」

とガイラルが剣をルカリオに向けた。

「分かった！全力で行くぜ！」

と言うと、二人ともお互いに走り出した。

修行（後書き）

ルカリオVSガイラル

バシャーモVSガブリアス

サーナイトVSゾロアーク

さあどうなるでしょうね！

ゾロアーク「ガイラルの人使いの荒らさときたら…。」

しょうがないですね。ハイ。

ガイラル「それでは次回を…。」

俺のセリフ！

次回をお楽しみに！

ルカリオVSガイラル（前書き）

眠い中、投稿です…。

それではどうぞ！

ルカリオVSガイラル

ガイラルはルカリオの前まで走り、ルカリオの脇腹辺りに狙いをつけて斬りに行った。

「せやっ！」

それをルカリオは剣でガードし、金属音をたててつばぜり合いとなった。

「よくガードしたな！だが甘い！」

そう言うときガイラルは右足に鉄のエネルギーを溜めて足が鉄で覆われた。

「アイアンキック！」

その鉄の足でオーラブレードを蹴り飛ばした。

「なっ！俺の剣が！」

とルカリオが後ろに飛んでいった剣を見た瞬間をガイラルはすかさず、

「剛覇！雷撃斬！！」

と剣を振り上げ、雷のエネルギーを帯びた剣でルカリオを斬りつけた。

「っっ…HPが！」

剣を浴びて後ろへ下がったルカリオは自分のHPが3を示していたのを見て驚いた。

「次はこっちだ！波動弾！」

とルカリオは渾身の波動弾をガイラルに放った。

「俺の波動弾に勝てんのか？波動弾！」

そしてガイラルも波動弾をルカリオの波動弾に向けて放った。

両者の波動弾が当たり、相殺して爆発を起こした。

「砂煙が！ルカリオはどこだ！」

と立ち込めた砂煙でガイラルの視界が覆われた。

「こっちさ！烈風斬！」

と風のエネルギーを纏った剣でガイラルの背中を斬りつけた。

「ちいっ！野郎！」

とガイラルが後ろに振り向くと、既にルカリオは後ろへ下がっていた。

「もう一発入ってるぜ？風の刃がな！」

とルカリオは言う、ガイラルの背中にまた斬撃が入った。

「っ！風のエネルギーを込めた斬撃か！考えたな。」

とガイラルのHPも同じく3を示していた。

「だが、そろそろ行くぜ！」

と言い、ガイラルは剣を地面に突き刺した。

「大地よりきたれ！地の王グラードン！」

とガイラルが叫ぶと、地面から巨大な体を動かし、地の王グラードンが現れた。

「ガイラルよ。力を貸してやる。」

とグラードンがゆっくりとガイラルに話しかけた。

「いつもの頼むぜ！」

「良からう。わが力を剣士ガイラルに捧げるぞ！『グラントカタス

トロフ』!」

そう言うとき、ガイラルの左腕にグラードンの体がみるみる吸収されていき、大きな黒い盾へと変貌を遂げた。

「なっ! あの盾は一体!？」

とルカリオは驚きを隠せなかった。

観戦していたゾロアークは、グラードンを呼び出したガイラルを見ていた。

「凄いね。私と同じように詠唱型魔術の応用した召喚魔術を使えるとはね。」

ガイラルはそのままルカリオへと走り出した。

「くらいな! グランドカラストロフの威力をさ!」

と言うとき、ガイラルは左腕でルカリオに殴りかかった。

「くっ!」

すかさずルカリオは剣でガードするが、

「甘い甘い！でえええい！」

とガイラルはルカリオの剣で吹き飛ばした。

「うおっ！！」

ルカリオは向こう側の壁まで吹き飛ばされ、壁に激突した。

「∴HPが！1しかない！」

とルカリオは壁から脱出したが、目の前にはガイラルが左腕で殴ろうとしていた。

「残念でした！でやあ！」

ルカリオに再度重い拳で殴りかかり、バトルは終了した。

「お疲れ！ルカリオ！」

とバシャーモが駆け寄ってきた。

「くっそー。あんな魔術ありかよ！」

「ありさ。まあ俺を本気にさせたから十分ってとこだな。」

「ガイラル。次はサーナイトとゾロアークの対決か？」

とガブリアスがガイラルに聞いた。

「そうだな。」

とガイラルは頷くと、ゾロアークは準備運動をしだした。

「サーナイトちゃん。手加減はしないからね？」
とゾロアークはサーナイトを指差して言った。

「ち、ちゃん…？はっはい！よろしくお願いします！」

そしてゾロアークVSサーナイトの戦いが始まった。

ルカリオVSガイラル（後書き）

技紹介です。

アイアンキック

鉄のエネルギーで足を鉄に変形させ、蹴り上げる中級魔術。

剛覇雷撃斬

雷のエネルギーを帯びた剣で斬りつける技。傷口に電撃がはしるのでかなりの威力。

烈風斬

風のエネルギーを纏った剣で横に斬りつける技。斬った後に風の刃で追い討ちをかける。

グランドカタストロフ

地の王の力を借りる召喚魔術。メリケンサックと盾の両方を兼ね揃えた武器に変身し、それを使って殴ったり攻撃を防いだりできる。腕力が強化され、力強いパンチが打てる。

こんな所です。

次回をお楽しみに！

サーナイトVSゾロアーク（前書き）

次はゾロアーク対サーナイトです！

ゾロアーク「さあさあどちらが勝つかかな？」

それは読んでのお楽しみ！

それではどうぞ！

サーナイトVSゾロアーク

「では、サーナイトVSゾロアークの対戦を始める！双方準備は？」

とガイラルがサーナイトとゾロアークを見た。

「私は大丈夫です。ゾロアークさんは？」

「いいよ！いつでもおいで。」

とゾロアークが手招きをした。

「じゃ、始め！」

とガイラルが言った。

「さっそく行くよ！邪悪な剣よ！力を貸せ！『ダークブレード』！」

とゾロアークが言うと、黒い炎がゾロアークの右腕にまわりつき、黒いレイピアが現れた。

「やっぱり間近でみると凄いですね！」

とサーナイトが歓声をあげた。

「私もこれを試します。光輝け！『ホーリーブレード』！」

そう言うときサーナイトの右腕が光だし、白いレイピアが現れた。

「私のダークブレードに対をなす、ホーリーブレードか！どこでそれを…。」

「古い本に書いてありました！では行きます！」

するとすぐさまサーナイトは瞬時にゾロアークの目の前まで移動した。

「っ！君、もう『ブースト』を使いこなしてるのね！」

ゾロアークがとっさに剣で防御体制をとると、

「遅いですよ！ナイフレイン！」

とサーナイトは一步後ろに下がり、サーナイトがゾロアークに気づかれないように上に浮かせていたナイフをゾロアークに落とした。

「くっ！いつの間に…。」

とゾロアークはナイフを四発ほど避けたが、いくつか当たり、HPは3まで減った。

「まずは2ダメージです！もう一発やります！サイコレーザー！」

とサーナイトは攻撃を休めず、光輝くレーザーを放った。

「魔法壁！」

ゾロアークは魔術の壁でサイコレーザーを防ぐと、砂煙に乗じてサーナイトの後ろに回った。

「さっきのはラッキーパンチさ！喜ぶのは早いよ！やあ！」

とゾロアークがダークブレードをサーナイトの腹に突き刺した。

「…速いですね！私、テンション上がってきました！」

とお互い一步下がり、沈黙が続いた。

「なあガブリアス。ブーストって何なんだ？」

とバシャーモが疑問に思っていた事を言った。

「ああ。ブーストは自分に適したエネルギーを足や手に集中させて筋力を上げるんだ。闘エネルギーってやつだけ筋力を2倍以上に出来て、それ以外は1／2倍で不特定なんだ。」

とバシャーモに分かりやすく説明した。

「それって難しいことじゃないのか？」

と今度はルカリオが言った。

「難しいさ。だからゾロアークも驚いているのさ。」

とガブリアスも驚いていた。

「サーナイトは一体何者なんだ？」

とルカリオは今更ながら驚いた。

サーナイトの剣とゾロアークの剣がぶつかり合う。

「りゃあ！」

ゾロアークが剣で肩辺りを斬ろうとするが、サーナイトの剣に防が

れる。これの繰り返しが続いた。

「っ！サウザン…。」

とサーナイトが後ろに下がりサウザンナイフを撃とうとするが、

「させないよ！」

とゾロアークがサーナイトに間合いを積み、肩から腹にかけて斬りつけた。

「ううっ！」

とサーナイトが避けきれずに攻撃をもろに受け、ダメージが合計4、つまり残りHPが1となった。

そうするとサーナイトの目が紅く光だした。

しかしルカリオ戦に見せた物とは違い、輝きがより一層強かった。

「紅き目が発動した…？けど光が強くないか？」とルカリオが光の事を口にした。だが他の三人も揃って理由が解らなかった。

「……頭がっ！痛い！」

とサーナイトが頭を押さえ嘆いた。

「あああああっ!!」

とサーナイトが叫び声を上げ、ゾロアークに襲いかかった。

「!?!ちいっ!」

と斬りかかるサーナイトの攻撃を防ぐと、何かが折れるような音とともにゾロアークのダークブレードが折れて消えた。

「なっ!?!ううっ!」

とゾロアークの体制が崩れると、サーナイトは左手でゾロアークの腹を殴った。

するとゾロアークは5mほど吹っ飛び、HPは1となった。

「うわあああああ!」

とゾロアークが倒れているにも関わらず、サーナイトは通常では有り得ない大きさのサイコレーザーを撃った。

勝負ありだった。

「ゲホッ！ハア…なんでバトルフィールドを張っているのにあのパ
ンチでダメージを…。」

とゾロアークがよろりと立ち上がると、

「ハア…ハア…ウウ…。」

とサーナイトが倒れた。

「っ！？サーナイト！」

とルカリオが駆け寄ると、

「良かった…気を失ってるだけだ。」

と安心した。

ゾロアークがサーナイトの所に歩いてきた。

「この子は一体…。うっ！あの力は尋常じゃない…。」

とゾロアークも腹を押さえて倒れそうになるが、

「おいおい！大丈夫かよ！」

とバシャーモが駆けつけ、ゾロアークの肩を支えた。

「ハア…サンキュ…。その子、私の家に連れてくよ。休ませてあげなきゃね。」

とゾロアークが辛そうに笑い、話した。

「お前もだぞゾロアーク。しかしさっきのは一体…。」

とガイラルもガブリアスも謎が深まるだけであった。

サーナイトVSゾロアーク（後書き）

技紹介です。

ホーリーブレード

光の剣を出す上級詠唱型魔術。ダークブレードと対をなす光の剣で、ダークブレードに対して多少強くなる。切れ味抜群で衝撃波も出せる。

ブースト

自分の筋力を上げる上級魔術。エネルギーを一部分に集中する事で出来るが、とても難しく、最上級魔術と上級の間というところ。応用が効く。

こんな所です。

サーナイトは一体どうしたのでしょうか？

ルカリオ「何かわざとらしいな。」

そ、そんな事あるよ。

バシャーモ「あるのかよ！」

それでは次回をお楽しみに！

バシャーモVSガブリアス(前書き)

バシャーモVSガブリアスです！

バシャーモ「出番！出番！」

張り切ってますね〜。

それではどうぞ！

バシャーモVSガブリアス

「俺がサーナイトとゾロアークを家に連れていく。歩けるか？ゾロアーク。」

とバシャーモに支えられてるゾロアークにガイラルが言った。

「まあ、多少は歩けるよ。骨が何本かイッちまったけどさ。」

とゾロアークはバシャーモの手をそつと払い、ゆつくりとガイラルの所に歩いた。

「…んしょつと。じゃあ俺らはゾロアークの家に行くから、ルカリオはガブリアスとバシャーモの戦いを見てな。きっと学べるものがあるぜ？」

とサーナイトを担ぎ、ゾロアークと共にガイラルが歩いていった。

「サーナイト大丈夫だろうか…。まあ今は兄さんに任せるか。」

とルカリオは心配そうにガイラルの後ろ姿を見た。

「今から俺とガブリアスの対戦か。サーナイトがああなったから、気乗りはしないけど、全力で…。」

とバシャーモが言いかけると、

「つてこの場にゾロアークがいないけど、バトルフィールドは無くならないのか？」

と思い出してガブリアスに聞いた。

「問題ない。ゾロアークは気を失ってはいないし、バトルフィールドは使用者がここにいないくとも働くからな。さっ、やるぞ。準備しろ。」

とガブリアスが右腕を顔の前まで持ってきて、戦闘体制に入った。

「そういうことなら……。よしっ！ いいぜ！」

とバシャーモも戦闘体制に入った。

「じゃ合図は俺が……。よし！ 始め！」

とルカリオが二人に聞こえる声で言った。

「さっそく使え！ 魔術！ 『フレイムアーマー』！」

とバシャーモが言い、全身に炎の鎧を纏った。

「行くぜ！」

とバシャーモがガブリアス目掛けて走り、

「『フレイムドロップ』！」

と炎を集中させたドロップキックをガブリアスに放った。

「！ いい技だな。」

とガブリアスはすかさず右腕でガードし、ダメージは1に押さえられた。

「さっすが！」

とバシャーモはすぐにガブリアスと多少距離をおき、出方を伺った。

「俺のスピードについてこれるか？ 『ソニックターン』」

とガブリアスが一瞬にして視界から消え、いつの間にかバシャーモの真後ろにいた。

「うおっ！ くそっ！」

とバシャーモは直ぐに後ろへ回し蹴りをするが、

「遅い。」

とガブリアスが今度は目の前に現れた。

「飛竜拳！」

そしてバシャーモがガブリアスを認識する前に、バシャーモの頭と顎にかけて強烈な打撃が入った。

「くっそ！デタラメな速さだな！」

とバシャーモが微笑を浮かべて言った。

だがバシャーモのHPは2。たった一回の飛竜拳で3ダメージを受け、笑える状況では無かった。

「この速さをだせるのは俺とオノノクスとエルレイドだけだ。つまりこの速さについていけるかがお前、いや、お前達の課題だ。」

とガブリアスが一瞬でバシャーモと距離をあけた。まさに『音速のガブリアス』と呼ぶに相応しいとバシャーモは痛感した。

「じゃあ止めてみせる！」

とバシャーモは手に炎を集中させ、ガブリアスに走りながら、

「爆炎拳！」

とガブリアスの腹を殴ろうとする。だが、

「遅い。」

とガブリアスがまたバシャーモの後ろへ回った。

「俺の勘が当たったな！」

とバシャーモは上半身を後ろへ回し、強烈な上段蹴りをガブリアスの頭へ放った。

「円転脚！」

とガブリアスの頭にヒットした。

「くっ！ただの勘で移動方向が当たっただと！？」

「悪いな。俺の勘は当たるんだ。次いくぜ！」

とバシャーモはまた爆炎拳のモーションに入る。

「…！一旦距離を置かせてもらう。」

とガブリアスはバシャーモから20mほど離れ、様子を伺った。

「っと！」

とバシャーモは爆炎拳のモーションを止める。

それを見ていたルカリオは、

「凄い……！ガブリアスと互角に立ち回っている……。俺も負けられないな。」

とルカリオは戦いを見て感心していた。

ガイラルが言った事はこういう事だった。

ライバル
好敵手と競い合う事で己の身体の上昇に繋がると確信しているからだ。

「やるな。バシャーモ。」

「そっちこそ！でりゃ！」

とバシャーモは右足でガブリアスに蹴りを入れようとする。が、ガブリアスは瞬時にバシャーモの横へ回り、

「下段脚！」

とバシャーモの足を蹴りつける。

「うおっ！ 足に来たか！」

とバシャーモが裏手を取られ、倒れるとガブリアスが次に大きくバシャーモの上にジャンプした。

「これで終りだ。牙突！」

とバシャーモの腹に強烈なエルボーを放った。

ガブリアスは2、バシャーモは0で、勝負あった。

「くっそ！ 負けた〜！」

とバシャーモが悔しそうに言っていると、ガブリアスがゆっくりバシャーモに近づいた。

「良くやった。まだ完璧ではないが俺の速さについてこられたからな。」

とガブリアスが珍しく笑みを浮かべてバシャーモに話した。

「へへっ！ サンキュ！」

と笑顔でバシャーモが言った。

バシャーモVSガブリアス（後書き）

技紹介です！

フレイムドロップ

炎を纏ったドロップキック。

ソニックターン

風、竜、闘のエネルギーを足に集中させ超スピードで移動出来る技。エルレイドやオノノクスも使えるが、ガブリアスには僅かに劣るらしい。

爆炎拳

火炎拳のパワーアップ版。威力が上がっているだけである。だが火炎拳よりも速く撃てるので強い。

円転脚

左足を軸に回り、遠心力を駆使した回し蹴り。バシャーモの思いつきだが中々の威力が出た。

下段脚

相手のきき足を蹴る技。

こんな所です。

次回をお楽しみに！

サーナイトの過去（前書き）

今回はシリアスな話です。

それではどうぞ！

サーナイトの過去

ルカリオ達は全ての修行が終わり、洞窟から出た。

「さてと、ゾロアークの家に行くぞ。サーナイトとゾロアークが心配だしな。」

とガブリアスがルカリオとバシャーモに言った。

「ああ。」

「分かったよ。」

とルカリオとバシャーモは答えた。

暫く歩き、ゾロアークの家の前に着いた。結界は当然解除されており、ドアの前まで歩いた。

「ゾロアーク。入るぞ。」

とガブリアスが軽くノックし、ドアノブを回してルカリオ達は家の中に入った。

「うおっ！」

とバシャーモは家に入った瞬間、驚いた。

玄関は普通の洋式といった感じの造りだが、廊下は和式の畳で、部屋は見たところ三部屋ほどだった。

「随分独創的な家だ……。一番奥か？ ガイラル達は。」

と珍しくガブリアスが戸惑っていて、ガイラルにどの部屋にいますという事を一瞬忘れてしまっていた。

和式の廊下を真っ直ぐ歩き、目の前に洋式のドアがあった。

「ここか。」

とガブリアスがドアノブを捻り、三人とも部屋に入った。

「……………」

ルカリオは部屋を見渡して黙り込んだ。

眼前にはガイラルがイスに座っており、右側にある布団でサーナイトとゾロアークが寝ていた。だが、部屋にはイスと時計と机と布団

と本だけの部屋だった。

「廊下とは大違いだな…。独創的とはいい難いかな。」

とバシャーモは軽く笑って言った。

「おっ、お前から来たか。二人とも見ての通り寝てるよ。」

とガイラルはゾロアークの方を指差して言った。

「二人とも大丈夫なのか？」

とルカリオが聞くと、

「大丈夫大丈夫。サーナイトは呼吸が安定してる。ゾロアークの骨折とかは俺の治癒魔術と薬で安静にしてれば直ぐに治るさ。」

とガイラルは笑顔で言った。

「んん…。」

とサーナイトがゆっくりと体を起こした。

「…あれ？私ゾロアークさんと戦ってて…。」

とサーナイトは眠たそうに目を擦りながら起き上がった。

「サーナイト！大丈夫か？」

とルカリオがサーナイトに言った。

「はい…。大丈夫ですよ。それより私、どうして気を失って…。」

とサーナイトは不思議そうに言った。

「俺が説明するよ。」

とガイラルが一連の話をサーナイトに話した。

「つてな訳で、ゾロアークはそこで寝てんだ。」

「私がそんな事を…？…また、やってしまいましたか…。」

とサーナイトは落ち込んだ。

「また？…どういう事だ。」

とガブリアスが言った。

「実は私紅き目の所有者であって、所有者でないんです。」

と分かりづらい言葉で言った。

「どういふ…事だ？」

とルカリオが聞くと、

「私の紅き目は人工的に造られた物と、元々の普通の目を持った、いわゆるオッドアイなんです。」

とサーナイトが衝撃の事実を話した。

「何…！オッドアイだと…？だが両目とも赤色に見えるが。」

とガブリアスがサーナイトに言うと、

「カラーコンタクトです。赤色の。」

と言ってサーナイトが左目からコンタクトを取った。

「！…緑色の目だ…。」

とバシャーモがサーナイトの目を見た。

「でも人工的に紅き目を作るなんて事…。」

とガイラルが言いかけると、

「父が作りました。母を犠牲にして。」

とサーナイトの目が一瞬光を無くしたかのように見えて、ルカリオは少し恐怖感を抱いた。

「どういう…事だ？」

とルカリオは聞いた。

「…私達の村は紅き目の住人が多く、紅き目じゃないものは差別されてきました。」

「そんな中、両親は紅き目で、何故か私だけ通常の目で産まれてしまい、父は嘆きました。」

ととどんサーナイトの表情が冷たくなった。

「父は科学者だったので、何とかして私を紅き目にする事が出来ないかと研究して、狂気の研究結果が出ました。」

「それは母を殺し、母の紅き目の力を他の人に写すというものでした。」

「母は何も知らずに父に殺され、何も知らなかった私の片目に紅き

目の力を宿しました。ですが、実験は失敗に終わりました。」

「ゾロアークさんを倒した時のように私が暴走し、父を私が殺しました。気付いた時には、私はデイメイロへ何も考えずに着きました。」

「私がアルセウスを恨む理由、それは紅き目の持ち主を集めている事です。そのせいで父はなんとか私を殺させまいと、母を犠牲にしてまでっ！」

とサーナイトは噛み締めながら全てを話した。

「そんな…サーナイト…。」

とバシャーモが悲しい顔で言った。

「…私はルカリオさんやバシャーモさんが羨ましかった。私はアルセウスを恨む事でしか生きれないほど辛かった。だからルカリオさんやバシャーモさんのように明るく考えれたら…。」

とサーナイトは泣きそうな表情で言った。

「俺達を信用したからこそ話してくれたんだよね？」

とルカリオが珍しく真剣な表情で言った。

「はい。」

とサーナイトが真面目な表情でいった。

「…ありがとう。話してくれて。俺達はサーナイトの味方だ。例えどんな過去があっても関係ない。絶対に味方だ!」

とルカリオはサーナイトに笑顔で言った。

「ルカリオさん…。ありがとうございます。」

とサーナイトは笑い、ゆっくりと部屋から出ていった。

「…今はそつとしといてやれ。」

とガイラルがルカリオに言った。

「紅き目は二つでセット。だから片目だけで二つの目分紅き目が余分に働いて暴走するのか。何という…。」

とガブリアスが悲しい表情で言った。

「サーナイト…。」

とルカリオは悲しい表情でドアを見つめていた。

サーナイトの過去（後書き）

サーナイトの過去が判明しました。

ルカリオ「サーナイト…。」

心配ですね…。

次回をお楽しみに。

成長（前書き）

ちよつと用事があつて遅くなりました。

それではどうぞ！

成長

私は何をしているのだろう。

これじゃルカリオさん達に心配をかけるだけ。

……。

ゾロアークの部屋から出た後、サーナイトはすぐに宿へと戻った。

「私はルカリオさん達と一緒に رفتら駄目だね……。」

「つたく。やっぱりここにいたか。」

……ルカリオさん？

いや、違う。

「ガイラルさん……。」

とベッドに座るサーナイトへと宿の部屋に入ってきたのは、ガイラルだった。

「サーナイト。アンタの事をルカリオ達は迷惑だとか言ったか？」

とガイラルはサーナイトに問いかける。

「……………」

とサーナイトとガイラルが向き合ったまま、黙り込んだ。

静寂が続く。正式には一分程の沈黙だが、二人には何時間に感じたであろう静寂。

「…確かにルカリオさん達からは何も言われていません。だけど…。」

「ならそれで良いじゃねえか。お前はルカリオ達にとって仲間。ルカリオが言ったら？オッドアイだからとかそんなの関係ねえよ。」

とガイラルはサーナイトから目をそらさず、はきはきと話した。

「…でも！」

とサーナイトは少しムキになり、叫んだ。

だが、

「お前が抜きたいなら勝手に抜けるといい。だが、嫌なのに抜けるのは許さねえからな！」

とガイラルの言葉にかき消された。

陽気なガイラルが怒るのは珍しく、サーナイトは目を丸くして驚い

た。

「っと！すまねえ。つい怒鳴っちゃった。」

とガイラルは苦笑いしながら頭を少し掻いた。

「私がどうしたいか……か。」

とサーナイトは窓を見つめた。

外の景色は真っ白で、殺風景だった。

「とにかく……だ。俺は行くけど、もし抜けるなら誰かに言えよ。まあ誰も納得はしないだろうが、お前の意思次第だ。」

とガイラルはドアから部屋を出ていった。

「私は……………」

とサーナイトはベッドに横たわった。

あれでサーナイトが立ち直ればいいがな。まあアイツなら大丈夫だ。きっと自分で答えを見つけるはずだな。

さてと…宿の外へ出たはいいが、ガブリアス達はまだゾロアークの家か？

しかし妙だ。神の支配者達が全く来ないなんて。何か嫌な感じがする。気のせいならいいが。

だが、ガイラルの抱いた悪寒は、見事に的中した。

…？誰か歩いてくるな。遠くだから分らないが、ルカリオか？

その悪寒の正体は————

ルカリオ達はガイラルの予想通り、ゾロアークの部屋にいた。

既にゾロアークは目覚めており、ガイラルの治癒魔術、『エクスヒール』によって骨折はほぼ治りかけていた。

「しかし凄いな…。治癒魔術って鍛えるところまで治癒力を高めることが出来るのか。」

バシャーモはへえーと頷きながら話していた。

だがそのことよりもルカリオとガブリアスは、サーナイトが心配だった。

「そんな二人とも落ち込むなって！サーナイトは大丈夫よ。」

ゾロアークは布団に下半身だけ埋もれて座りながら言った。

「そうか。そうだよな。」

とルカリオが少し無理しながら言った。

それを見てゾロアークは溜め息をついた。

「ガイラルは何をしにいったんだ？まだ戻って来ないが、一体なにしてんだか。」

ガブリアスは少し呆れながら言った。

だが、そんな雑談も一つの音で終わった。

シャイン！シュイン！

といった何かを斬るような金属音が外から聞こえてきたのである。

「なっ！神の支配者か！行くぞ！　ゾロアークは家にいてくれ。」

とガブリアスはルカリオ達と共に外へと出た。

「宿の方からか。急ごう！」

とルカリオが走りだし、ガブリアスとバシャーモも後に続いた。

そして宿の前へと辿り着いた。そして驚愕の景色を目の当たりにした。

そこにはガイラルが左腕に大きな傷跡ができ、血を足らしながら力無くぶら下がっていた。

「お、お前ら…。」

とガイラルがルカリオ達に気付いた。

そして、ガブリアスはその傷を与えた人を見た。

「お前は…！」

その悪寒の正体は、

劍神、エルレイドの姿であった。

成長（後書き）

技紹介です。

エクスヒール

治癒力を高める上級治癒魔術。

いかがでしたか？

次回をお楽しみに！

剣神

剣神エルレイド。

あのオノノクスやジャローダを纏めるリーダー。

ルカリオはガブリアスから話された話を思い出していた。

「『今の俺達では勝てない』」

「お前が、エルレイドか！」

脳にガブリアスの言葉を浮かべながら、ルカリオは剣を構えた。

エルレイドはルカリオのほうへと体を向けた。

その姿は、緑と白の頭と顔に、胸には赤い突起物。そして全体的に白い体。腕は緑色で肘から長い刀のようなものが出ていた。

そして、目は赤色。紅き目だ。

「ガイラルの弟ですか。そしてガブリアス。おや、それとオマケの人が一人。おやおや？あの有名なゾロアークさんはいないようで。」

とエルレイドは言った。その言葉はとても冷たく、まるで感情が無いようだ。

「エル：レイド：！お前は何しに来た！」

とガブリアスはいつものにまして真剣な顔つきで言った。

「紅き目についての情報収集と、敵戦力の確認ですよ。まあ、大したことなさそうですが。」

とエルレイドは見下した。

「ふざけっ！」

とバシャーモが怒鳴ろうとすると、

「止めろ。迂闊に動くな。絶対にだ。」

とガブリアスがバシャーモを制止した。

「おいっ！お前達は一体何のために紅き目の所有者を集めてる！」
ガイラルが斬られて血が流れる左腕を押さえながら言った。ガイラルの地面の雪に赤い血の斑点が出来ていた。

「教えてあげましょう。」

とガイラルに向きながら話した。

「アルセウス様は、紅き目のエネルギーを集めて自分の力にしようとしていらっしゃる。」

と腕を上げて言った。

「一体何のため…！」

とガイラルがさらに聞くと、

「アルセウス様は新しい世界に作りなおそうとしている…！アルセウス様は元々創造神。その力を取り戻す為に紅き目を集めている！」

と高らかに声を上げて叫んだ。

「なっ！そんなことをしたらこの世界の人々は…！」

とガブリアスが驚くと、

「ああそうさ！人類は紅き目の所有者を残して全滅さ！一人残らず！」

とエルレイドは大声で言った。

まさに狂気の沙汰。

人間にあらず考え。もはやアルセウスは人間ではなく、エルレイドの言う通り神なのだ。ルカリオ達は確信した。

「そして、紅き目——つまり選ばれし者だけが生き残るユートピアが出来る！そのためなら……！私は悪魔だろうが何にだってなりますよ。ガブリアス。アナタはそのために入ったのではないのですか？」

とエルレイドはガブリアスを睨んだ。

「俺はただ興味で入っただけだ！あの時の俺はどうかした……！段々アルセウスのやることがおかしく思えてきて、抜けた。」

とガブリアスはうつ向いた。

「フン。たかが興味で入ったのですか。随分浅はかですね。あなたはもっと冷静かと思いましたが。さて、そろそろ話は終わりです。」

とガブリアスを見下し、エルレイドは腰に鋼鉄の紐でぶら下げた二つの刀の鞘から、刀を取り出した。

「どうせなら今全員殺したい所ですが、生憎アルセウス様に止められていてね。少し痛めつけるとしましょうか。」

エルレイドは刀を両手に持ち、構えた。

その刀は双方色が違い、左腕の刀は紫色に輝いていて、右腕の刀は赤色に輝いていた。

「くっ！やるしかないようだな……！ルカリオ、バシャーモ。絶対に手を抜くなよ！あいつは剣神と呼ばれる程剣の使い方に慣れている。」

刀もナイフも大剣も例外ではない。」

とガブリアスも構え、ルカリオ達も武器を構えた。

「まだ右腕は使えるか……。やるだけやるしかねえ！」

ガイラルは何とか右腕だけで剣を握りしめ、エルレイドへと斬りかかる。

だが、

「『かまいたち』」

エルレイドは刀を振り回し、風圧で作られたかまいたちを飛ばした。

「ぐあっ!!」

ガイラルは左足に斬撃を食らい、ガクンと崩れ落ちた。

「フン。ガイラルもこの程度ですか。」

とエルレイドはガブリアス達のほうへと向いた。だが既にガブリアスはエルレイドの腹に殴りかかっていた。

「『臥竜』！」

強烈な重いアッパーがエルレイドの腹にめり込んだ。

はずだった。

「えっ？」

ルカリオは明らかにエルレイドを捉えたアッパーが当たらず、エルレイドが消えていた事に気付いた。

「『神風』」

エルレイドは風に流されるように移動して避けていた。

「くっ！風に身を任せて避けたか……。これじゃ攻撃を当てるのは難しいか……。ルカリオ！バシャーモ！援護を頼む！」

とガブリアスはルカリオ達に援護するように頼んだ。

戦闘が続く。が、エルレイドの攻撃を避けるのが精一杯で、エルレイドにダメージは微量だった。

「避けていては勝てませんよ！ふっ！」

エルレイドがルカリオに攻撃を繰り返す。

最初は右足に斬撃。跳んで避けるが、今度は別の手を使いルカリオの右腕に斬撃。

「ほらほら！避けてみなさいよ！」

エルレイドは攻撃を続ける。

「くっそ…！右腕が傷んで避けにくい…！」

とルカリオは今にも当たりそうな動きで精一杯避けていた。

「援護する！魔術！ドラゴンブレード！」

ガブリアスはすかさずドラゴンブレードを使ってエルレイドに衝撃波を飛ばした。

「『受流』」

とエルレイドは背後へ振り向き刀で衝撃波をガブリアスへと受け流した。

「くっ！この程度の魔術は効かないか！」

ガブリアスは右へと走り避けた。

「三人でこの程度ですか？ガイラルも援護に入ったらどうです？」

とエルレイドはガイラルをバカにしながら言った。

「くっ…！悔しいが足と腕の感覚が全くねえ…。」

と倒れ込むガイラルが呟いた。かなりの血の量が出ていて、かなり深刻な状況となった。

「兄さん！くっそ…！まるで歯がたたねえ…。」
とルカリオはうつ向いて悔しがっていた。

「サーナイトとゾロアークがいなのはキツイ…。だがゾロアークはケガをしていて動けない…。」

バシャーモはそう言って、くそっ！と声を出した。

「サーナイトは一体何を…。」

ルカリオが言いかけると、頭上から空を裂くような音とともに白いレーザーがエルレイド目掛けて放たれた。

「…？ふっ！」

軽々と神風でエルレイドは避けたが、レーザーが放たれた場所には雪が溶けて大きな穴が出来た。

「おまたせしました。もう私は迷いません。」

レーザーの後に降ってきたのは、サーナイトであった。

「もう決めました。私はアルセウスを倒します！あなたもです！」
とサーナイトはエルレイドを指差して、叫んだ。

剣神（後書き）

技紹介です

臥竜

竜と鋼のエネルギーを使う強烈なアップー。

かまいたち

風と超のエネルギーを使い、体ごと刀を振り回し、円形の衝撃波を飛ばす技。

神風

風に乗って攻撃を避ける技。殴ったり斬ったりするときにする僅かな風圧でも避けることができる。

いかがでしたか？

人気は無いですが、精一杯頑張ります！！

野望

「エルレイドがアイスへ着くまで」

「――エルレイド。ガイラル達の戦力の確認を頼むぞ。だが確認だけだ。殺さなくていい。」

「何故だ？何故あいつらを早く消さないんだ？相変わらずアルセウスのは考えは分からない。」

「失礼ですが、何故殺さないのですか？あいつらは確実にアルセウス様の計画の邪魔に……。」

「ああ。確かに邪魔にはなるだろうが、お前が万が一倒されたり、負傷したりするとそちらの方がまずいのだ。だから怪我をせぬよう偵察に行かせるだけだ。」

「……コイツ、私をなめているのか？この剣神と呼ばれた私を……。ちっ、まあいい。」

「……分かりました。では、行って参ります。『テレポート』。」

俺は絶対にアルセウスを使って作り上げてやる。最高の世界を！何をして……。

「…サーナイト！来たんだな！」

ルカリオが笑みを浮かべる。

それをサーナイトは軽く頭を下げて、ニッコリと笑った。

「はい。私は迷いません。ルカリオさん達と戦いたいです！」

サーナイトは宿から持ってきた銃を二丁構えた。

「そういえば、サーナイトは銃を使っているところを見たことないが、強いのか？」

ガブリアスがルカリオに聞くと、

「分からないが、何だかいつもと雰囲気が違う…。」

ルカリオも銃を使った所を見た事が無く、少し期待を抱いた。

「跳ねかえれ！そして、敵を討て！『バウンドショット』！」

サーナイトの光輝く銃口から、黄色い銃弾が放たれた。

「フン。何かと思えば、『神風』。」

エルレイドは風に身を任せて、軽々と避けた。

だが、放たれた銃弾はエルレイドの後ろへ通りすぎると、ゴム玉の

ように跳ね返った。

「バウンドショットはただの銃弾じゃありませんよ。跳ね返ります！」

銃弾はエルレイド目掛けて跳ね返り、油断していたエルレイドの背中へと当たった。

「ぐあっ！…なんだこの威力は…？」

エルレイドは背中に走った痛み耐えながらサーナイトを睨んだ。

「私のバウンドショットはイレギュラーでしてね。跳ね返ると威力が増し、速さも桁違いです。」

サーナイトは銃を指でクルクルと回しながら言った。悩みが無くなった分、迷わずに行動が出来るようになっていた。

「すげえ…！サーナイトがああエルレイドに攻撃を与えた！」

ルカリオは一連の流れを見て、喜びの言葉を上げた。

「畳み掛けるぞ！魔術！ドラゴンブレードオ！」

ガブリアスはよろめくエルレイドへと斬撃を放った。

「調子に…乗るなあああ！魔術！『フルダークバリア』！」

エルレイドはサーナイトとガブリアス達の合流を防ぐように、サーナイトとエルレイドを囲む結界を出した。

「なっ！貴様…。サーナイトと一対一でやるつもりか…！」

ガブリアスがエルレイドへと叫んだ。

非常にまずい状況。ルカリオ達はサーナイトとの合流を分断され、サーナイトはエルレイドと共に閉じ込められた。

「サーナイトと言ったな！俺に傷を付けた事、後悔させてやる…！」

エルレイドは怒りをサーナイトへぶつけるつもりだった。自分への命令を完璧に忘れていたようだった。

「私と一対一ですか…。ならば私も覚悟を決めます。」

サーナイトは銃を握りしめ、紅き目の力が発動した。

「私は！もう紅き目に飲まれません！」

サーナイトはいつもよりも強く輝いた紅き目の力を、銃弾に込めた。

「気合いだけで私が倒せると思うな！光れ！紫電！紅雲！」

エルレイドは両手に持った刀にエネルギーを注ぎ込む。すると、二つの刀は強く輝きだした。

その刀から溢れ出すオーラは、禍々しく混ざり合い、異様な色をしていた。

「ハァ…。逃げ場はないぞ！この刀達の餌となれ！」

エルレイドは刀をサーナイトに向けて、叫んだ。

「貴方も逃げられませんか？ エネルギー装填完了…。穿て！ 『レットバレット』 オ！！」

サーナイトはエルレイドへ向けて、渾身の銃弾を放った。

「殺す！ 『村雨』！！」

エルレイドは銃弾へと刀を使い、紫色の斬撃を放った。

双方の渾身の技はぶつかり合い、爆発を起こして相殺した。結界の中は煙が立ち込め、ルカリオ達からは何が起きているか分からない状況となった。

「中はどうなってるんだ…？ サーナイトは無事なのか？」

ルカリオが中の様子を伺うが、やはり煙で中の状態が分からない。ルカリオは「くそっ！」と悔しそうに言った。

ルカリオ達はただ、その場で立ち尽くすことしか出来なかった…。

野望（後書き）

前回の話の技をひとつ書いていなかったです…。
技紹介です。

うけながし
受流

刀で相手の技の威力を一旦殺し、再び別の方向へ受けた技を放つ技。

バウンドショット

超、草のエネルギーを使い、相手に目掛けて跳ねる弾丸を放つ技。

フルダークバリア

超、悪のエネルギーを使い、協力な魔術を当てない限り壊せない境界を張る。ゾロアーククラスの魔術師ではないと破るのは難しい。

レッドバレット

紅き目の力を込めて放つ銃弾。決意が強ければ強いほど威力が上がる。

村雨（ムラサメ）

エネルギーを込めて強くなる妖刀、紫電から放たれる斬撃。かなりのエネルギーを消費するが、それ相応の威力。

いかがでしたか？

次回をお楽しみに！

終わりと始まり

ルカリオさん達が何かを言っている声が聞こえる。

うつすらの思考だけど、かすかに聞こえる。エルレイドに一矢報えたのかな？

多分エルレイドは生きているし、もしかしたら気を失ってさえないないかもしれない。

だけど私、役にたてたかな……………。

段々と立ち込める砂煙が晴れてくる。そして立ち上がっている者は…。

エルレイドであった。

「つつつ!!」

倒れこむサーナイトを見て、ルカリオは悲痛な叫びを上げた。

「くっ…!! コイツ、何て魔力を…。迷いが無くなっただけでここまで魔力が上がるのか…!?!」

エルレイドは覚束ない足取りでその場に立つ。エルレイドはエルレイドでかなりのダメージを負っていた。

ガブリアスは悲惨な状況で絶望的な考えが思い浮かんでしまい、思わず下を向いた。

バシャーモは怒りをあらわにして、結界を殴り続ける。

「壊れろ! 壊れろよ!! ルカリオも手伝え!」

バシャーモはルカリオに助けを求めるが、ルカリオは既に戦意を失いかけていた。

「やはりコイツらは危険だ! 止めを…。」

エルレイドはサーナイトの近くに寄るが、エルレイドの隣に魔方陣が現れる。誰かがそこにテレポートしたのだ。

テレポートしてきた人物は…ジャローダであった。

「エルレイド。もう止めなよ。アルセウスの命令を忘れていないよね?」

珍しく冷静なジャローダが尾を手のように使い、エルレイドの肩を叩いた。

「…だが、コイツらは…。」

エルレイドはジャローダの言うことを聞こうとしない。

「今はアルセウスの言うことを聞きなよ。最高の世界を創るんじゃない。なかったの?」

ジャローダはまたしてもエルレイドに説得をする。話し方からしてエルレイドやジャローダはアルセウスを利用しているようだ。

「……………」

エルレイドは刀を鞘に納め、黙り込んだ。

「…? 結界が消えた…。」

エルレイドの使ったフルダークバリアが徐々に解除されて行くのをルカリオは呟いた。

するとエルレイドはこう言った。

「この勝負は預ける。だが、まだ終わったと思うな。私…。いや、私達の野望は必ずやり遂げる…!」

そう言い残して、エルレイドはジャローダと共に消えた。

まるで嵐が去ったように。

「……………」

ゾロアークの家へと戻ったルカリオ達は黙り込んだ。

ルカリオは自分の不甲斐なさを悔やみ、黙り込んだ。

「俺は何も出来なかった…。畜生！」

ガイラルはゾロアークに治療されながら、嘆いた。

「今の事は忘れなよ。サーナイトも結局気を失っているだけなんだしさ。」

ゾロアークがルカリオ達に励ましの言葉をかけるが、返事は無い。

「俺……まだまだガキだったな…。」

沈黙の中、一番最初に声を出したのはルカリオだった。

「アルセウスに復讐したいから仲間を集めて…。バシャーモにもサーナイトにもガブリアスにも兄さんにもゾロアークにも迷惑かけた…。」

ルカリオは自分の愚かさを嘆き、手に力を入れる。

「俺、もっと大人にならないと…。絶対に…。」

その言葉でまたしても沈黙。そしてそのままゾロアークの家で一夜

を過ごした。

「ん……………。朝か…。」

バシャーモが隣で寝ている中、ルカリオは目を覚ました。

回りは和式の部屋。そして何故かティーカップなどが部屋の中央のガラステーブルに置かれている。

一言で表せば、変な部屋。

「確かサーナイトとゾロアークは別の部屋か…。」

ルカリオはそんな事を気にせずサーナイトの場所を確認する。

「……………今サーナイトに話に行くのは駄目だな…。もう一回寝とくか…。」

そしてルカリオは再び布団に潜り込み、目を閉じるが、

「オラオラ！二人とも起きろー！！」

ガイラルの大声で、ルカリオは「おわっ!？」と飛び起き、バシャーモは目を擦りながらゆっくりと起き上がった。

「よし。起きたか。」

ガイラルは満足げに言う。

「…どうしたんだよ兄さん…。」

二度寝しようとしているところを起こされたので不機嫌になっているルカリオ。

そんな事を全く気に留めずガイラルは話しを続ける。

「お前らに話したい重要な事があってな。もうサーナイトも元気だぜ。さあ身支度して外に来い！」

ガイラルは言いたい事を言ってから、宿の階段を部屋を出て降りていった。

「つたく…。何だよ話って…。」

などとルカリオとバシャーモは愚痴を言いつつ、毛並などを整えて階段を降りていった。

「…………おはようございます!」

ルカリオとバシャーモは宿を出ると、近くにいたサーナイトにまた

しても大声で話しかけられ、またルカリオが「うえっ!？」と変な声を出した。

「…サーナイト! 元気になったんだな! 大丈夫か?」

だがすかさずルカリオはサーナイトの体を心配する。

「はい! もう大丈夫です。うまくエルレイドさんの技とぶつかり合
ってダメージを軽減出来たみたいです。」

サーナイトは今までよりもより一層元気そうだった。

「そろそろ良いか? 二人とも。」

ガブリアスがルカリオ達にそう言うのと、ルカリオもサーナイトもピ
タリと雑談を止めた。

ルカリオは回りを見渡すと、サーナイト、バシャーモ、ガイラル、
ガブリアス、ゾロアークがいるのは分かったが、何故だかマニ
ューラもいた。

「…たく…何で私が…。」

とマニニューラはブツブツと何か文句を言っていた。

「まあまあ。そう言うなよ。俺らでまた反神の支配者モドキが出来
るんだからよ?」

とガイラルがマニニューラの肩を叩く。

すると何故だかマニニューラは少し顔を赤くして「し、しょうがないね。」と呟いた。

どうやらあまり馴れ合うのが恥ずかしいようだ。

「さて。話というのは、チームを二つに分けてこれから行動しないか？という話だ。」

ガブリアスがそこにいる全員に言った。

「えっ？何のためにさ。」

ゾロアークが当然の事を質問する。

それもそのはず。昨日にエルレイドに手も足も出なかったというのに、わざわざ戦力を分散する意味が無いからだ。

「勿論もう少しはここに留まって鍛えるさ。あと、推定だが神の支配者達はしばらく襲ってこないだろう。」

ガブリアスはそう発言すると、サーナイトは納得するように頷いた。

なぜなら、あのエルレイドに襲われて生き残ったどころか、むしろ大ダメージを与えたのだから。

「で、どうチームを組むよ？今合計で…えと、7人だな。」

ガイラルは指で場にいる人数を数えた。

言ったとおり全員で7人。ルカリオ、バシャーモ、サーナイト、ガイラル、ガブリアス、ゾロアーク、そしてマニニューラ。

するとバシャーモが少し冗談混じりに、

「いっそのこと『元』反神の支配者と、それ以外で組んだらどうだ？」

と言った。

だが回りの反応は思ったより賛成派のが多くて、バシャーモは苦笑いした。

「よし。じゃあ一周間後、そのチームで行くぞ！俺たち『元』反神の支配者チームはアイスから出て『グリーン』という町に向かう。そしてルカリオ達のチームはグリーンとは逆に進んだ『フレイム』という町に進んでくれ。確かフレイムには紅き目の所有者がいるらしいが…。」

ガイラルがハキハキと話し、両チームの目的が出来た。

「では一周間後にまたな！解散！」

第一期
END

終わりと始まり（後書き）

第一期ENDです！

これからいくつかの視点に切り替えてストーリーは進みます。

楽しみにしてください。

第二章 プロローグ1 神の支配者（前書き）

第二章突入です。

プロローグですので文は短めです。

それではどうぞ！

第二章 プロローグ1 神の支配者

「神の支配者本部」

「……………初めまして。今日から神の支配者に入った……………ゴウカザルと申します。」

アルセウスと並んで歩いてきたのは、ゴウカザルと名乗る猿のような見た目の人であった。

オノノクスは疑り深い目でゴウカザルを睨んだ。するとゴウカザルは「そんなに睨まないで下さいよ。」と言い、その場でアルセウスと共に止まった。

「……………アルセウス様。お言葉ですが、ゴウカザルは信用出来るんですか？私にはとても……。」

そうエルレイドがアルセウスに聞くと、ゴウカザルは突然自分の左腕を右腕で折った。部屋に鈍い音が響く。

「なっ!?!」

思わず驚くエルレイド。だが、平然とした顔でゴウカザルは

「これで信用出来ましたか？お望みなら首以外ならどこでも折りますよ?」

左腕をぶら下げながら言った。

「アハハ！稀にみる狂人だねー！面白いや。」

ケラケラと笑うジャローダ。だがやはり心からは笑っておらず、目が疑っている目だった。

「それでだ。ゴウカザルはエルレイドの代わりにオノノクス達のリーダーになれ。エルレイドは私の護衛に回れ。」

アルセウスは突然ゴウカザルをオノノクス達のリーダーへと仕向けた。

エルレイドは前回の失態があったため、何も言わずに頷いた。

だが、オノノクスは

「アルセウス様！なぜこのような若造を！」

やはり反対。ジャローダは「別に従わないから誰でもいいよー」と軽く返事をした。

「若造？だが実力は確か。歳など毛ほども関係ないわ。」

とアルセウスに一蹴され、オノノクスは黙ってしまった。

「って事なんで。よろしくっスお二人さん。」

とゴウカザルがオノノクスの近くに寄る。

だがオノノクスは大剣をゴウカザルの首元へと向けた。

「調子に乗るな若造。お前が俺達に従えると思ったか？」

オノノクスはさらに首元に剣を近づける。

するとゴウカザルは

「ええ。従えると思っていますよ。」

オノノクスの剣の先端をを手で握り潰した。

「……何っ！特別な素材で出来た剣を……」

オノノクスは驚きながら後ろへ下がる。

「くっく。オノノクス。ゴウカザルはさっきのとおり圧倒的パワーを持っている。お前でも争うのはよすんだな。」

アルセウスは少しだけ笑い、二人を止めた。

「まあお互い怪我するのは勘弁ですし、ね？」

ゴウカザルは剣から手を離し、攻撃しないと云わんばかりに両手を上げた。

「フン。アルセウス様の命だ。だが私は認めんからな。」

とオノノクスは自分の部屋へと歩いていった。

「アイツは頑固だからな。まあ私は行くから、ジャローダとでも話

「していてくれ。」

アルセウスも自分の場所へとレポートした。

「よろしくっス。ジャローダさん。」

ゴウカザルは直ぐにジャローダへと近づく。

するとジャローダはケラケラと笑いながら

「君、ホントは腕折れてないでしょ？外しただけでしょ？」

と突然言い出した。

するとゴウカザルは「ばれましたか。」と言い、折った筈の腕を動かした。

「さすがジャローダさんっス。いつから気づいていたんスか？」

と軽いノリでジャローダに聞く。

「アハハ！愚問だよ。最初からさ。多分エルレイドも途中から気づいたんじゃない？」

またケラケラと笑った。人を小馬鹿にしたような笑い方は全く変わらない。

「…へえ。バレないようにしたんだけどなくちよつとショックっス。」

とゴウカザルは困ったように頭を掻いた。

するとエルレイドはジャローダの近くに歩いてきて、

「フン。ゴウカザルも長々頭がいいようだな。私も安心してアルセウス様の護衛につける。頼んだぞ。ゴウカザル。」

ポンとゴウカザルの肩を叩き、アルセウスの元に向かった。

「…ええ。しっかり働きますよ。アルセウス様の為にね……。」

ゴウカザルはそう呟き、部屋へと歩いていった。

第二章 プロローグ1 神の支配者（後書き）

どうでしたか？

このゴウカザルという男がどうストーリーに関係するのか、何となく自分もワクワクします（笑）

次回をお楽しみに！

プロローグ2 とある町にて（前書き）

最終プロローグですね。

これはルカリオ達が見ることになる光景の少し前の話です。

それではどうぞ！

プロローグ2 とある町にて

「悪いねーバンギラス！まあアンタ力持ちだから良いじゃん！」

軽いテンションで段ボールを運ぶ大男に話しかける男。

「つたく、これくらい自分で運べよジュカイン！」

そしてその男に返事をするバンギラスという大男。

この二人はこの町で有名な仲良しコンビだ。大型飛行船に荷物を置く仕事をしている。

「何か飲み物奢ってやるからさ！水で良いか？」

飛行船から降りてすぐの自販機の近くにジュカインが寄り、水を選択しようとする。

「ミックスオレだ！」

だがバンギラスに先にミックスオレを押されてしまい、ガコンとミックスオレが落ちてきた。

「あー！一番高いタイプのやつ選択しやがって！」
ジュカインが入れたお金（1000ポケ）の全て使ったジュースを買われてしまい、怒った。

「なら自分で運べや！俺が殆ど運んだからこっちはヘトヘトなんだよ！」

とむしろバンギラスが怒り、言い返せなくなるジュカイン。

こういった他愛ない話が彼らの日常。そう、これだけなら…。

「仕事終わったな。もうすっかり陽も暮れてるな。」

色々な店が目立つ大通りを歩くバンギラスとジュカイン。二人とも眩しそうに陽を手で塞ぐ。

「ああ。昔の仲間を思い出したよ。」

バンギラス曰く、滅多に真面目じゃないジュカインしか知らないの
で真面目な顔をしたジュカインに驚いた。

「今日は帰ってさっさと寝ようか——」

バンギラスが喋ろうとした時、

「たっ大変だ！神の支配者が来たぞー！」

という走ってきた青年の声にかき消される。

「何だと！ジュカイン！他の人を避難させてくれ！俺が見に行くから！」

バンギラスはすぐに神の支配者がいる方向へと走る。

「おい！…くそっ！これも嫌な因果みたいなものか…！君！どんどん皆に伝えてくれ！」

ジュカインはその青年の肩をポンと叩き、既に見えなくなったバンギラスを追いかけた。

息を切らしながら走ると、ジュカインは立ち尽くした。

左腕が吹き飛ばされて、血まみれになる友人の姿を見て。

「ジ、ジュカイン！来るな！」

バンギラスはこちらに気づき、逃げるように叫ぶ。

だが、今のジュカインには逆効果だった。

「…す。こ…す。てめえエエエ！ぶっ殺す！」

ジュカインは血のような真っ赤に光った目になりながら、友人の腕を奪った何者かに走る。

この光景は、ルカリオ達がこの町に着数分前の光景だ。

プロローグ2 とある町にて（後書き）

いかがでしたか？

町の名前は勿論後でのお楽しみで…。

次話は残念ながらまた番外編です…。

何を書くのかは、…まあのちほど。

次回をお楽しみに！

〔番外編〕技＋α

個人的に書きたくなりました…。

前も言った通りに代々10話くらい挟んで番外編を書きますので、
よろしくお願いします。

ルカリオ（剣）

風牙

空波斬

波動斬

烈風斬

メタルスピア

波動弾

サーナイト（ナイフ／銃）

ナイフレイン

サイコレーザー

サウザンナイフ

ホーリーブレード

ブースト

バウンドショット

レッドバレット

バシャーモ（拳）

岩砕脚

火炎拳

フレイムアーマー

フレアバーン

爆炎拳

フレイムドロップ

円転脚

ガイラル（剣）

剛炎斬

剛覇雷撃斬

アイアンキック

グラウンドカタストロフ

波動弾

ガブリアス（爪／拳）

竜牙昇

牙突

下段脚

飛竜拳

臥竜

ドラゴンブレード

ソニックターン

ゾロアーク（爪）

ダークブレード

バトルフィールド

ドラゴンスレイヤー

オーバーロード

魔法壁

結界

（神の支配者）

オノノクス（大剣）

竜の舞い

ジャローダ（尻尾）

ローズウィップ

バレットシード

ヘルプラント

ガードリーフ

エルレイド

かまいたち

神風

受流

村雨

各エネルギーの情報

炎

物を燃やしたり、温度を上げるエネルギー。ブーストした場合、筋力を上げると共に手や足を常に発火させたりする事が出来る。魔術は主に標的に火の玉を飛ばしたり、鍛えたら標的を発火させたり出来る。

水

傷を癒したり、特定の物を液状に出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共に体の一部を一時的に液状にすることも出来る。魔術は主に水圧を操りレーザーを放ったり、地面を液状化させることも出来る。

草

傷や病気を癒したり、植物を操れる。ブーストした場合、筋力を上げると共に体に触れた植物をムチのように操ったり、植物の種を銃弾のように弾き飛ばしたり出来る。魔術は主にエネルギーを与えた植物が生き物のようになり自分の手足となり、標的に攻撃出来る。

地

石や土を操り、攻撃出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共に体の一部を石に変え、攻撃力と防御力を上げる。魔術は主に大きな岩を空中に出現させたり、地面から岩を突き出すことも出来る。

電気

電気を操り、雷を落とすことも出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共に電気で体の一部を活性化させれる。魔術は主に体に電気エネルギーを充電させ、それを放つ事が出来る。

超

物体を浮かせたりする事が出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共にエネルギーを放出しレーザーを放つ事が出来る。魔術は主に物体を出現させたり、物体をねじ曲げたり出来る。

風

風を起こしたりする事が出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共に自分の体重を減らしてより速く移動出来る。魔術は主に風の刃を作ったり、相手を風で吹き飛ばしたり出来る。

鋼

鋼鉄を出現させたり出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共に体の一部を鋼鉄に変え、防御力が主に上がる。魔術は主に鉄を飛ばしたり、鉄を変形させて攻撃も出来る。

氷

液体を凍らせたり出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共に標的が触れた部位を凍らせ、動きを鈍く出来る。魔術は主に巨大なつららを落としたり、水を凍らせて攻撃も出来る。

闘

自分を強化させる。ブーストした時に自分の筋力を二倍まで高める。魔術は他のエネルギーと組み合わせる事で力を発揮する。例えば超と闘を合わせたらより速く強いレーザーを放てるなど。

霊

自分を見えなくさせたり出来る。ブーストした場合、筋力を上げると共に自分の体の一部を相手に見えなくさせる。魔術は主に相手の行動を制御したり、相手の筋力を一時的に下げたり出来る。

悪

自分の思考回路を活性化させたりする。ブーストした場合、筋力を上げると共に頭脳を活性化させ、最も食らう箇所に的確に攻撃出来る。魔術は主に自分の体力を削ることで強くなる武器などを作り出せる。

竜

竜のような圧倒的パワーで戦える。ブーストした場合、筋力を上げると同時に腕などを鱗で覆って、殆どの攻撃を防げる。魔術は主に竜の形をしたエネルギーを飛ばしたり、短時間自分の力を爆発的に上々出来る。

ありがとうございました。

次回は二章へと入り始めます。

次回をお楽しみに！

ルカリオサイド…謎の人物

ルカリオ達はアイズで二つにチームを分け、別々の道を目指していた。

一周間だけの修行だが様々な実感を得て、前とは心構えも異なっていた。

「このメンバーで旅出来るなんてな。」

バシャーモはかつてないメンバーを楽しく思い、ニコニコしながら歩いていた。

「…まあこのメンバーで嬉しいが、楽しい旅ではないよな。」

ルカリオもこんなメンバーなのはもちろん嬉しいのだが、旅の内容はアルセウスを最終的には倒す旅なので油断など出来ない。

「……………」

ルカリオ達が話す中で、サーナイトは黙々と本を読んでいた。

サーナイトが読んでいる魔術の本は、ゾロアークとの修行中に借りた物で、ゾロアーク曰くかなり貴重な本らしい。

当然サーナイトにとっては大好物のようなもので、おかげでサ

ーナイトは軽く寝不足だ。

「サーナイトちゃん。前に木が…。」

ゾロアークがサーナイトに話しかけるが、

「……………うっ!？」

時既に遅し。木に頭をぶつけて転けた。

「痛いです…。」

軽く涙目になりながら頭を擦った。

「はぁ…。前方不注意。読むのは後!」

ゾロアークはサーナイトの頭を軽く叩いた。

サーナイトはエルレイドと戦ってからより一層魔術の腕を磨き、かなりの魔術師となっていた。

ゾロアークは元々凄い魔力の持ち主なので、修行した事でかなりの手練れとなった。

「はい…。」

サーナイトは頭を擦りながら返事をした。

今ルカリオ達がいるのはフレイムへ向かう途中の『ストーンロード』

という道だ。

フレイムは活火山のふもとにある小さな村なので、まず活火山の『フレイム山脈』を目指していた。ストーンロードは名前の通り岩石で出来た荒れ道である。ルカリオ達はそんな道を歩いているので、かなりの体力を消耗する。

「サーナイト。まずフレイム山脈に着いてからどうやって行くんだっけ？」

ルカリオはサーナイトにどうつくかを再確認をした。

「まず山に小さな洞窟があるらしく、そこを歩いて行くと出口はちようどフレイムに着くらしいです。」

とスラスラと喋った。

「どうやらフレイムの住人が移動しやすく洞窟を掘ったんだろうね。」

ゾロアークは納得するように頷いた。

しばらくルカリオ達は荒地を歩いて行くと、突然立ち止まった。

何故なら、空から鉄で覆われた鳥に突然話しかけられたからだ。

「貴様がルカリオだな？」

と空を飛んでいる鳥が言った。

「だったら？」

ルカリオは挑発的な態度を取り、全員臨戦体制に入った。

「フン。ゴウカザル様の命により、貴様らを抹殺する！ エアームド兵ども！ 続け！」

すると大量のエアームドが空から襲ってきた。

「『鋼の翼』！」

エアームドは羽を鉄に変形させ、急降下してきた。

「臨むところだ！ 久々の…風牙あ！！」

より一層威力の増したルカリオの強力な衝撃波は、急降下してきたエアームドを数匹切り裂いた。

「くっ…！ どんどん行け！」

またリーダーとみえるエアームドが指揮を取る。またしても大量のエアームドが急降下してきた。

「…サイコレザー！ 続けて下さい！」

サーナイトが何体かをレーザーで蹴散らし、

「オツケー！ 魔術！ ダークブレードォ！」

ゾロアークが続いて近くまで急降下してきたエアームドを切り捨て

ていった。

バシャーモはすぐに

「フレイムアーマー！」

を発動し、その炎を右腕に全て集中させ

「いくぜえ！特大の…フレアバーン！！」

と通常の三倍の大きさのフレアバーンを連続で放った。

残った敵は、指揮を取っていたエアームドだけとなった。

「くそっ！役立たず共めっ！」

エアームドはその場から飛んで逃げようとするが、

「待て！お前らが言ったゴウカザルって誰だ！答えろ！」

ルカリオが呼び止めた。

「…ゴウカザル様は、最近神の支配者に入られた方だ…それ以外は知らん！」

とエアームドはスピードを上げて、ルカリオ達の前から消えた。

「ゴウカザル…。何だか嫌な感じだな。」

バシャーモは不吉な事が起きそうでしたまらなかった。

「しかしそんな頻繁に神の支配者のメンバーって変わるのかねえ？」

ゾロアークが首を傾げながら言った。

確かにそんなに頻繁に変わっては、どうしてもチームの統率力は乱れてしまう。

「んー…。ガブリアスがいたらいいんだがな」

ルカリオは言葉を言った後、少し考える素振りを見せた。

「？ ……どうしたんですか？」

サーナイトがおかしな素振りをするルカリオに聞く。

「いや、神の支配者の上司ってのは今までの成績だとかでその位置を築くんじゃないかなって。」

ルカリオがそう言うのと、サーナイトは顔つきが真剣になった。

「そうですね…。じゃあもしゴウカザルという方が入ったばかりで一軍を任される程の人材なら…。」

サーナイトがそう言い、

「かなりヤバイな。」

ルカリオが続けて言った。

「取りあえず今はまだ憶測だ。前に進めばいいさ。」

ゾロアークは話をする二人を強引に押して、目的地を目指して歩き出した。

ルカリオサイド..謎の人物(後書き)

終わりました。

一周間も空きましたが、文字は相変わらず少なくてスイマセン…。

次回をお楽しみに！

ガイラルサイド…神秘の森と黒い影

「フーン。なかなか綺麗な森じゃねえか。」

ガイラルが生い茂る針葉樹や、オレンの実がなった木を見ながら言
った。

今ガイラル率いるガイラルチームは、グリーンという町を目指して
いた。

グリーンは、今いる黄緑で覆われた森、『神秘の森』を抜けた街だ。

かなり資源が豊富な街らしく、資源調達が主な目的だ。

「こんな綺麗な森も珍しいよな。おつ、モモンの実だ。」

ガイラルは嬉々として木に生ったモモンの実を取り、豪快にかじっ
た。

「この地は栄養が豊富でな。しかも土地が広い。アルセウスからも
襲われていないしな。」

ガブリアスは地図を見ながら喋った。

「あ…暑い…。」

マニニューラは歩きながら大粒の汗を流していた。

神秘の森は日陰になっていてある程度涼しいが、それでも氷エネルギー中心のマニューラはとても暑いのだ。

ルカリオ達を始めに襲った砂漠では、本人曰く死にそうだったとか。

「おいおい……。だらしないな。ほれっ、冷たい水だ。」

マニューラを見かねたガイラルが、缶に入った冷たい水をマニューラに投げた。

「おお……！ 珍しく気が利くね。」

マニューラはそれを受け取り、開けて一気に飲み干した。

「珍しくとは何だよ！ 何年一緒に旅したと思ってんだ。」

少し怒りながらガイラルは言葉を返した。

「ふむ。懐かしいもんだな。このチームも。まあ二人曲者がいないけどな。」

ガブリアスは冷静な口振りで話した。

「曲者……。ハハッ！ 言えてるな。」

ガイラルは軽く笑った。マニューラも同じく微笑を浮かべた。

そう。『反』神の支配者は全員で五人。だが全員の我が強いので、三人集まったのは奇跡に近い。もっとも、ガブリアスとガイラルは共に行動するのが一番長かったが。

暫く森の中を歩いていく。すると、辺りが突然暗くなり、全員上を見た。

「…！ …おいおい。冗談キツいぜ。」

上を見上げたガイラルは、その影の正体は…。

「…まさか、滅多にこの世界には来ないとされる伝説の人…ポケモン。」ガブリアスは一言溜めて、言った。

「…ギラティナ…！」

その巨大な影は生い茂る木をへし折り、姿を現した。

灰色で構成された体に、赤と黒の縞模様が胴体から股まで続いて、六本もある足は全て金色の鋭い爪で覆われていた。

何よりも特徴的なのは、明らかに巨大な体と首から少し下まで続くマントのような金色の物質。その背中から生えたどす黒い羽は禍々しく揺らいでいた。

「…貴様らか！私の眠りを妨げる者は！」

ギラティナは金の兜のような頭を振り、地面が轟くような咆哮を挙げた。

「一体何の…。」

マニユーラが説得しようとするが、

「黙れ！『シャドーダイブ』！」

ギラティナは話も聞かずに、一瞬にして姿を消した。

「くっそ！やるしかねえか！どこに消えた！」

ガイラルは回りを見回すが、ギラティナの姿は無い。

するとガイラルの影が次第に肥大化していたのをガブリアスが気付いた。

「…っ！ガイラル！避ける！」

ガブリアスが慌ててガイラルに注意を促すが、

「『シャドーダイブ』！」

既にギラティナはガイラルの影から出現し、頭でガイラルの腹に突進をした。

「があっ!!?」

ガイラルは吹き飛ばされ、何度も地面に跳ね返り、木に激突した。

少し口から血を吐き、ゆっくりと立ち上がった。

「な、何て威力…! お前らも気をつけろ…。」

ガイラルは口から滴る血を手で拭くと、直ぐに波動弾の準備に入った。

ガブリアスはギラティナが出てきた時既に、ギラティナの頭に殴り掛かっていた。

「『竜突』!」

そう言うと、ガブリアスは爪で真っ直ぐと華麗な正拳突きを繰り出していた。

「ぐおっ!?!」

ギラティナは頭にダメージが入り、少し動きが鈍くなった。

「マニニューラ! 分かるな?」

ガブリアスは着地した瞬間にマニニューラの方を向いた。

「言われなくても！切り裂け！んで凍れ！『氷爪撃』！」

マニニューラはガブリアス同等のスピードでギリティナの胴体へ近づき、氷ついた爪で切り裂いた。

「ぐう！…舐めた真似を！」

二回も攻撃を当てても、動きが鈍くなるだけだった。

「最後は任せた！ギリラル！」

マニニューラはギリラルに向かって大声を出した。

「おっしゃ！食らいやがれ！『不屈波動弾』！」

赤と青が混ざり合った紫色の波動弾は、凄まじいスピードでギリティナに当たった。

『ぬがぁ！！』

爆発と共に、ギリティナは大声を上げた。

「やったか！？」

ギリラルはギリティナを倒せたか確認する。

だが、ギラティナは多少のダメージしか受けておらず、容易に立ち上がった。

「フン。この程度痛くも痒くもないわ！覚悟しろ！若造。」
ギラティナは再び大声で咆哮した。

「おいおい…！どんだけタフだよ…。」

ガイラルは唾然としていた。

「逃げるか？だがスキが少なすぎるな…。」

ガブリアスは相変わらず冷静に状況を整理している。

「私が足を凍らせようか？」

マニニューラはまたしても氷を爪に纏う。

「ちっ！逃げるしかないか！マニニューラ！俺が援護するから、相手の足を数本凍らせてくれ！」

ガイラルは剣を持ち、紅き目が発動した。

「だらぁ！」

ガイラルは全力で数メートルジャンプした。

「『波動翔』！」

ガイラルは剣から、高速回転する円形の波動弾を何発か連続で放った。

「フンッ！」

ギラティナは軽々と両の羽で波動弾を弾いた。

そのスキにマニニューラはさっきより強く濃い氷を爪に纏わせ、ギラティナの足に斬りかかった。

「今度こそ凍れ！『氷爪連撃』！」

またしてもとてつもないスピードでギラティナの足を切り裂いた。

「…っ！？貴様…。足を凍らせよったな…。」

ギラティナはダメージこそ少ないが、足の自由が氷で止められた。

「さあ！逃げよ！」

マニニューラはすぐにガイラルとガブリアスに声をかけた。

「すまんねギラティナさんよっ！逃げさせて貰うわ！」

ガイラルもマニユーラに続いて街に向けて走る。

ガブリアスも「撤退させて貰う。」

と言い残し、ソニックタウンで一気にガイラルのもとまで走った。

「よしっ！撒いたか。そろそろ街も近いしな。」

ガイラル達は木の根を軽くジャンプして避けながら走り抜けていた。

「相当強く氷で凍らせたからね。数時間はあのままさ。」

マニユーラは笑いながら言った。

「フフ。衰えてないようで何よりだ。」

ガブリアスも微笑を浮かべて、マニユーラを褒めた。

恐らく街の近くであろう場所まで走ってきてから、ガイラルのスピードが遅くなった。

「…っ！……痛んできやがった…。」

そう。ギラティナの攻撃を受けた場所が赤く腫れていた。

「…ざまあないな。俺が足を引っ張ってるなんてな。」

ガイラルは攻撃を受けた右横腹を右手で押さえながら行った。

「…昔もそんなもんだろう。一人で突っ込み、一番怪我してたしな。」

ガブリアスは真面目な顔で言った。

ガイラルはその顔を見て

「説教はよせよ。俺が一番分かってる。」

ガイラルのその一言で、ガブリアスは微笑を浮かべて、「それもそうだな。」と言った。

「兄弟ってのは似てるもんだな。まあ今更だけどな。」

ガイラルはそう言うと、

「よし。痛みは大分引いた。スピード上げんぞ！」

ガイラルは全力で走り、それに二人とも着いていった。

ガイラルサイド..神秘の森と黒い影（後書き）

技紹介です。

シャドーダイブ

実際とは少し違うので書きます。 体を影の中に潜ませ、影がある所から体を出現させ攻撃する。ギラティナ専用技。

竜突

竜と風のエネルギーと単純な腕力で繰り出す、光速の正拳突き。

氷爪撃

氷のエネルギーを纏わせた爪で切り裂く技。相手の行動を凍らせて妨げることも出来る。

氷爪連撃

氷エネルギーを濃く纏わせた爪で切り裂く技。無機物なら一瞬で凍らせる。氷が主なエネルギーの人しか出来ない。

不屈波動弾

波動弾＋自分が受けた総合ダメージの威力の波動弾のカウンター版。
ダメージ無しならただの波動弾。

波動翔

波動弾を剣から放つ技。斬るときに出る風圧で高速回転しながら相手に飛び、切り裂く。

いかがでしたか？二章に入って自分もテンションが上がっています
(笑)

ありがとうございました！

それでは！

ルカリオサイド…フレイム山脈

エアームドからの襲撃後から数十分たち、ルカリオ達はフレイム山脈の近くまで歩いていった。

活火山のため山の山頂からは溶岩が溢れているとのことだが、山頂は雲の上にあるため見えない。

ルカリオ達はそのそびえ立つ山の下にいた。

「たっけえ山だな。山頂どころか半分も見えねえ…。」

ルカリオは首を上に向けるが、見えるのは山の半分ほどだけ。それだけ高い山だということだ。

「それもそうです。この山は何千年前から活火山ですから。今歩いているこの地面もこの山が作ったのですし。」

サーナイトは地図を読みながら言った。

「それで？その洞窟とやらはどこなんだい？サーナイトちゃん。」

ゾロアークは相変わらずちゃん付けでサーナイトに聞いた。

不満そうな顔をしながら、サーナイトは地図を見た。

「えと…。もう少し奥です。」

サーナイトに言われた通りに奥へ歩いていく。

すると、数百メートル先に不自然に穴のあいた洞窟を見つけた。

「あれですね。あとは中に入って、下に降りるだけです。」

サーナイトが見つけた洞窟に向かって歩き出す。それに続けてルカリオ達も歩きだした。

中に入ると、洞窟内は真っ暗でうかつに進めなかった。

「暗いな……。たいまつでもありゃいいんだが。」

ルカリオが辺りを見渡す。だがたいまつどころか木一つ無い。

岩石で構成されたこの周辺は植物の種など飛んでこない。

砂漠みたくオアシスも無いため万が一飛んできても育たず枯れるだけなのだから。

「じゃあ……。誰かランタン何か持ってないか？それか代わりになるもの。」

ルカリオが全員の腰に付けた大きめのポーチを指差した。

するとサーナイトがある物を取り出した。

「これなんかどうです？アイスの宿で使われていた暖炉の動力元の『ホットオイル』。ガブリアスさんから渡されました。」

その小瓶に入った油は、青い色をしていた。

「ふんふん。なるほどね。」

青い油に唾然とする中、ゾロアークが納得するように頷いた。

「その油はね。たった数滴でゆっくりと燃えるんだ。その量なら一周間は持つね。」

とゾロアークは言った。

「なるほど。」とルカリオとバシャーモが頷いた。

だが、まだ問題はあった。

「んで？どうやって灯りに応用するよ？」

「そこでバシャーモ。君の出番だ。」

バシャーモの質問にゾロアークが即答した。

ゾロアークは自分のポーチから縄を取り出した。

「君ってさ。火傷とか大丈夫そうだね？」

ゾロアークがニヤリと笑いながら聞いた。

「お、おう。マグマだろうが大丈夫だ。」

と戸惑いながらも答えた。

「ならこれを腕に巻き付けて、さっきの油をかけて火を付けて！」

「ええええええ！！？」

ルカリオとバシャーモが同時に驚いた。

「大丈夫ですよ！それで前歩いてくれたら灯りになりますし。」

サーナイトがニコニコしながら言った。

「まあ確かに魔術では火を纏わせてるけど、あれは自分が出したエネルギーの炎だから勝手が違うしな…。」

バシャーモは困惑しながら言った。

「そうだって！いくらバシャーモでも自分の腕を燃やすなんて…。」

ルカリオが戸惑いながら言った。

だが、ゾロアークは軽く笑って答えた。

「フフ。大丈夫というのはそういう意味じゃなく、その油の成文よ。」

ゾロアークが続けて話を続ける。

「その油はね、火は付くけど火傷はめったにならない。まあ最低で60℃くらいにしかないよ。」

と言った。

サーナイトはニコニコとしながら続いた。

「その油はあるエネルギーが籠っています。それは氷エネルギーです。それが油と混ざり合い、温い炎を出せるのです。」

とても説明口調で話した。

ルカリオは相変わらずあまり状況は掴めていないが、バシャーモは頷いた。

「なるほどね。いわば魔術と道具の融合物質か。油にはないエネルギーを合わせて別の物質を作られたって訳だ。じゃあ、やりますか！」

「……よつと！くくったぜ。さ、油を。」

バシャーモは螺旋状に腕に縄をくくりつけた。

「その縄も特殊な物なのか？温度は低くてもただの縄なら燃え付きちまいそうだけど。」

ルカリオはふと思った事を口にした。

サーナイトはその質問に対して頷きながら言った。

「勿論。じっくり燃えるように鋼エネルギーを組み合わせた縄です。じんわりと無くなるので相性が良いです。」

また説明口調な話し方だが、ルカリオの疑問は解けたようだ。

バシャーモが縄に着火し、先頭を歩く。

全く顔色一つ変えないので熱くはないようだ。

それを見てルカリオは少しホッとしたようだ。

「良く燃えんな。でも熱くねえ。確かにアイスにはぴったりだな。」

バシャーモはそう言って手を見つめた。

「そうだな。アイスは少し寒いけど、普通の暖炉じゃ暑いくらいだしな。」

ルカリオは納得したように頷いた。

アイスはガイラルが言ったように暖かい雪が降る村。

暑くもなく寒くもないが、住人達は困っていた。それで、その油を

作り出したのが、

ゾロアークであった。

「しかしゾロアークさんは凄いですね。こんなアイスには大切な油を作るなんて。」

サーナイトはゾロアークの隣に歩きながら言った。

「まーね。まあ色々あの村には感謝しなきゃいけないし…。少しは手助けにはなったかな。」

ゾロアークは少し何かを思い出したような顔をしていた。

歩く事数十分。バシャーモがある事に気がついた。

「…！ 明るくなってきたな。すぐ下には出口みたいだ。」

バシャーモがしゃがんで螺旋の階段の下を見ると、白い太陽の光が穴から射し込むのが見えた。

「やっとか…。足が痛かったぜ。」

ルカリオがため息をつくとき、足を抑える素振りを見せた。

「もう少しですね。さ、急ぎましょう！」

サーナイトがルカリオの近くに寄り、肩を叩いた。

「ああ。そうだな！」

ルカリオはサーナイトに言われて、元気を出して言った。

フレイムとはどういう村なのか、楽しみと不安が入り交じっていた
…。

ルカリオサイド..フレイム山脈(後書き)

フレイム山脈の中での話でした。

色々とぐだぐだでスイマセン…。

そして糞遅い更新も…。

ありがとうございました！

ガイラルサイド…グリーン

ギラティナを撒いた後、ガイラル達はペースを全く落とさずに走り続けていた。

ギラティナが追ってくるかと踏んで、ペースを上げたのだが、いらない心配のようだった。

「……………?」

ガブリアスが走り抜ける中で、あることに気付いた。それは、明らかに少なくなってきた木の数だ。

「木が少なくなってきたな…。グリーンまでもう少しか。」

ガブリアスはガイラル達と比べてペースを少し遅くしてる為、回りを一番把握していた。そして木だけでなく、所どころに人が歩いたと見られる足跡があった。

「ガイラル、マニユーラ。もう近いぞ。」

走りながらガブリアスはガイラル達に呼び掛けた。

「おお！ やつとだな。」

ガイラルは小さくガッツポーズをし、スピードを上げた。

「しかしギラティナは何で怒ってたんだろうね。」

マニューラはつい先ほどの事を思い出して言った。

「多分だが、アルセウスが関連しているな。俺達がアルセウスの仲間と勘違いしたんじゃないか？」

ガブリアスは代々の予想で言ったが、マニューラは納得した。

本来ギラティナは、影の中にあるとされる反転世界の王たる存在と言われている。だが反転世界を静かに守っているので、地上に来るのはとても珍しいのだ。

「……？…人じゃない？あれ。」

マニューラがふと前を見ると、人影が木の実を取っているのが見えた。

すぐにガイラル達はスピードを落とし、その人に近づいた。

「なあ。アンタ。グリーンがどこか知らないか？」

ガイラルがその人に尋ねると、その人は驚いた顔で

「あ…。うん。すぐそこだよ。　しかし客人とはね…。」

その男性は聞いてもいないのに名乗った。

「俺はゴリキー。この町の案内役さ。」

ゴリキーは軽く笑いながら言った。

「あ、ああ。俺はガイラル。こいつらはガブリアスとマニユーラだ。よろしく頼む。」

気さくな態度に少し驚き、戸惑いながら握手した。

ゴリキーに言われるがままついてきたら、木で見えなかった巨大な木の扉が現れた。

恐らく数十メートルはある巨大な扉だ。

ゴリキーがその前にいた管理人に話しかけると、扉がゆっくりと開き始めた。

「この町が綺麗なのはこれがあるからか。なるほど。」

ガブリアスは自分のノートへと何かを書きこんだ。

「ところでさ。ここに……—がいるって本当なの？」

マニユーラが小声でガイラルに耳打ちした。

ガイラルは何も言わずに頷いた。

開ききった扉の中へと入ると、そこはとても綺麗かつ清潔な町が広がっていた。

「…凄い町だ…。資源が豊富なのも頷ける。」

ガブリアスが辺りを見回すと、殆どが木で出来た建物ばかりだが、その作り方が独特だ。

恐らく何千年と生き続けているであろう横幅だけで数十メートルはある大木の中を掘り、それが家や店となっている。

さらに漁港があり、食料も資源も富んでいる。

「さっ。村長の所に行こうかな。君たちはどうする？」

ゴーリキーがガイラル達に聞く。

「いや、俺達は町をぶらつくよ。親切にどうも。」

軽くガイラルは頭を下げ、ゴーリキーも頭を下げてから、歩いていた。

「さてと。まず色々と見て回るか。」

ガブリアスがそう言うと、三人は門の前を集合場所にし、その場を後にした。

ガイラルはまず、漁港に行った。

相当いい魚が取れると、立派な漁船や、賑やかな雰囲気から容易に想定出来た。

「漁港に来たのはいいが、何をするんだったか…。」

ガイラルは一人でブツブツと言っていた。

「確か…。えと、船を借りるんだっけか？だめだ。ガブリアスに聞きに行くか。」

ガイラルは漁港を出て、ガブリアスが向かった商店街へと走っていた。

マニユーラは、その町の地図を頼りに戦闘用品が売っている店を探していた。

明らかに暗く、埃が立ち込める路地裏にあるらしいが…。

「うっ！…埃っぽいなあ…。これは骨が折れるね。」

色々文句も良いながら、マニユーラは店を探した。

ガブリアスは商店街にて、色々と便利な物を買っていた。

「よし。こんな所か。」

頭が良いガブリアスだからこそ必要な物をしっかりと見極めて買っていた。

更に、ある人物を探すため、一切の油断もしていなかった。他の人からは怖がられるだろうが、ガブリアスは気配を探り続けていた。

「おーい！ガブリアスー！」

ガブリアスは突然声が聞こえたため、驚いた。

もちろん声の正体はガイラルだ。

「俺って何を買ったっけ？」

ガブリアスの近くに寄ると、こう言った。

ガブリアスは呆れた顔で

「ハァ…。数十分前に言っただろう。数日後に出る『エレキ』行きのチケットだ。」

ガイラルはそれを聞くと、

「サンキュー！行ってくる！」

全力で走っていった。

ガブリアスはため息をつき、再び気配を探った。
すると、

「……………！アイツだ…。」

ガブリアスの後ろを通っていった人は、水色の体で、大きな顎をしているワニのような姿だった。

かなりガツチリとした体系をしている。

「おいっ。アンタ。まさかオーダイルか？」

ガブリアスがその通りすがろうとした人を呼び止めた。

「ん？そーだけど…。ってお前！！」

オーダイルと呼ばれたその人は、振り向いて驚いた。

「ガブリアスじゃねえか！久しぶりだなあおい！」

「ああ。久方ぶりだな。」

オーダイルはガブリアスの近くに寄った。

「てことは、反神の支配者でもまた始めんのか？」

「まあ、詳しい事は決まっていないが、そんな所だ。」

オーダイルは腕を組ながら頷いた。

するとオーダイルがこんな提案をしてきた。

「なあ……。久々に勝負しねえか？」

「ほう。別にいいが、なら賭けでもしないか？」

ガブリアスは賭けを提案した。

オーダイルは「参ったな」と呟きながら頭を掻いた。

「なら、お互い負けた方に秘密の事を言わないか？安心しろ。ガイル達には言わないよ。」

ガブリアスが余裕綽々とした顔で言った。

オーダイルはニヤリと笑い、

「おいおい。俺が負けるのが前提か？」

「フフ。さあどうかな。」

「このやろ……。後悔すんなよ？」

ガブリアスとオーダイルは一緒に町の外に歩いていった。

ガイドラルサイド..グリーン(後書き)

更新が遅れました…。

反神の支配者の四人目が判明しました。

次回をお楽しみに！

ルカリオサイド…暴走

ルカリオ達が洞窟を出ると、想像していた町とは違った。

ガブリアスから聞いた話だと、のんびりとした田舎町と言っていたのだが、違った。

「何だ…？これ？」

眼前に広がるのは荒れた町、自然に荒れたのなら、簡単に片付けられるのだが、そういった感じではない。

明らかに人の手で壊された建築物。

半壊した住宅街。まるで隕石でも落ちたかのようなクレーター。

そして、以前オノノクスの兵士が着ていた鎧の人が何人かいた。

「神の支配者か！さっきのエアームドは恐らく偵察か！」

バシャーモが辺りを見渡すなり言った。生半可では先へ進めないのが分かった。

「みんな行くぞ…！多分大人数を相手にするかもしれない…。しかもエアームドが言っていたゴウカザルとかいうのもな。」

ルカリオが町に入るなり全員に言った。

全員頷き、ルカリオが走り出すと同時にバシャーモ達も走り出した。

進むなり直ぐに神の支配者の兵士が仲間を呼び、銃を発砲した。

「サーナイト！」

ルカリオがそう呼ぶと、サーナイトは直ぐ様目を瞑り、魔術を唱えた。

「皆を包め！『サークルバリア』！」

一ヶ所に固まったルカリオ達を覆うように、円柱形の薄いバリアを張り巡らした。

容易に銃弾を弾き、サーナイトはバリアを解いた。

ゾロアークは辺りを見渡し、兵士の数を確かめた。

分かるだけで三十以上の兵士、しかも遠くで聞こえる戦闘音からして直ぐに片付ける必要があった。

「サーナイト！またバリアを私以外に張って！さっきより厚くね。」

ゾロアークはそうサーナイトに言い、黒い魔方陣を地面に出現させた。

「…はい！任せて下さい。」

サーナイトはすんなりバリアを張り、ゾロアークは魔術を唱え始めた。

ガイラルが以前使った、召喚魔術と呼ばれる魔術だ。

召喚魔術はグラティナのように何かを統べる王。の力を借りるのが召喚魔術。

直にその王と契約をし、やっと唱えられるようになる。

「蹴散らせ：！海王！カイオーガ！」

ゾロアークが叫ぶと、地面が水のように波打ち、大きな水しぶきを上げてシャチのような姿のカイオーガが出現した。

「頼むよー！命がけで契約したんだから、働いてね！」

カイオーガの頭を軽くゾロアークが叩き、カイオーガが嫌そうな顔をした。

「はあ、それが頼む態度ですか……。まあ、この程度の雑兵など一蹴しますよ。：歪め！『ダイダルウェイヴ』！！」

カイオーガはヒレのような右腕を揺らすと兵士の下の地面が水のように波打ち、一気に土の大波となり、兵士を容易く飲み込んだ。

「ハア……。サンキュー！流石の威力だね。」

「フフ、また呼んだら来ますよ。では。」

カイオーガが地面の中に入ると、地面が元に戻った。

「解除します！」

サーナイトはカイオーガの攻撃をバリアで弾いた後、バリアを解いた。

「半端ない威力だな……！すっげえ……！」

バシャーモは尊敬の眼差しでゾロアークを見た。
少し照れながらにゾロアークは頭を掻いた。

「これで先に進めるな！行こう！」

走り出したルカリオに続いて皆走った。

激しい戦闘音がする場所に。

「ん……？誰か分からんが、一人で戦っている……。」

ルカリオが恐らく町の広場であろう場所で止まると、緑色をしたトカゲのような人と、頭が燃え盛っている猿のような人が激しく戦っていた。

その近くには、背中にトゲが複数ある人が座り込んでいた。

よく見ると、その人は左腕が無くて血だらけだった。

「大変……！止血しに行きます！」

サーナイトは一目散にその人に走っていった。

「っおい……俺らも援護しに行こう！」

ルカリオ達も続き、怪我人の近くに寄った。

「あ、あんたらは……？ぐうっ！」

「喋らないで下さい！今包帯で止血を……。」

素早い手つきで包帯を腕に巻く。流石は看護師という所だろうか。

「すまねえ……。俺よりも、ジュカインは……！」

その人は辺りを見渡し、なぜか焦っていた。

「ジュカイン……？それは今あそこで戦っている人ですか？」

サーナイトが指差した人を見て、その人は頷いた。

「なんか、あの人やバそうだな……。援護しよう！」

バシャーモが向かおうとすると、その座り込む人に止められた。

「やめとけ！巻き込まれるぞ！俺はバンギラスって者だが、アイツとは友人なんだ。」

「そして、アイツは紅き目って言う目をしている。暴走しだすと止まらねえぞ！」

バンギラスはそう説明した。

「紅き目…？暴走って事はサーナイトと同じく片目だけ紅き目なのか？」

ルカリオは以前暴走したサーナイトを思い出して言った。

だがジュカインから放たれる赤い光は、赤いというよりも黒かった。

例えるなら、血のような光だ。

「迂闊に手は出せないとはいえ…。バンギラスだけでも安全な場所で休まねえと！」

バシャーモは座り込むバンギラスに話しかけたが、首を振って断られた。

「駄目だ！ジュカインがヤバくなったら援護に…。ぐう！！」

痛む左手を押さえながら言った。

「大丈夫だ！ジュカインとやらがピンチなら俺らが助ける！何よりアンタは今のままなら戦えない。」

ルカリオはそう言い、バンギラスは嫌がりながら少し遠ざかった。

「うらあああ！だあ！つでやああ！」

ジユカインは戦っている相手に向かい、腕に生えた草の剣で相手を斬ろうとする。

「おわっ！つと。」

相手は間一髪で体をくねらせ避けるが、少し右腕にかすったらしく、血が出る。

「まったく、ジャローダさんは性格が悪いなあ…。何が楽な仕事だよ…。」

その猿のような人がそう言ったのを、ルカリオが聞いた。

「ジャローダ…？てことは、アイツがゴウカザルって奴か！」

そう。この人はゴウカザル。神の支配者の幹部だ。ポケモン

「さっさと片付けたいけど…。アレは疲れるから嫌なんだよな…。」

ゴウカザルはそう呟くと、手を握りしめて前に両腕を突き出した。するとどういう訳か、ゴウカザルのエネルギー量が倍近くに膨れ上がった。

遠目で見ていたゾロアークが、そのエネルギーの量に驚いた。

「……凄いエネルギー量…。量だけなら私の三倍近くあるね…。」

遠くでも見えるほど、ゴウカザルのエネルギーは赤色に光って見えるほど満ちていた…。

「ふう…。さあ、行くよ。」

ゴウカザルは砂煙と共に一瞬で姿を消し、ジュカインの背後へと回った。

「…！」

ジュカインが気付いた時には、ゴウカザルは既に殴りかかっていた。

「『一ノ拳』（いちのこぶし）！」

右手で正拳突きのように繰り出されたパンチは、限りなく音速に近かった。

鈍い音と共に、ジュカインは数十メートル吹っ飛び、何とか立ち上がった。

だが、口から血を吐き出した。

「つはあ…！ウウ…！」

だがジュカインはダメージを全く気にせず、ゴウカザルの元へ走った。

だがゴウカザルは無邪気な笑みを浮かべ、こう言った。

「まさか、これで攻撃が終わりかと思ったか？」

ゴウカザルはまた地面を蹴り、ガブリアスと同等の速さでジュカイ
ンの背後に回った。

「これで終わり…。」

ゴウカザルは今度は少し跳んでかかと落としをしようとするが、その
時青いエネルギー弾が飛んできたのを視界に映った瞬間に後ろに
下がった。

「…邪魔するのはだれだ…？早く帰りたいんだけど。」

ゴウカザルが向いた先には、ルカリオがいた。

「お前の相手は俺らだ！行こう！皆！」

強敵、ゴウカザルに向かい、ルカリオ達は走り出した。

ルカリオサイド..暴走（後書き）

新キャラ達登場です！

更新も遅れたし、見ている方がいるならご迷惑をかけました…。

次回をお楽しみに！

ガイラルサイド…力試し

ガブリアスとオーダーイルは、比較的広めの広場に歩いてきた。だがかつて賑わっていた場所らしく、人気がなく、住宅街すら無い。

「このくらいの広さなら、お前も動けるだろ？オーダーイル。」
ガブリアスはそう言うと、屈伸などの準備体操をしだした。いつにもなく、はりきっている。

「ああ。これでアンタに全力が出せるってもんだ！」

オーダーイルも同じく準備体操を始め、お互いやる気満々のようだ。

二人のいるこの人気のない広場は、マニニューラが探している店屋の近くにあり、かつては闘技場があった場所。

今賑わいが無いのは、神の支配者がもたらした被害のせいだ。闘技場というものは、まず腕に自信のある強者^{つわもの}が集まる場だ。当たり前なことであり、そういった強者同士が戦うのがいわゆる醍醐味というもの。

だからこそアルセウスがここに目をつけ、この美しき町が狙われるのを恐れたのだ。

だからこの闘技場は無くなり、何年か経ち、風化した。

そういう意味では、戦う場所にはもってこいの場所だった。

「では、始めるか。」

ガブリアスは右腕を顔の前まで移動させ、臨戦体勢となった。オーダイルはその姿を見て、

「いいねえ！久々にテンション上がるねえ。」

オーダイルは両手の爪を強張らせ、力強く手を閉じた。

その会話をしている時に、実は何十人かの神の支配者が物陰に隠れていた。

「あれは、確かジャローダ様と戦ったとかいう奴じゃあ？」

コソコソとその兵達は話し合う。

「ああ！ならこっからあいつらを撃って、ジャローダ様に褒めてもらうぞ！」

「おお！」

数十mほどしか離れてないので、確かに兵が銃で撃てば余裕で届く。

「しっかり構えて…、発射！」

空を切る音と共に、銃弾はガブリアスの頭目掛けて飛ぶ。だが、危険なのはガブリアスではない。

撃った兵士だ。

「……………」

ガブリアスは容易に銃弾を爪で叩き割った。金属音と共に銃弾は粉々に砕け散った。

「すまないオーダー。邪魔が入った。少し痛めつける。」

ガブリアスは滅多に怒らない。だが、邪魔をされるのが一番嫌いなのだ。

ガブリアスはすぐに銃弾が飛んできた方に目を向け、とてつもない眼力で睨み付けた。

「ひっ！くっ、くそ！数で押すぞ！」

睨み付けられ、やけくそになった兵士達が茂みから姿を現した。

「フン、まあ半殺しくらいで押さえてやろうか。」

ガブリアスはかつて無い気迫で兵士に接近した。気迫に押され、兵士は

「ひい！ごめんなさ…。」

「許さん。竜突！」

素早くガブリアスは兵士四人を殴り飛ばし、逃げていった兵士は無視した。

それを見ていたオーダーは

「あらあ…。ガブリアスの怒りを買っちゃったね。もうガイラルとかもあれは止められない…。」

頭に右手を被せて、軽いため息をついた。

「この店…。かな？」

マニユーラは言われた通りにいい店を探していた。

そして、ついにそれらしき店を見つけた。

「こんな所で店やってて、潰れないのかな？」

マニユーラが首を傾げた。

それもそのはず、マニユーラがついさっきまで探していた埃だらけの裏路地、その奥という場所にある。

見た目はまるで駄菓子屋のようなボロボロの木造の家。だが、しっかりと『武器屋、素戔鳴^{スサノオ}』と書かれてあった。

「素…？読めないけど、武器屋とは書いてあるね。」

マニユーラは取りあえず中に入ろうと、引き戸を開ける。

酷く軋む古びた引き戸で、ギシギシと音をたてた。

中は思ったよりも広く、たくさんの武器が店中に展示しており、数々の名刀もあった。

「うわ…！すごい数だね…。しかもガブリアスが言ってたような有名な武器もいっぱい…。」

だが、一つだけ不信な点がある。

「…おかしいね。なんで店員がいない？こんな盗まれちゃうよ…。」

そう、店員どころか人さえいないのだ。これだけ名刀が揃いも揃っている、隠れた名店。盗まれたら損害は計り知れないものになる。

あまりにも無防備すぎるのだ。

「おーい。誰かいらないのかい？」

マニニューラは念のため、声を出してみる。だが、返事はない。

「うーん。どうしようか。取りあえず、ガブリアスの所へ…。」

そう言い、外へ出ようとした時、店の奥から『ガシャ！』と音がした。マニニューラはすぐ振り向いた。

そこには、オコジョのような見た目の人^{ポケモン}が立っていた。

「あー、ねむ。いらっしやい。何か買うのかい？」

その人は、マニニューラが全く気配を探れないほど、ゆっくりとレジに来ていた。

「アンタが店員かい？今日は買い物ではなくて、聞きに来たのさ。」

「聞きに来た、ねえ…。こんなしがない武器屋に何を聞きたいの？」

マニユーラはその店員の姿をまじまじと見ていた。

よく見ると、所どころに傷があり、数々の戦いをしていたのが分かった。

「私が聞きたい事は――――――」

「オーラブレードの事さ。」

店内が静まり返った…。

ガイラルサイド..力試し（後書き）

前回の技紹介をしていませんでした…。

サークルバリア

円柱形に人を囲むバリアを張る。魔法壁よりは防御力は低いが、360度囲めるから使い勝手が良い。

海王カイオーガ

カイオーガと直にある契約をし、魔術を唱える事で呼び出す。様々な攻撃が繰り出せて、範囲が広い。

一ノ拳

音速に近いスピードで放たれる正拳突き。一から五まである技を連続で繰り出すと、ある事がおきる。

次回をお楽しみに！

ルカリオサイド…カウントダウン

ゴウカザルは近くまで接近してきたルカリオ達を一人一人見て、頷いた。

「ははあ。君たちがルカリオとその仲間達か…。エアームドじゃ歯がたたない訳だ。」

ゴウカザルは笑いながら右手を前に出した。

「…っ!？」

思わずルカリオは大きくバックステップし、剣を鞘から出そうとした。

「ははっ! そんな警戒しなくて良いじゃん! 『まだ』 危害を加えようとはしていないし。」

陽気に振る舞ってはいるが、仮にも神の支配者の幹部だ。ルカリオ達は油断なんて微塵にも出来ない。

「この町をどうして襲ったんだ!」ルカリオが怒りながらゴウカザルに叫んだ。

ゴウカザルは笑いながら、
「ジュカインを捕らえるためだよ。ちよつとコイツの紅き目は特別でね。」

「だからって…!」

ジュカインを出すために町を襲ったゴウカザルに対して、サーナイトは静かに怒り、紅き目が発動した。

「ルカリオさん！この人は許せません！戦いましょう！」

「どのみち、相手は戦るき満々だぜ…。」

ゴウカザルはとても嬉しそうにほくそ笑み、

「正直アルセウスとかどこでも良いんだよね。あいつの理想郷とか知るかっつの。」

ゴウカザルは呑気に笑いながら、言った。

「ただ、俺は強いヤツと戦いたいだけさ！行くよー！」

「!？」

ルカリオ達は身構えたゴウカザルを見て、直ぐに全員が一定の距離まで離れた。

だが、ゴウカザルは反応が僅かに遅かったルカリオに、一瞬で近づいた。

「速っ！？くっ！」

ルカリオは瞬時に両腕を重ね、十字形にして殴られるであろう腹をガードする。

「すごい反応だね！『一ノ拳』！」

ジュカインに放った正拳突きとは違い、腹にくるアッパーのように殴ってきた。

ルカリオの思惑通りに腹に攻撃が来たが、予想外の出来事が起こった。

「これで、1カウントだ。」

ゴウカザルがニヤリと笑い、ガードしたはずのルカリオの腕がアッパーの威力に負けて、体ごと吹っ飛ばされた。

「なっ!？」

素早くルカリオは着地したが、今度はルカリオが異変に気づく。

「おかしい…。ガードをぶっ飛ばす威力で腹を殴られたのに、全然痛くねえ…。」

そう。両腕のガードを楽々崩せる一撃を食らって、腕も腹もダメージが無いのだ。

「教えてあげるよ…。俺の魔術と武術の混合、『カウントナックル』をな。」

ゴウカザルは余裕の表情を浮かべながら話し出した。

「俺の『カウントナックル』は、あるルールがある。」

「まず、俺が使った『一ノ拳』はカウント1。つまり始まり。まあ自分の後ろを殴られるか前を殴られるかでまた違うけどね。」

「この『一ノ拳』の他に『二ノ蹴』『三ノ火』『四ノ剣』『五ノ槍』とある。これらを全て受けると…。ははっ！、まあ楽しみにしてい
てね。」

ゴウカザルはまた無邪気に笑うと、一瞬で姿を消す。

「つつ！サーナイト！」

ルカリオはサーナイトに叫ぶ。だが、サーナイトが魔術をやる前に
ゴウカザルが

「カウント2い！『二ノ蹴』！」

今度はバシャーモの顔に全体重をのせたかかと落としを浴びせた。

「っあ！何なんだ？何故ダメージが無い！？」

明らかに顔をかかとで蹴られたのに、痛みも傷も無い。

ルカリオは相手のペースに乗せられまいと、一気にゴウカザルに接
近する。

「俺らはここで負けるわけにはいけないんだよ！」

すでに『ブースト』を取得したルカリオは大きく右足で土を踏み、
一歩で近づいた。

だがゴウカザルはそれを予測しており、右腕に濃くエネルギーを充
満させる。

すると、ゴウカザルの右腕がバシャーモが『フレアバーン』を放つ時のように、右手が発火した。

「一人で攻めない方がいいよ！後で苦しい思いをするぜ？」

振りかぶるルカリオの右手の剣を左手で殴り飛ばし、右腕で火のエネルギー弾をゼロ距離でルカリオの腹に放つ。

「『三ノ火』 い！…カウント3だねえ。」

「つつっ！！」

ルカリオはゴウカザルのエネルギー弾をもろに受け、吹っ飛ばされる。

「ルカリオさん！」

サーナイトが飛ばされたルカリオを助けようとルカリオの元へ走る。

「来るな！俺は大丈夫だからゴウカザルから目を離すな！」

飛ばされながら体制を戻しつつあるルカリオが叫んだ。

サーナイトは走りを止めて、「わ、分かりました…！」と戸惑いつつも言われた通りにゴウカザルを見る。

ゴウカザルはそれを見て、

「ふーん。いいチームだね…。特にルカリオは。流石だね。だけど

…、
」

ゴウカザルは何かを言いかけたが、ゾロアークが魔術を放とうとするのを見て黙った。

「貫け！魔術！『アッシュランス』！」

ゾロアークが魔術を唱えた途端、ゴウカザルの頭上に灰色の巨大な槍が出現した。

そしてゴウカザルにその槍は落ちてきた。

「『赤髪の魔術師』…。魔力は俺より下だけど、魔術に対しての知識は『神の支配者』の比じゃないね。」

ゴウカザルは避けようとせず、右腕にまた魔力を溜める。

そして大きくゴウカザルはジャンプし、槍の切っ先に殴りかかった。

「『アッシュランス』に対して殴りかかった！？」

ゾロアークは初めての経験なので、驚きを隠せないでいた。

『アッシュランス』の切っ先とゴウカザルの拳がぶつかり、そこからとてつもない風圧が起った。

風が土を巻き上げ、砂煙が辺りに立ち込める。

その場にいる全員の視界が砂煙で見えなくなり、警戒を強めた。

その時にジュカインの紅き目が消え、普通の状態へと戻った。

「…あれ？俺は何を…。…そうだ！バンギラスが腕を吹き飛ばされてから…。」

そう一連の事情を思い出し、ジュカインはまた怒りをあらわにした。

だが、長く紅き目を発動していたので紅き目は発動しなかった。

ジュカインが言葉を言ったのを聞いて、ルカリオが辺りを見る。

「ジュカイン！アンタも隠れてろ！」

どこにいるのか分からないので、ルカリオはやみくもに叫ぶ。だがジュカインは

「誰だか分からないけど、アンタに心配されるほど俺は弱くねえよ！これは俺の問題だ！引っ込んでろ！」

「んだと！？」

砂煙で分からないのに、ルカリオとジュカインは口喧嘩を شدした。

やがて砂煙は晴れてきて、ゴウカザルが出てくるのを見て、全員身構えた。

「あら、ジュカイン目が覚めちゃったか…。」

ゴウカザルは「参ったな…。」と頭を掻きながら言い、ルカリオ達に視線を向けた。

「こりゃ、半殺しにしても連れてかないとな…!!」

とエネルギー量が爆発的に上昇し、ゴウカザルから風圧が巻き起った。

「いよいよ本気って所か…!?!」

ルカリオは覚悟を決め、紅き目が発動する。

それを近くにいたジュカインが横目で見ていた。

「あいつも紅き目か…! 一体何者なんだ…?」

ジュカインはサーナイトとルカリオが紅き目であることが分かったので、少し戸惑っていた。

「行くぞ…! サーナイト! バシャーモ! ゾロアーク!」

ルカリオが大声で合図し、三人は

「了解!」

と声を上げて、一定の距離をとった。

「食らえ! 風牙あ!」

ルカリオは大きくゴウカザルから離れ、弾かれた剣を取った。

そして剣を地面に刺し、一気に振り上げた。

「こんな衝撃波を食らうと思うのかい？ 詰めが甘いんだよ！」

ゴウカザルは地面を殴り、殴った地面がクレーターのように陥没した。

そして、盛り上った地面が衝撃波を相殺した。

「サーナイトオ！！」

ルカリオは弾かれる事を予想していたので、僅かな焦りも見せずにバックステップする。

声に反応したサーナイトは、唱えていた魔術を放つ。

「降り注げ！ エネルギーの雨！ 『サイコレイン』！」

サーナイトの上げた右手から何度も上空にレーザーが放たれ、まるで雨のようにゴウカザルへと降り注いだ。

『サイコレーザー』と『ナイフレイン』の合体技とも言える。

「っ！ やるねえ…。」

ゴウカザルは不意を突かれ、『サイコレイン』を全く避けられなかつ

た。

また衝撃で砂煙が少しあがるが、すぐに晴れた。

砂煙からゆつくりとゴウカザルが歩いてきた…。

傷こそあるが、致命傷は受けていなかった。

「サーナイトねえ…。アイツは逆にエネルギー量が半端なく高い…。才能ってとこかな。」

ゾロアークの時のようにまたルカリオ達を分析する。

サーナイトは少し悪寒が走り、思わず更に後ろへ下がる。

ジュカインはルカリオ達の戦いを見て

「確かにあいつらは強い…。だけど、ゴウカザルはその上を行って…。俺も黙ってはられない…！」

ジュカインは凄まじいスピードでゴウカザルに接近する。

「あらら。紅き目が発動しないほうがスピードは速いんだね。」

ゴウカザルは迎え撃とうと両腕を顔の前まで持ってくる。

「俺の友人を傷つけた事、後悔しろ！『スラストクロウ』！」

ジュカインの腕についた鋭い葉を、ジュカインの手に纏う爪のように変形していった。

「うらああ！」

ジュカインは右手で上から下へとゴウカザルに斬りつける。

かろうじてゴウカザルは右腕でガードしたが、縦に切傷が入り、血が流れる。

「痛…！ジュカインはスピードがあつて、しかも技の出が速い…。」

ゴウカザルは自分がどんな状況だろうと、相手の分析をやっていた。

その執念に近い感情に、僅かにルカリオは気圧された。

「まだまだあ！」

ジュカインが追撃しようと踏み込む構えを見せ、ゴウカザルは瞬時に後ろへ下がった。

「ちっ！そう甘くはないか…。」

ジュカインは攻撃を止めて、じっとゴウカザルを睨む。

「そろそろカウント4に入ろうかな。…ハアッ！！」

手に力を入れ、ゴウカザルが何かを右腕に出現させていく。

それを止めようとバシャーモが走り出した。

「っさせるかよ！」

ゴウカザルに攻撃を仕掛けるが、既にゴウカザルはその物体が出来ていた。

「飛んで火に入る夏の虫……。まさに君の事。……カウント4！『四ノ剣』！」

その物体は、炎のように揺らめく剣だった。

右手でそれを掴み、バシャーモの左肩に勢いよく突き刺した。

「速い……！くっ！」

バシャーモが少し下がり、突き刺さっていた赤色の剣が消滅した。

今までのように、傷一つ無くなっていた。

「カウント4まで終わったね。さて、そろそろカウント5を誰に当てるか決めないかね……！」

ゴウカザルは悪魔のような顔で、ニタリと笑った……。

ルカリオサイド..カウントダウン（後書き）

技紹介です

アッシュランス

灰色の霧のような槍を相手に落とす技。エネルギーは霊と鉄。

サイコレイン

右手を高く上げ、手の平から大量にエネルギーの塊を放つ。そして相手に雨のように降り注ぐ。エネルギーは超。

スラストクロウ

ジュカインの腕に生えている葉を鋭い爪に変形させる技。エネルギーは鉄、闘。

年末に投稿です。年賀状書かないとな…。

次回をお楽しみに！

ガイラルサイド…武器職人

しばらくガブリアスが暴れた後、辺りはすっかり荒れていた。

潜んでいた神の支配者の兵士は、一人残らずガブリアスに襲われ、全員逃げていった。

「ふう…。結構いたな。」

「暴れるねえ…。なんか久々に見たわ。」

肩を回しながらため息をつくガブリアスに、オーダイルが腕を組ながら言った。

「すまないが戦いはまた今度だ。マニユーラにある大事な願いをしてるんでな。」

「マニユーラに…？そんなに危険な事なのか？」

「そうと決まった訳ではないが…。生半可な事じゃない。お前も来てくれ。」

こくりとオーダイルは頷き、早歩きでマニユーラがいる裏路地めざして歩いていった。

「オーラブレードか……。久々に聞いたね。今は誰が使ってるんだい？」

コジョンドと名乗ったその武器屋の店主らしき人は、懐かしそうに頷いた。

「今はルカリオつつう青年だよ。オーラブレードを作ったのはアンタなんだよな？」

「うん。全て僕だよ。」

マニユーラの質問に即答したコジョンドは、店のカウンターにある錆びた剣を取り、マニユーラの前に置いた。

「僕が作ったオーラブレードは、この剣がモチーフなんだ……。大分錆びちゃったケド。」

その錆びた剣をマニユーラは手に取り、じっくり見る。

「……確かに形は似てるね。んで、この剣は有名なヤツなのかい？」
マニユーラが剣をまた床に置き、質問する。

「有名ではないかな。だって、世界で一本しかない剣だし。しかもかつて使っていた人もあまり世間には知られていない人だしね。」

少し意味ありげな言い方をし、カウンターの隣に剣を置いた。

「ふーん。じゃあ、最後の質問。」

マニユーラは一言貯めて、

「オーラブレードをどうやって作ったの？ あんな変異武器、生半可な作り方じゃないはず。」

その言葉を聞き、コジョンドはヒラヒラとした腕を組み、考える素振りを見せた。

「どう作ったか…ね。これを聞いてどうするの？」

コジョンドが腕を組んだままマニユーラに聞いた。

「別にたいした意味じゃないよ。ただ、作り方が分かればルカリオの助けになる。だから、オーラブレードの力の出し方が分かれば良いのさ。」

と微笑を浮かべながらマニユーラが言った。

「ふむ…。教えると悪用されかねない程、強力な力が出せる。君かそのルカリオって人が信用出来るのなら教えてもいいけど…。」

そしてコジョンドはマニョーラに視線を向けた。

「うーん…。証明しろと言われてもね…。どうしようか…。」

マニョーラは自分が悪用しないのは分かっているのだが、それを証明出来ず、悩み出した。

それを見てコジョンドも腕を組み、目を瞑って考えだした。

「そうだね…。じゃあ、ある武器の試しをさせてよ。」

とコジョンドが言った。

マニョーラは啞然とした顔で

「武器？武器と私の悪用しないって証拠になんの関係が？」

と言った。

確かに武器で何かを証明する事など聞いた事が無い。マニョーラもそうだった。

だがコジョンドは直ぐに武器屋の奥に入って行き、沢山の剣や槍等の武器がある倉庫らしき場所を探し出した。

「どこだどこだ…。あつた！」

コジョンドが嬉しがりながら持ってきた武器は、片手で持てそうな小さい斧だった。

不思議な模様の入った木材が斧の持ち手に使われており、ただの斧ではないことは容易に分かった。

「これは…?」

「これは『真まことの斧』。嘘か真実かで使いやすさが変わる変異武器さ。」

コジョンドがマニユーラにそれを握らせ、マニユーラはその斧をまじまじと見る。

「へえ…。それで? 私はどうしたらいい?」

とマニユーラはその斧をあちこち触りながら言った。

「まず、僕が質問した事に自分が思っている事と真逆か嘘の答えか行動をして。いくよ!」

コジョンドがどんどん話を続けていき、マニユーラは少し焦りながら頷いた。

「じゃあ言うよ! 『右手を上げて』。」

マニユーラは言われた通りに右ではなく左手を上げた。

すると、斧が急に重くなり、マニユーラはバランスを崩して倒れた。

「っ!?!」

直ぐにマニユーラは立ち上がったが、斧を持ち上げる事が出来ない。

とても重くなっていた。

「これは…?」

「成功だね! その武器、試作段階だったけど。いい出来栄えだ!」
笑いながら喜ぶコジョンドを見て、

「なるほど。嘘や真逆の言葉や行動をすると、斧が重くなり、使い物にならなくなるんだ…。」

とマニニューラが納得しながら言った。

「そうだよ! だからそれを持ってきたのさ。嘘発見器としてね。」
コジョンドは嬉しそうに笑いながら言った。自分が作った物が成功したのだから当たり前かもしれないが。

「た、確かに今の状況なら使える物だけど、戦闘ではどう使うの? 敵に質問してもらおうのかもしれないと思うし。」

マニニューラが戸惑いながら言った。

「ああ。自分で言えば良いんだよ。自分で言い、自分で答える。使い勝手が良い時間は約15分間だし。重くなるのは一分間だけだ。」

「へえ…。」

マニニューラは嬉しそうに言うコジョンドを見ながら苦笑いをした。

「うん。斧がとても使いやすくなったね…。じゃあ君が悪用する危険は無いって事だね！」

悪意が無い事を無事証明出来たマニユーラは、コジヨンドも納得してくれた。

「本当かい？良かった…。じゃあ『オーラブレード』の事、話してくれる？」

マニユーラが真面目な顔でコジヨンドに問う。コジヨンドも笑わずに「分かった。」と返事した。

「さて、じゃああの武器の基本説明をするね。」

コジヨンドは顔をマニユーラに無言で向け、マニユーラは頷いた。

「ん。じゃあ五つ説明するよ。『第一』《オーラブレードは感情が高ぶる事でその剣が持つ性能を格段に上がる変異武器である》。」

「『第二』《感情で上がる性能は感情の種類によって変わる。基本

的に怒りや覚悟が一番性能が上がる。そういう場合のみ剣が青白く光輝き、魔力を帯びる。この時に帯びる魔力には制限が無い。つまり全ての種類の魔力が込められている。」

「ここからが重要だよ。『第三』《怒りや覚悟で発動した魔力は剣から自分へ吸収でき、剣は普通の状態に戻るが、吸収した肉体は一時的に誰にもついていけないほどのパワーを出せる》。」

「『第四』《当然オーラブレードから引き出せる限度がある。だがオーラブレードの力を出しきらずに殆どの肉体には限界が来る。つまりオーラブレードは少し力が残ったままになるのだ》。」

「ラスト! 『第五』《オーラブレードの力は限りなく多い。肉体に力を注ぎすぎると肉体は壊れ、何が起きるか分からない。必ず注意して使う事。それが絶対条件だ》。」

コジョンドが何も見ずにスラスラとオーラブレードの説明をした。

言い方からしてかつてオーラブレードを買った人にその事を言っているようだ。

「ふーん…。ただ力を発するだけじゃないんだね…。でも悪用されることは無いんじゃない? 肉体に宿せる力は限りがあるみたいだし。」

「僕も最初はそうだと思ってた。だけど、ある人が馬鹿な考えで悪用をしようとしてね…。僕が事前に止めれたから良かったけど…。」

「馬鹿な考え？ 一体どうやって…。」

コジョンドは少し黙った。少し苦そうな表情を浮かべ、話し出した。

「単純だけど、自分の限界を超えた力をオーラブレードから自分の肉体に注いだんだ。紅き目を使ってね。」

コジョンドはそのまま話を続けた。

「紅き目というのは、言わば動力源なんだ。そして紅き目は宿主が死んでから1日は力を放ち続ける。それをオーラブレードに注いだんだ。オーラブレードから肉体に力を注げるなら、肉体以外からでもオーラブレードへ力を注ぐことも出来る。」

「だからその人は紅き目の宿主を殺して、それを実行しようとしたんだ。自らを強くするためのね。」

コジョンドはまだ苦い表情を続けている。

「で、どうやってそいつを止めたんだい？」

「ああ。戦って止めた。勿論オーラブレードも取り戻したよ。」

「そしてあいつ…。『ゴウカザル』はこう言った。」

「『俺は誰にも負ける訳にはいかねえんだよ！！どんな手を使っても、俺は強くなってやる！』ってどこかへ行ったよ。どうして彼は

あんなに力に対して貪欲だったのかは、分からなかったケド…。」

コジョンドは少し遠い目で話した。

「ゴウカザルか…。何だか、どこかで会いそうだね…。」

ガイラルサイド..武器職人(後書き)

新年明けましておめでとうございます。

かなり遅いですが、新年初めての更新です。

今年もよろしくです。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0672t/>

～ポケモンストーリー～

2012年1月9日01時48分発行